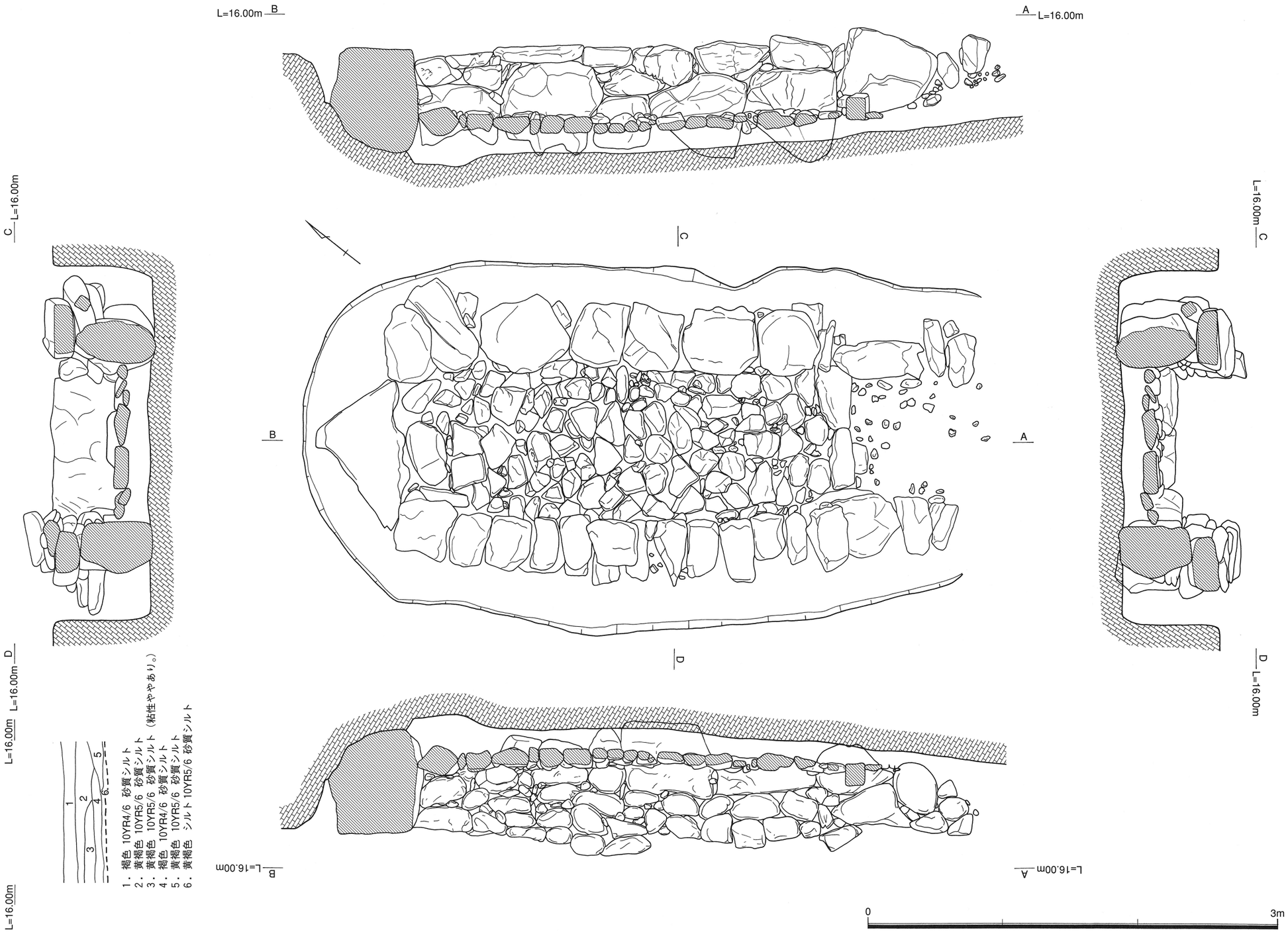
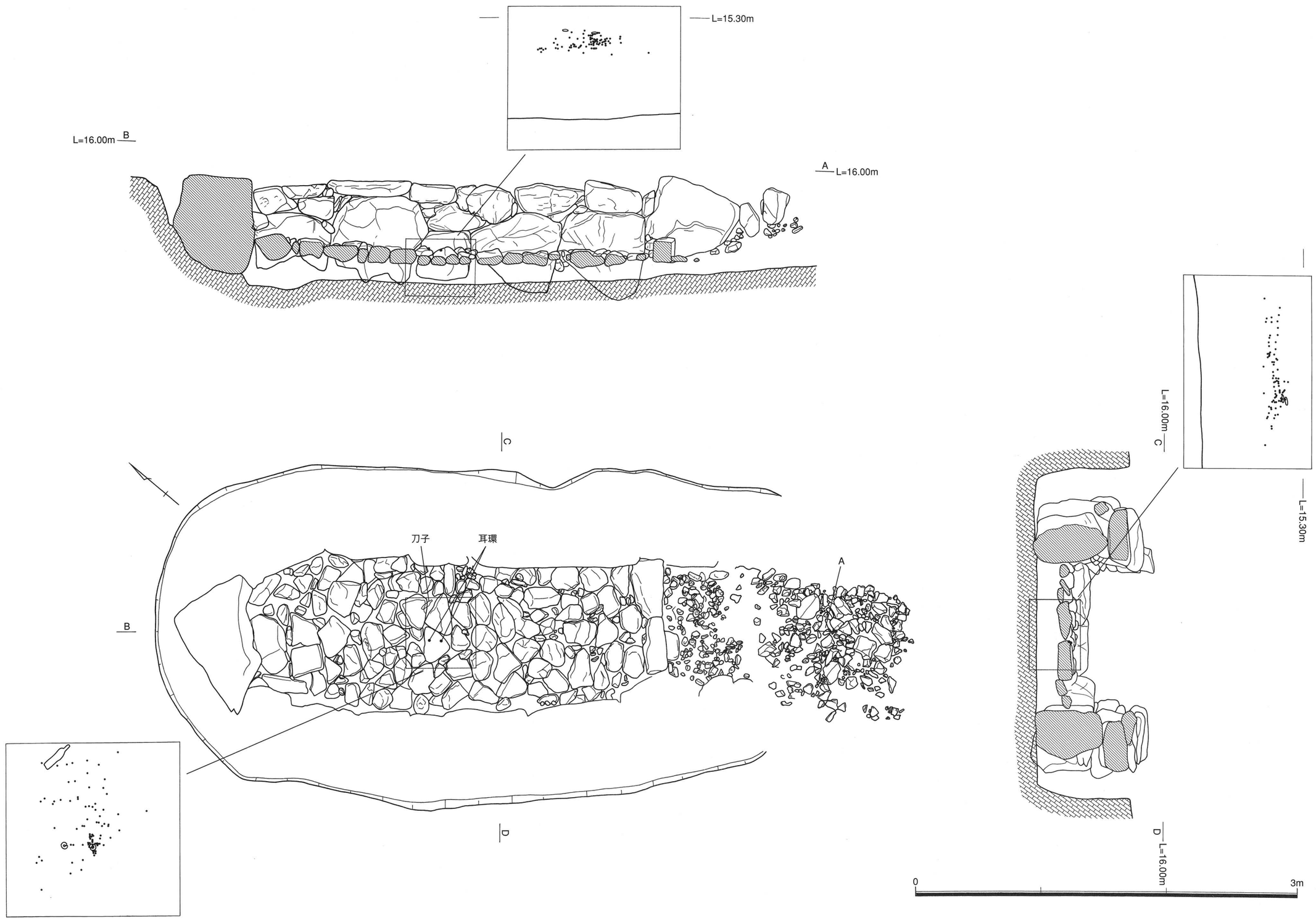



第６図　SM1001石室（第１次床面）平・断面図




第７図　SM1001石室（第１次床面）遺物出土状況分布平・断面図（鉄器・玉類）

副葬品と思われる鉄鏃・刀子・耳環・ガラス小玉等は第２次床面上から出土しており、石室中央部から北側、特に奥壁側に分布の集中が見られた。

**出土遺物**（第８・９図）

副葬品は盗掘を受けており出土量は少ない。また出土状況から原位置を保っているとは考えにくい。石室内床面から土器の出土はみられず、覆土中からの出土のみであった。土器の出土は須恵器を中心に若干の土師器がみられたが、実測可能なものはなかった。これらは前庭部もしくはその周辺からの出土に限られるが、特に集中した地点などはみられない。110・111は土師器の鉢である。小さな台を有する。形態から製塩土器の可能性がある。

石室内床面からは僅かな金属器類および玉類が出土した。玉類と耳環、鉄鏃は第２次床面から出土し、鉄鏃を除く装身具類は床面のほぼ中央付近から出土した。しかし、それぞれの合わせ部分が一定ではないため、装身具の装着状態を復元するところまでは至らない。

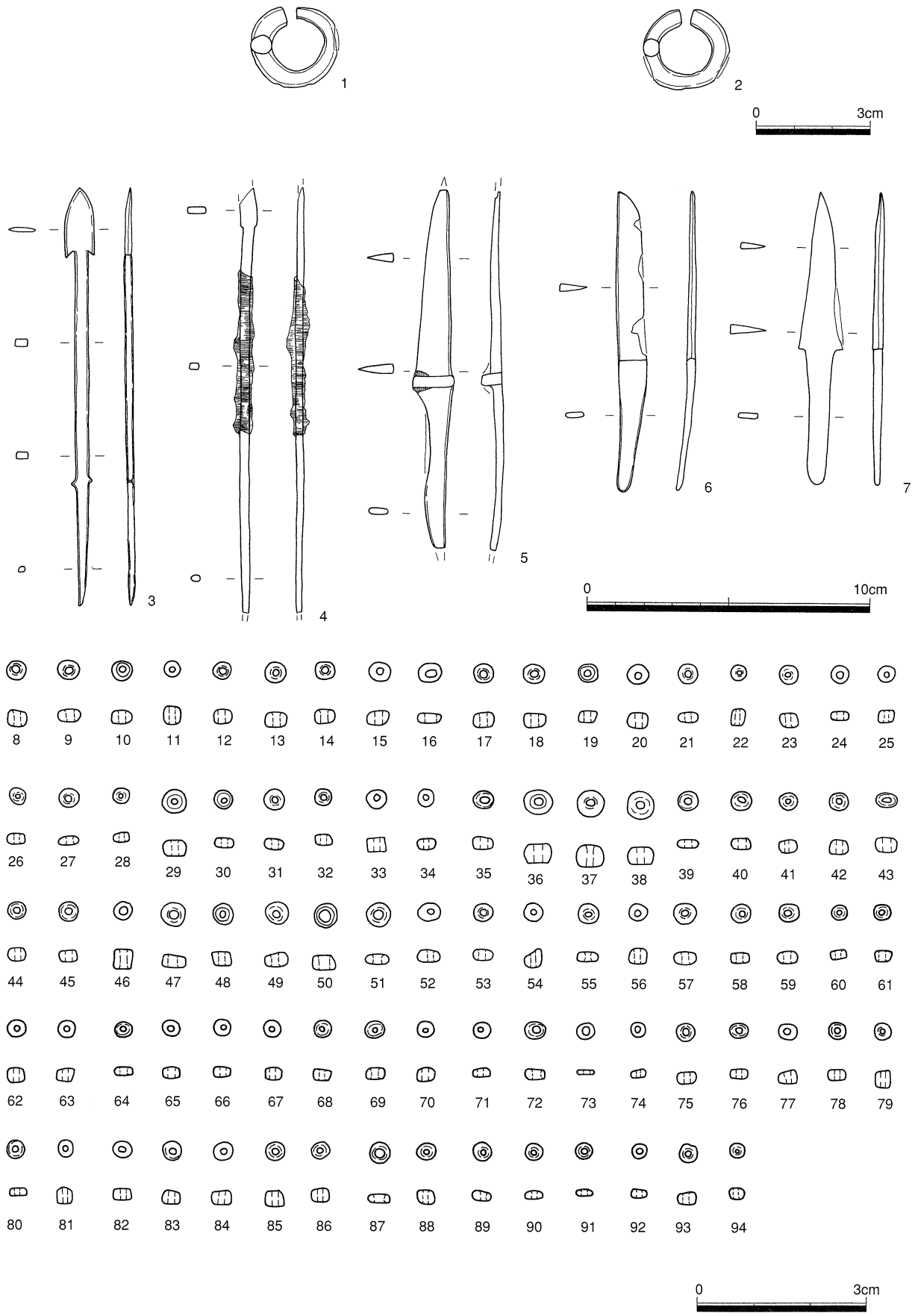
１・２の耳環は石室内ほぼ中央部の第２次床面上より出土したが、原位置は遊離している可能性が高い。耳環は銅地金胴張りで、表面は部分的に剥離しており、遺存状況は良好とは言えない。鉄器類は５点の出土があり、鉄鏃は２点出土している。３および４はいずれも棘箆被式の長頸鏃である。５～７は刀子で３点出土している。SM1001およびその周辺から出土した須恵器の年代とも併せてTK209併行段階の所産と考えられる。

３は長頸鏃である。鏃身部外形は三角形を、鏃身部断面形は両丸造を呈し、鏃身関部には逆刺を有する。頸部長は８㎝を測り、頸部関部は棘状関を呈する。茎部断面形は隅丸方形を呈する。鉄鏃３は杉山分類長頸鏃群Ａ－Ⅴ－３－１類（杉山 1988）に該当し、杉山編年Ⅹ期（MT85～TK43式併行期）の年代を与えることができる。

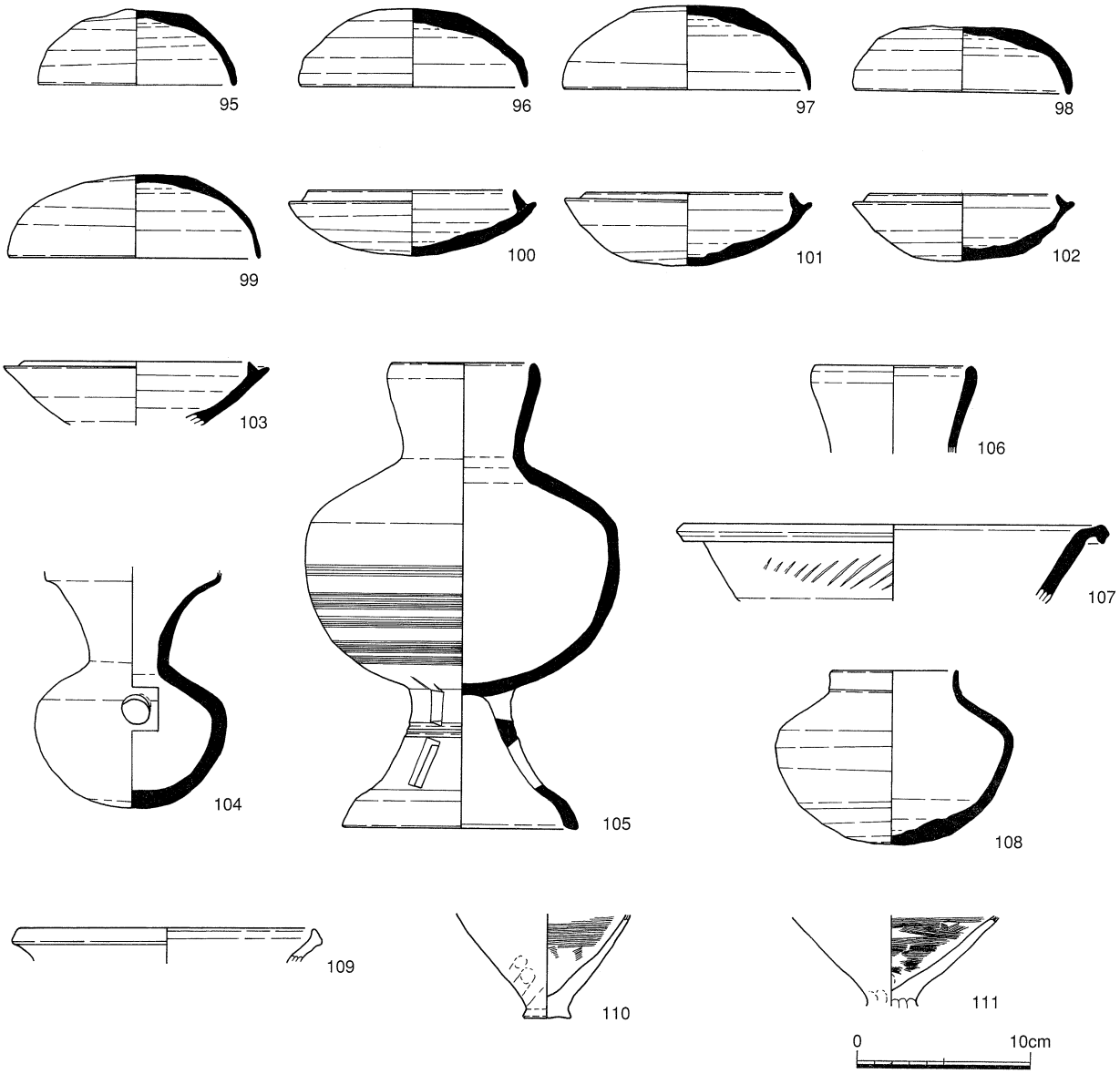
４は長頸鏃である。鏃身部外形は先端部を欠損するが三角形と推定される。鏃身部断面形は遺存する部位に刃部が観察されないことから両端刃造もしくは片切刃造と推定される。鏃身関部は撫角関となる。頸部形状は直線状を呈し、欠損するが棘状関と推定される。茎部断面形は不整円形を呈する。鉄鏃４は杉山分類長頸鏃群Ａ－Ⅳ－３－３類もしくはＡ－Ⅳ－４－３類に該当し、杉山編年Ⅺ期の年代を与えることができる。頸部に木質が残るが、主軸直交方向に木目が走ることから、鉄鏃４に伴う木質ではなく、棺材等と推定される。

ガラス小玉は89点の出土があったが、２個体は小破片で実測はできなかったため、掲載点数は87点である。８～94の玉類はすべてガラス小玉で、コバルトブルーを主とした青系統を呈するものが多く、緑色系が若干含まれる（Ⅲ　自然科学分析を参照）。

須恵器は比較的多形式にわたって出土しているが量は少ない。杯、杯蓋、瓻、壺類がみられる。杯は立ち上がりが短く内傾し、杯蓋はやや丸みをもつ天井部を呈する。杯、蓋ともに口径が12㎝前後と法量はやや小型である。台付き壺は、球形の胴部をもち、長方形の２段透しの入った脚台をもつ。瓻は口縁部が大きく開き頸部が比較的短く僅かに細い。表面は風化のために摩滅している。これらは時期的におよそ６世紀の後半があてられるであろう。また、平底の杯が出土しているが、年代的に７世紀前半とやや新しい。




第８図　SM1001出土遺物１



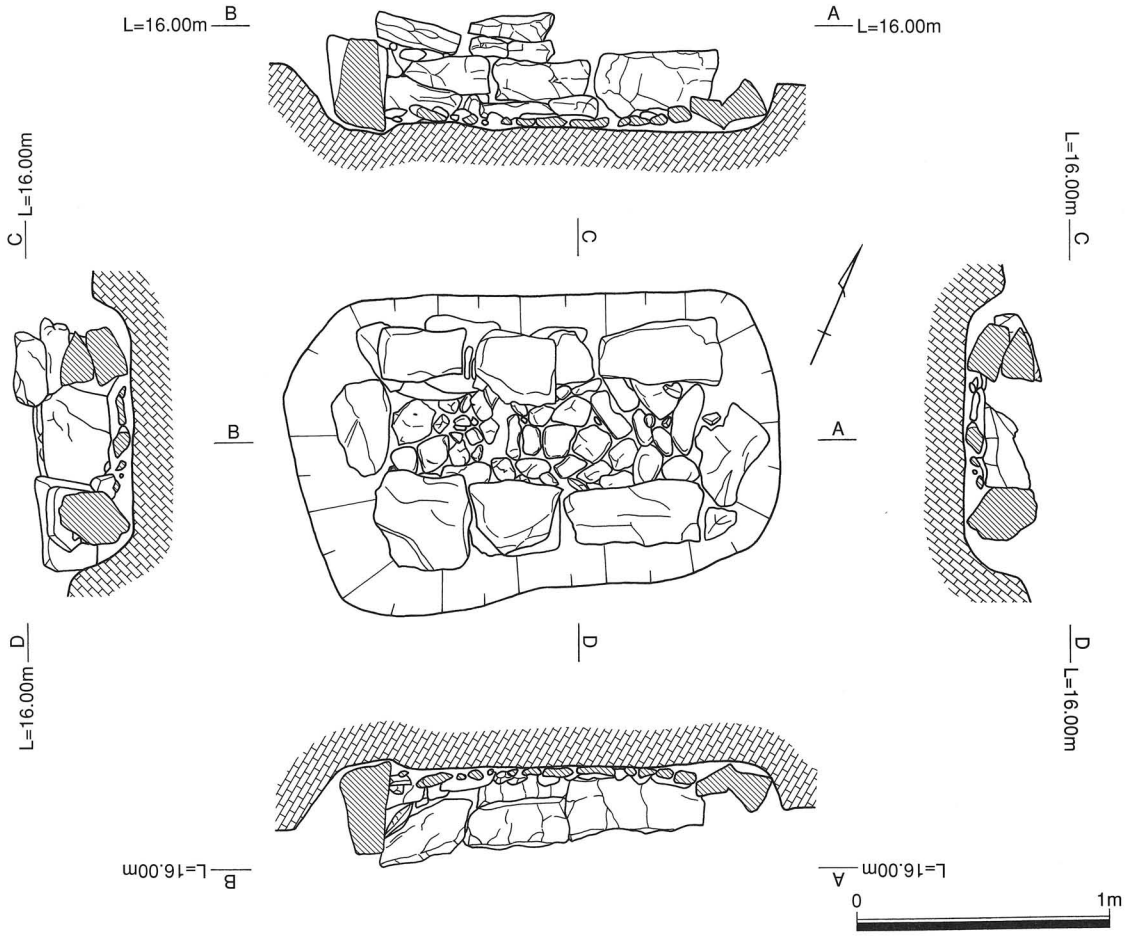

第９図　SM1001出土遺物２

ST1001（１号小竪穴式石室墓）（第10・11図）

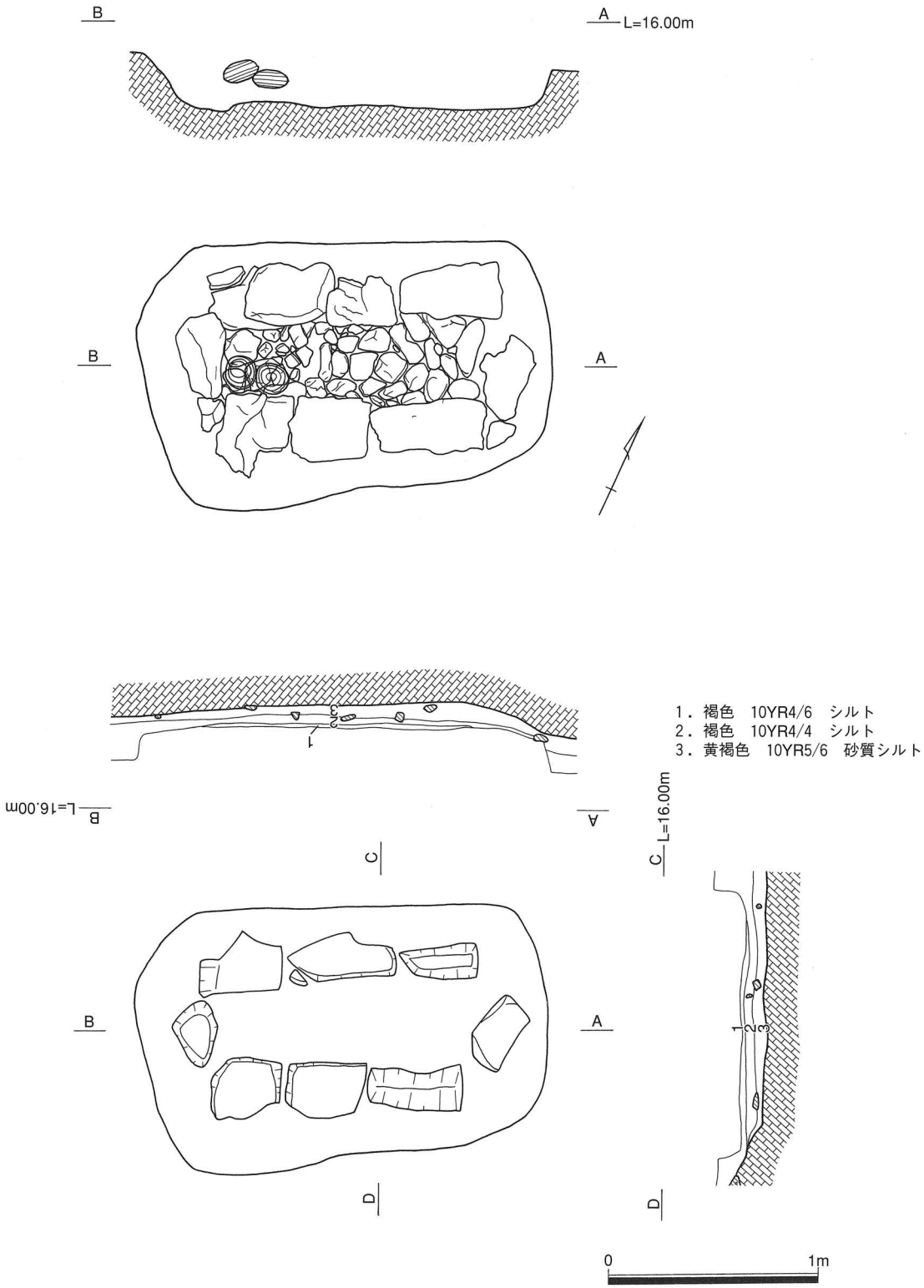
C-2グリッド、SM1001の東側に位置する小竪穴式石室墓である。SM1001同様、削平を受けているものと思われる。墓壙は隅丸長方形状を呈し、長軸1.65m、短軸1.16m、最大深度0.3mの規模を測る。

石室は天井石を消失しており、上部構造は不明である。石室石材は砂岩が使用される。ST1001は50㎝前後の直方体状の角礫を用い、平積みで壁体を構築する。壁体は１～２段程度しか残存しておらず、持ち送り等の有無は確認できない。東西奥壁基底部には角礫１個を平積みで構成する。南北両側壁は３個の角礫を小口を併せて１列に並べ２段に積み上げている。石室規模は内法で長軸1.18m、短軸0.44m、石室床面からの高さは現存で0.3mを測る。主軸方向はN-66°-Eで、石室床面平面形状は東がやや広くなっていることから、東頭位であると思われる。床面にはSM1001の第１次床面に類似するような平石を墓壙基底部に敷き詰め、構築されている。

ST1001の構築時期は出土須恵器などから、SM1001よりもやや新しく６世紀後半、TK209型式併行段階の６世紀第３四半世紀頃と思われる。




第10図　ST1001平・断面図

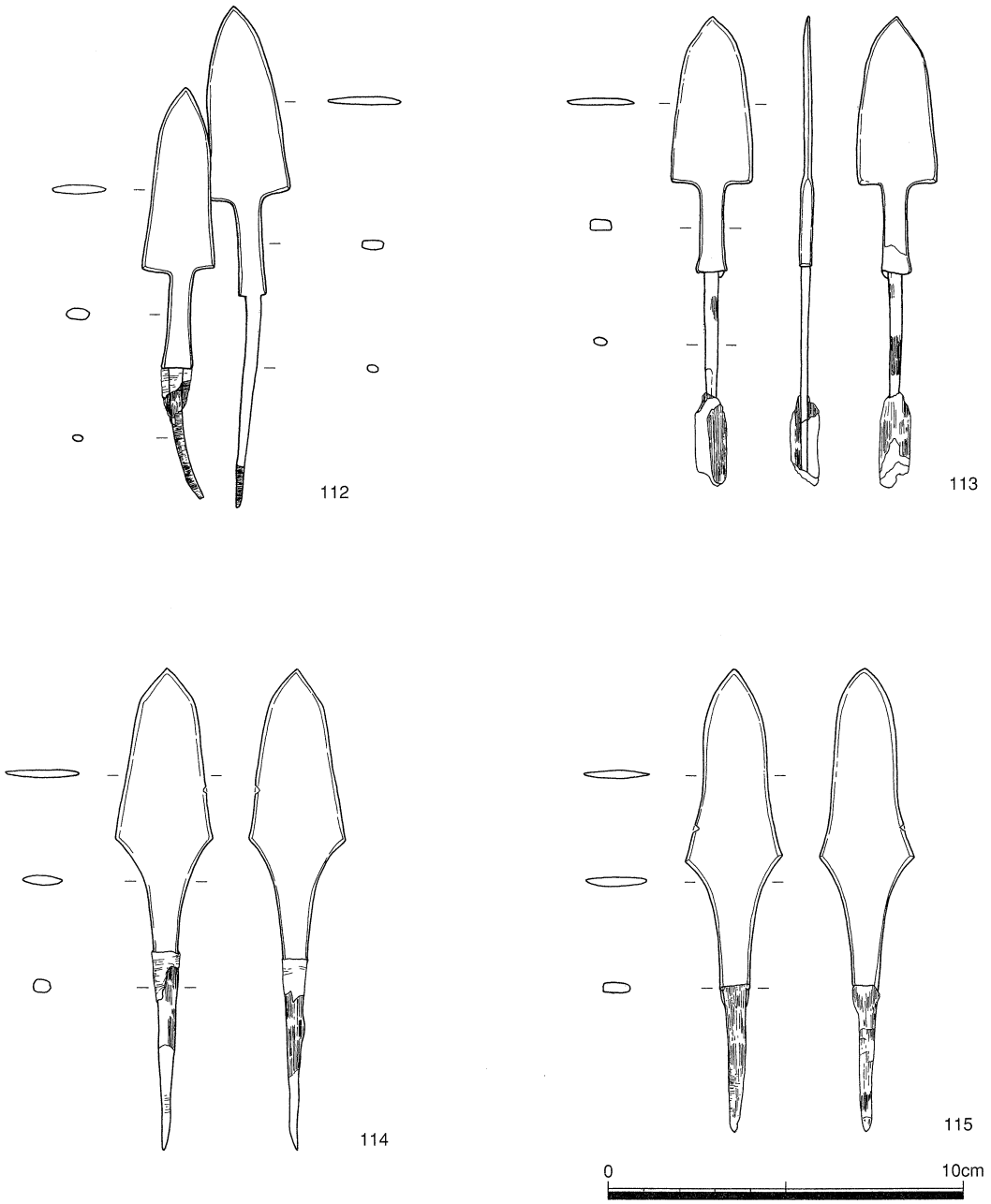



第11図　ST1001遺物出土状況平・断面および積石除去（基底部）平・断面図

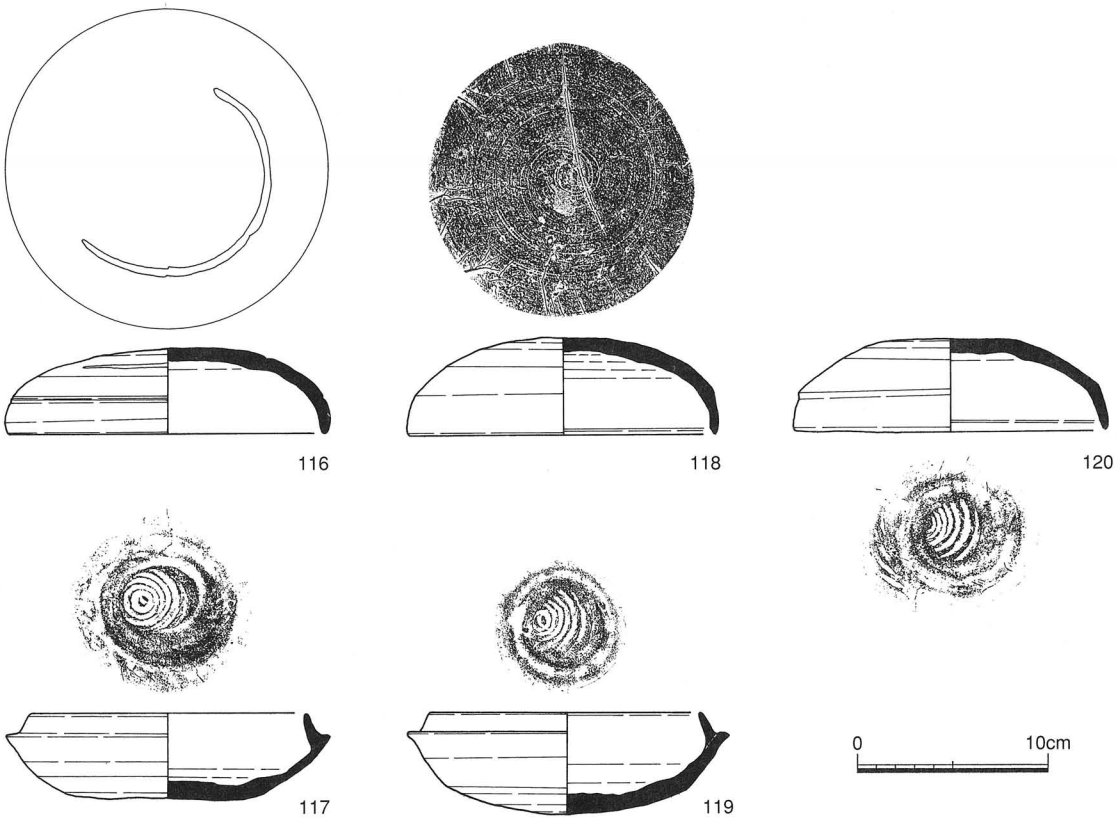
出土遺物（第12・13図）

ST1001からは全体の出土量こそ少ないものの比較的副葬品の遺存状況は良好であった。西小口南側で壁体に接するように須恵器の杯・杯蓋が組み合わされたままの状態で２組重なって出土した。鉄鏃は東小口南側で出土した。鏃身部を西側に向け、数本が銹着した状着で側壁に沿うようにして副葬されていた。鉄鏃は銹着していた状況から、一定の単位でまとめる。もしくは束ねて副葬していたものと考えられる。それぞれの遺物はおそらく副葬当時のまま元位置を保っていると思われ、埋葬時の配置の復元が可能で、被葬者の足元に杯、頭部側に鉄鏃を配していたものと考えられる。

112右は三角形鏃である。鏃身部形状は長三角形を呈し、鏃身部断面形状は両丸造造りを呈し、鏃身関部は角関を呈する。角関はやや斜行するのが特徴である。頸部形は直線状を呈し、不明瞭ながらも台




第12図　ST1001出土遺物１




第13図　ST1001出土遺物２

形関を有する。杉山分類三角形鏃群Ｂ－Ⅱ－１－１類に該当し、杉山編年Ⅺ期の年代を与えることができる。112左は三角形鏃である。鏃身部形状は長三角形を呈し、鏃身部断面形状は両丸造を呈し、鏃身関部は角関を呈する。角関はやや斜行するのが特徴である。頸部形は直線状を呈し、台形関を有する。杉山分類三角形鏃群Ｂ－Ⅱ－１－１類に該当し、杉山編年Ⅺ期の年代を与えることができる。113は三角形鏃である。鏃身部形状は長三角形を呈するが、112左右鉄鏃に比べてふくらが張り気味なのが特徴である。鏃身関部は角関を呈する。頸部形は直線状を呈し、台形関を有する。杉山分類三角形鏃群Ｂ－Ⅱ－１類に該当し、杉山編年ＸⅠ期の年代を与えることができるが、鏃身部形状の特徴から112に比べて後出すると推定される。114は三角形鏃である。鏃身部形状は長三角形を呈し、鏃身部断面形状は両丸造を呈する。鏃身部形状はふくらを有し直線状に延びるのが特徴である。頸部は斜行し、無関である。杉山分類三角形鏃群Ｂ－Ⅰ形式に該当し、杉山編年Ｘ期の年代を与えることができる。115は三角形鏃である。鏃身部形状は長三角形を呈し、鏃身部断面形状は両丸造を呈する。鏃身部形状はふくらを有し内湾すのが特徴である。頸部は斜行し、無関である。杉山分類三角形鏃群Ｂ－Ⅰ形式に該当し、杉山編年Ｘ期の年代を与えることができる。

２組の須恵器杯・杯蓋とも口径が18cm前後とやや大型のもので両者とも明瞭な回転ヘラケズリが施される。およそ６世紀後半があてられるが、SM1001出土の須恵器よりも若干新しい時期にあたると考えられる。鉄鏃は合計５点出土した。すべて平根の三角形鏃である。いずれの茎にも木質が残存しており、矢柄が装着された状態での副葬を窺わせる。ST1001の出土遺物は須恵器等から時期的にはTK209型式併行段階の６世紀第３四半世紀の所産と考えられる。

ST1002（２号小竪穴式石室墓）（第14図）

B-5グリッド、SM1001の西側に位置する小竪穴式石室墓である。後世の削平のため、大部分が崩落・消失しており、破壊が著しく正確な形状・規模などは不明である。墓壙も確認できなかった。

石室石材は砂岩が使用される。ST1002は30㎝前後の直方体状の角礫を用い、平積みで壁体を構築する。壁体は基底部１段が一部残存する程度で詳細な構築状況は不明であるが、ST1001と同規模のものであった可能性が高い。石室規模は現状の内法で長軸1.10m、短軸0.44mと推定される。石室床面からの高さは不明である。主軸方向はN-5°-Wでほぼ東西方向である。ST1001と同様、頭位は東頭位であると推測される。床面は平石を墓壙基底部に敷き詰め、構築されていたものとみられる。

ST1002の構築時期も出土須恵器などから、SM1001よりもやや新しく６世紀後半、TK209型式併行段階の６世紀第３四半世紀頃と思われる。

出土遺物

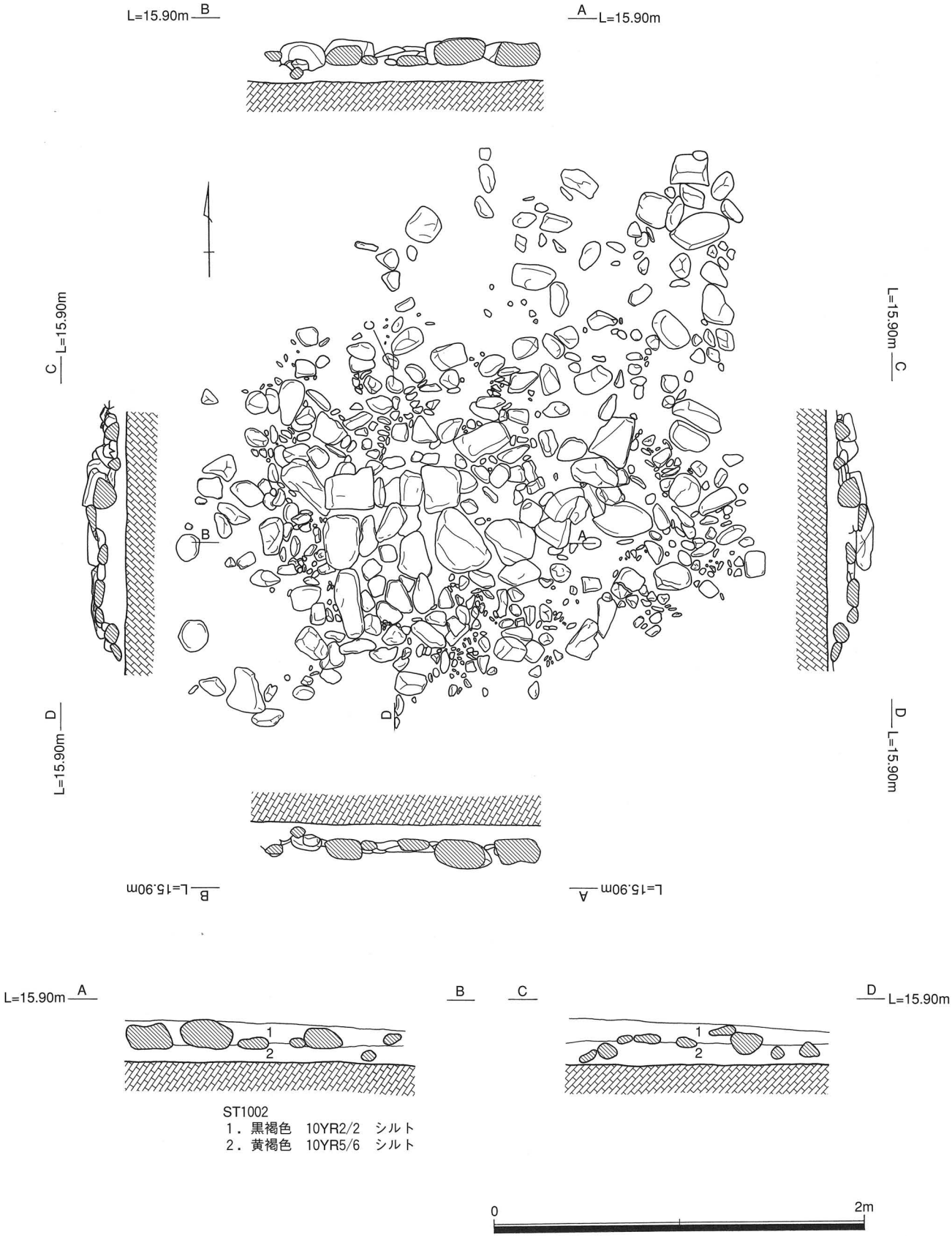
若干の須恵器片等の出土はあったが、復元・実測可能なものはなかった。

包含層出土遺物（第15図）

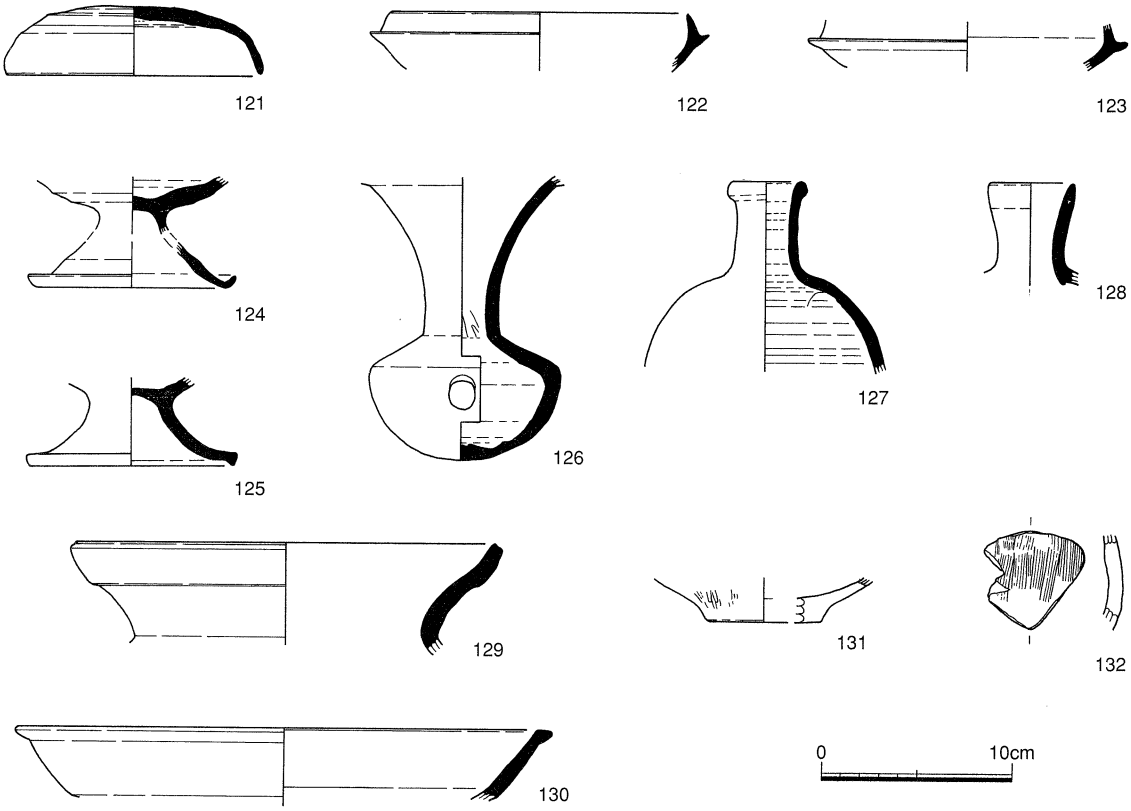
遺構外からも多くの須恵器等の出土がみられた。おそらくは大部分がSM1001に帰属するものと考えられるが、遺構から明らかに遊離した遺物を包含層出土遺物として扱った。

121～130は須恵器である。121～123は杯蓋および杯身である。124・125は短脚の高杯の脚部である。126は甕である。127は陶器徳利、128は須恵器瓶口、129は須恵器壺、130は須恵器鉢である。

131・132は弥生時代の遺物である。131は甕底部である。132は体部破片で器種は不明。時期的には弥生時代後期頃と思われる。




第14図　ST1002平・断面図




第15図　包含層出土遺物

## （4）まとめ

今回の調査では砂岩を使用した横穴式石室をもつ古墳（SM1001）が１基確認された。後世の削平により墳丘および石室天井石は消失していたことに加え、基底石やその他墳丘裾を示すものが皆無であったため、おそらく円墳と思われるが古墳の形状は確認できない。しかしながら、SM1001の西側と南東側にそれぞれ１基ずつ小竪穴式石室墓（ST1001・1002）が存在しており、SM1001を主墳として、ST２基が築造され付随するという古墳群の構成をみせる。SM1001は規模的にも本古墳群構成の中心的存在であったと考えられる。出土須恵器から、SM1001は時期的にTK209型式段階に該当するため、６世紀後半頃の構築と考えられる。付随するとみられるSTはSM1001よりもやや新しく、TK209型式併行段階の６世紀第３四半世紀頃と思われる。

本古墳群で検出された石室には石材として自然石の砂岩が用いられている。このことは東林院古墳群・かに塚・ぬか塚など、近隣に所在する当該地域の後期古墳の石室石材には砂岩が用いられる傾向をふまえているものである。また前述の後期古墳などは比較的低所に築造されており、本古墳群においても当該地域における古墳群の立地において同様の傾向をみせている。

当該地域における後期古墳は古墳の立地・形状・石室石材および主軸方向などが、類同様相を見せており、石室使用石材や古墳築造の立地に関してある種の社会的規制があったものと想定される。本古墳群では立地・石室石材については当該地域の後期古墳の傾向に合致するが、主軸方向・埋葬頭位については、SM1001は北西－南東方向・北頭位、ST1001は東西方向・東頭位、ST1002は南北方向・北頭位

であり、若干の相違がみられ、主軸方向・埋葬頭位は東西を志向すると思われるものの、その規制は緩やかである。今後さらに東西主軸を志向する古墳群の規制程度とその階層範囲など立地や石室構造・副葬品の組成を含めて検討が必要である。

SM1001は大幅に削平を受けており、遺物量も豊富とはいえない。しかしながら、SM1001が築造された後にSTが2基築造されるなど古墳被葬者との関係で注目できる一方、西に隣接する尾根上には西山谷古墳群が立地していることもふまえて、当該地域における古墳群の様相の一端、時期的な立地の変遷を示す資料として重要視すべきであろう。

## 引用・参考文献

杉山　秀宏　1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8　奈良県立橿原考古学研究所

## 大谷山田遺跡
## 第１表　出土遺物一覧表
### SM

| 遺構名 | グリッド | 墳丘形態 | 墓壙平面形態 | 墓壙断面形態 | 墓壙長軸（m） | 墓壙短軸（m） | 墓壙深度（m） | 石室長軸（m） | 石室短軸（m） | 石室深度（m） | 玄室長（m） | 羨道長軸（m） | 主軸方向 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SM1001 | C･D-3･4 | 円墳 | 長楕円形状 | D字状（浅い台形状） | 5.0 | 2.67 | 0.83 | 4.9 | 1.1 | 0.6 | 3.15 | 0.9 | N-36°-W | 石室の形状は無袖膨張型。 |

### ST

| 遺構名 | グリッド | 墳丘形態 | 墓壙平面形態 | 墓壙断面形態 | 墓壙長軸（m） | 墓壙短軸（m） | 墓壙深度（m） | 石室長軸（m） | 石室短軸（m） | 石室深度（m） | 主軸方向 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ST1001 | C-2 | | 隅丸長方形状 | D字状（浅い台形状） | 1.65 | 1.16 | 0.3 | 1.18 | 0.44 | 0.3 | N-66°-E | 小竪穴式石室墓。 |
| ST1002 | B-5 | | | | | | | 1.1 | 0.44 | | N-5°-W | 小竪穴式石室墓。 |

## 第２表　出土遺物観察表
### SM（青銅器）

| 報告書掲載番号 | 遺　構 | 出土地点 | 層　位 | 器　種 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） | その他の法量（cm） | 残存率 | 部　位 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SM1001 | | | 耳環 | 2.2 | 2.3 | 0.6 | 7.2 | | ほぼ完形 | | 銅地金胴張り。 |
| 2 | SM1001 | | | 耳環 | 2.2 | 2.3 | 0.6 | 6.4 | | ほぼ完形 | | 銅地金胴張り。 |

### SM（鉄器）

| 報告書掲載番号 | 遺　構 | 出土地点 | 層　位 | 器　種 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） | その他の法量（cm） | 残　存　率 | 部　位 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | SM1001 | C-4 | 第２次床面直上 | 鉄鏃 | 17.4 | 1.0 | 0.3 | 10.4 | | 1/1 | | |
| 4 | SM1001 | C-4 | 第２次床面直上 | 鉄鏃 | 15.1 | 0.6 | 0.4 | 9.1 | | 9/10 | | |
| 5 | SM1001 | C-4 | 第２次床面直上 | 刀子 | 12.7 | 1.5 | 7.5 | 14.9 | | 9/10 | | |
| 6 | SM1001 | D-3 | 第２次床面直上 | 刀子 | 10.5 | 1.0 | 0.3 | 15.4 | | 9/10 | | |
| 7 | SM1001 | D-3 | 第３層 | 刀子 | 10.5 | 1.5 | 0.6 | 16.4 | | 9/10 | | |

### ST（鉄器）

| 報告書掲載番号 | 遺　構 | 出土地点 | 層　位 | 器　種 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重量（g） | その他の法量（cm） | 残　存　率 | 部　位 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 112 | ST1001 | C-2 | | 鉄鏃 | 11.8<br>14.2 | 2.3<br>2.2 | 0.6<br>0.5 | 34.9 | | | | ２個体。 |
| 113 | ST1001 | C-2 | | 鉄鏃 | 13.2 | 2.3 | 0.4 | 15.7 | | 9/10 | | |
| 114 | ST1001 | C-2 | | 鉄鏃 | 13.6 | 2.8 | 0.3 | 13.5 | | 1/1 | | |
| 115 | ST1001 | C-2 | | 鉄鏃 | 13.1 | 3.7 | 0.3 | 15.7 | | 1/1 | | |

### SM（玉類）

| 報告書掲載番号 | 遺　構 | 出土地点 | 層　位 | 材　質 | 器　種 | 長径（mm） | 短径（mm） | 厚さ（mm） | 重量（g） | 孔径（mm） | その他の法量（cm） | 残存率 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 8 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.6 | 3.4 | 3.1 | 0.04 | 1.2 | | | にぶい青緑。 |
| 9 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.7 | 3.1 | 2.5 | 0.04 | 1.5 | | | にぶい青緑。 |
| 10 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.6 | 3.4 | 2.8 | 0.04 | 1.2 | | | にぶい青緑。 |
| 11 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.0 | 3.0 | 3.5 | 0.03 | 1.2 | | | にぶい青緑。 |
| 12 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.4 | 3.1 | 2.9 | 0.04 | 1.5 | | | にぶい青緑。 |
| 13 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.7 | 3.5 | 2.5 | 0.05 | 1.2 | | | にぶい青緑。 |
| 14 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.1 | 2.5 | 0.03 | 1.2 | | | にぶい青緑。 |
| 15 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.8 | 3.5 | 2.6 | 0.03 | 1.2 | | | あさい青緑。 |
| 16 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 4.2 | 3.3 | 2.1 | 0.02 | 2.5 | | | あさい青緑。 |
| 17 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.4 | 1.7 | 0.04 | 1.2 | | | あさい青緑。 |
| 18 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.8 | 3.5 | 2.7 | 0.04 | 1.3 | | | にぶい緑みの青。 |
| 19 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.1 | 2.2 | 0.03 | 1.2 | | | くらい青。<br>上･下面平面に加工。 |
| 20 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.7 | 3.4 | 2.1 | 0.04 | 1.1 | | | あさい青緑。 |
| 21 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.4 | 1.9 | 0.03 | 1.2 | | | 青緑。 |
| 22 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 2.8 | 2.8 | 3.0 | 0.04 | 0.7 | | | 青緑。 |
| 23 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.2 | 2.7 | 0.04 | 1.1 | | | 青緑。<br>下面研磨。 |
| 24 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.2 | 3.2 | 1.6 | 0.02 | 1.1 | | | 緑みの青。 |
| 25 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 3.0 | 2.3 | 0.04 | 1.0 | | | 緑みの青。 |
| 26 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 2.9 | 2.0 | 0.03 | 0.9 | | | 青緑。 |
| 27 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.4 | 1.5 | 0.02 | 1.4 | | | 緑みの青。 |
| 28 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.0 | 2.8 | 1.8 | 0.02 | 0.8 | | | 緑みの青。 |
| 29 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 4.2 | 4.1 | 3.0 | 0.07 | 1.0 | | | 緑みの青。<br>上面･下面研磨。 |
| 30 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.4 | 3.3 | 1.8 | 0.03 | 1.0 | | | 緑みの青。<br>上面･下面研磨。 |
| 31 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.5 | 2.0 | 0.03 | 1.1 | | | 緑みの青。 |
| 32 | SM1001 | D-3 | 第１次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 3.0 | 2.0 | 0.03 | 1.2 | | | 緑みの青。 |
| 33 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.2 | 2.7 | 0.04 | 1.5 | | | 黒。<br>上面･下面研磨。 |
| 34 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 2.9 | 2.0 | 0.02 | 1.0 | | | あさい緑みの青。 |
| 35 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.7 | 3.4 | 2.2 | 0.04 | 1.6 | | | あさい緑みの青。 |
| 36 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 5.0 | 4.7 | 3.2 | 0.11 | 1.5 | | | 黒。<br>上面･下面研磨。 |

| 報告書掲載番号 | 遺構 | 出土地点 | 層位 | 材質 | 器種 | 長径（mm） | 短径（mm） | 厚さ（mm） | 重量（g） | 孔径（mm） | その他の法量（cm） | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 37 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 4.9 | 4.8 | 4.0 | 0.12 | 1.2 | | | くらい青。 |
| 38 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 5.0 | 4.9 | 3.2 | 0.11 | 1.5 | | | くらい青。 |
| 39 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.3 | 1.6 | 0.03 | 1.5 | | | にぶい青緑。 |
| 40 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.6 | 3.5 | 2.0 | 0.03 | 1.5 | | | あさい青緑。 |
| 41 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.3 | 3.0 | 2.3 | 0.03 | 0.9 | | | あさい青緑。 |
| 42 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.2 | 2.5 | 0.03 | 1.1 | | | にぶい青緑。 |
| 43 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.7 | 2.8 | 2.8 | 0.04 | 1.8 | | | にぶい緑みの青。 |
| 44 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 3.0 | 2.1 | 0.03 | 1.0 | | | にぶい緑みの青。 |
| 45 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.2 | 2.0 | 0.03 | 1.1 | | | にぶい緑みの青。 |
| 46 | SM1001 | D-3 | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.6 | 3.5 | 3.5 | 0.05 | 1.4 | | | 青緑。 |
| 47 | SM1001 | D-3 | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 4.2 | 4.1 | 2.3 | 0.06 | 1.7 | | | 青緑。 |
| 48 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.8 | 3.8 | 2.5 | 0.05 | 1.2 | | | 青。<br>上面・下面研磨。 |
| 49 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 4.1 | 4.0 | 2.5 | 0.06 | 1.1 | | | 緑みの青。 |
| 50 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 4.3 | 4.1 | 2.5 | 0.05 | 1.8 | | | 緑みの青。<br>上面・下面研磨。 |
| 51 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 4.1 | 4.0 | 1.8 | 0.04 | 1.7 | | | 緑みの青。 |
| 52 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 4.0 | 3.2 | 2.2 | 0.04 | 1.0 | | | 青緑。 |
| 53 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.7 | 3.3 | 2.0 | 0.04 | 1.2 | | | 青緑。 |
| 54 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.4 | 3.2 | 3.5 | 0.04 | 1.1 | | | 青緑。 |
| 55 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.7 | 3.5 | 1.8 | 0.03 | 1.0 | | | 青緑。 |
| 56 | SM1001 | | 第1次（2）床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.0 | 2.8 | 0.04 | 1.1 | | | 青。 |
| 57 | SM1001 | | 第2次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 4.0 | 3.4 | 2.0 | 0.05 | 1.1 | | | 青緑。 |
| 58 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.5 | 2.0 | 0.03 | 1.2 | | | にぶい緑みの青。 |
| 59 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.8 | 3.4 | 2.3 | 0.04 | 1.3 | | | にぶい緑みの青。 |
| 60 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 2.8 | 2.8 | 1.9 | 0.02 | 1.0 | | | あさい青緑。 |
| 61 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.2 | 2.9 | 2.1 | 0.03 | 1.3 | | | あさい青緑。 |
| 62 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.2 | 3.0 | 2.8 | 0.04 | 1.2 | | | にぶい青緑。 |
| 63 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 3.1 | 2.7 | 0.03 | 1.1 | | | にぶい黄緑。 |
| 64 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.4 | 2.9 | 1.7 | 0.02 | 1.2 | | | うすい青緑 |
| 65 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 3.0 | 2.2 | 0.03 | 1.0 | | | あさい緑みの青。 |
| 66 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.2 | 3.0 | 2.2 | 0.03 | 1.3 | | | あさい青緑。 |
| 67 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 3.1 | 2.3 | 0.03 | 1.2 | | | あさい青緑。 |
| 68 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.3 | 3.2 | 2.2 | 0.03 | 1.2 | | | くらい緑みの青。 |
| 69 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.8 | 3.2 | 2.3 | 0.03 | 1.1 | | | あさい青緑。 |
| 70 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 3.0 | 2.7 | 0.03 | 1.1 | | | あさい青緑。 |
| 71 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 2.9 | 1.8 | 0.02 | 1.2 | | | あさい青緑。 |
| 72 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.7 | 3.4 | 2.2 | 0.03 | 1.3 | | | あさい緑みの青。 |
| 73 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.2 | 3.0 | 1.0 | 0.01 | 1.5 | | | つよい青。<br>上面・下面研磨。 |
| 74 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 2.9 | 2.9 | 1.5 | 0.02 | 1.0 | | | にぶい青緑。 |
| 75 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.4 | 3.2 | 2.0 | 0.03 | 0.9 | | | にぶい青緑。 |
| 76 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.1 | 2.8 | 1.9 | 0.02 | 1.0 | | | にぶい青緑。 |
| 77 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.3 | 2.9 | 2.2 | 0.03 | 1.2 | | | にぶい青緑。 |
| 78 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.0 | 3.0 | 2.0 | 0.02 | 0.9 | | | にぶい青緑。 |
| 79 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 2.9 | 2.9 | 3.1 | 0.03 | 0.8 | | | にぶい青緑。 |
| 80 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.4 | 3.0 | 1.2 | 0.02 | 1.0 | | | あさい青緑。 |
| 81 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.0 | 2.9 | 3.0 | 0.03 | 1.0 | | | あさい青緑。 |
| 82 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.2 | 3.0 | 2.0 | 0.02 | 1.0 | | | にぶい青緑。 |
| 83 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.3 | 2.5 | 0.03 | 1.2 | | | あさい青緑。 |
| 84 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.2 | 2.6 | 0.03 | 1.2 | | | にぶい青緑。 |
| 85 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.4 | 3.4 | 3.0 | 0.04 | 1.2 | | | くらい青。 |
| 86 | SM1001 | | | 硝子 | 小玉 | 3.3 | 2.8 | 2.5 | 0.03 | 1.0 | | | あさい青緑。 |
| 87 | SM1001 | D-3 | 第1次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.8 | 3.7 | 1.6 | 0.03 | 1.8 | | | 緑。 |
| 88 | SM1001 | D-3 | 第1次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.5 | 3.0 | 2.5 | 0.04 | 0.9 | | | 青緑。 |
| 89 | SM1001 | D-3 | 第1次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.6 | 3.3 | 2.0 | 0.03 | 1.2 | | | 青緑。 |
| 90 | SM1001 | D-3 | 第1次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.2 | 3.0 | 1.5 | 0.02 | 1.1 | | | 緑みの青。 |
| 91 | SM1001 | D-3 | 第1次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.0 | 3.0 | 1.0 | 0.01 | 1.1 | | | 緑みの青。 |
| 92 | SM1001 | D-3 | 第1次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 2.8 | 2.5 | 1.5 | 0.02 | 1.0 | | | 青緑。 |
| 93 | SM1001 | D-3 | 第1次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 3.3 | 3.1 | 2.2 | 0.04 | 1.1 | | | 青緑。 |
| 94 | SM1001 | D-3 | 第1次床面直上 | 硝子 | 小玉 | 2.9 | 2.9 | 2.0 | 0.02 | 0.9 | | | 青緑。 |

## SM（土器）

| 報告書掲載番号 | 遺構 | 出土地点 | 層位 | 器種 | 残存率 | 口径(cm) | 体部最大径(cm) | 底径(cm) | 頸部(脚柱)径(cm) | 器高・残存高(cm) | その他の法量(cm) | 部位 | 形態 | 調整 | 含有物組成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 95 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器杯蓋 | 全体9/10 | 11.5 | | | | 4.4 | | 全体 | 天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は丸く収める。 | 外面：ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石・砂粒 | 外面：灰白内面：灰白 | 焼成不良。 |
| 96 | SM1001 | C-4 | | 須恵器杯蓋 | 全体2/3 | 13.0 | | | | 4.8 | | 全体 | 天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は丸く収める。 | 外面：天井部回転ヘラケズリ。回転ナデ。内面：回転ナデ。 | 石英 | 外面：灰白内面：灰白 | 焼成不良。 |
| 97 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器杯蓋 | 全体ほぼ完形 | 14.4 | | | | 4.8 | | 全体 | 天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は丸く収める。 | 外面：摩滅のため調整不明。内面：ロクロナデ。 | 長石 | 外面：淡黄内面：浅黄 | 焼成不良。 |
| 98 | SM1001 | C-3 | | 須恵器杯蓋 | 全体1/1 | 12.6 | | | | 3.8 | | 全体 | 天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部はやや肥厚し、丸く収める。器壁はやや厚い。 | 外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石 | 外面：灰黄内面：灰黄 | 焼成不良。6C後半。 |
| 99 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器杯蓋 | ほぼ完形 | 14.4 | | | | 4.8 | | 全体 | 天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は丸く収める。 | 外面：ロクロナデ（摩滅のためナデとケズリの境界不明瞭）内面：ロクロナデ | 石英・長石 | 外面：灰黄内面：灰黄 | 焼成不良。 |
| 100 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器杯身 | 全体9/10 | 12.2 | | | | 3.8 | | 全体 | 体部外上方へ立ち上がり、内傾する短いかえしをもつ。かえしの端部は薄く僅かに丸く収める。器壁はやや厚い。 | 外面：ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。底部ユビナデ。一定方向へ1回2本指で施す。 | 石英・長石・砂粒 | 外面：暗青灰内面：暗青灰 | 焼成良好。6C後半。 |
| 101 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器杯身 | 全体9/10 | 12.2 | | 2.4 | | 4.3 | | 全体 | 体部外上方へ立ち上がり、内傾する短いかえしをもつ。かえしの端部は薄く僅かに丸く収める。 | 外面：ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石・細砂粒 | 外面：明オリーブ灰内面：明オリーブ灰 | 焼成良好。6C後半。 |
| 102 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器杯身 | 全体4/5 | 11.1 | | 4.0 | | 4.0 | | 全体 | 体部外上方へ立ち上がり、内傾する短いかえしをもつ。かえしの端部は薄く僅かに丸く収める。 | 外面：ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。底部ユビナデ。一方向2本指。 | 石英・長石 | 外面：灰白内面：灰白 | 焼成良好。6C後半。 |
| 103 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器杯身 | 口縁～体部3/4 | 13.0 | 15.4 | | | 3.7 | | 口縁～体部 | かえしは太く、短い。内面の屈曲はない。 | 外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 長石 | 外面：灰白内面：灰白 | 焼成不良。 |
| 104 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器壺 | 全体9/10 | 10.2 | | 1.6 | 4.6 | 13.7 | | 全体 | 扁球形の壺部に緩やかに外反する口頸部をもつ。最大径をやや上位にもち、穿孔を施す。底部は丸い。 | 外面：摩滅が著しく調整不明。内面：口縁部ロクロナデ。体部ナデ。 | 石英・長石・白色斑粒 | 外面：明オリーブ灰内面：明オリーブ灰 | 焼成不良。穿孔は焼成前に外→内方向であけられる。 |
| 105 | SM1001 | | | 須恵器台付壺 | 全体1/2 | 8.6 | 18.1 | 13.2 | 7.5 | 26.3 | 高台高7.8 | 全体 | 胴部は球形を呈するが、僅かにゆがみが生じ、対称ではない。口縁部はやや外反し、端部で内傾し、丸く収める。脚部は下半で大きく「八」の字状に開き、端部は下へ僅かに拡張している。 | 外面：ロクロナデ。体部下半にカキメ（5～9条）。脚部沈線2条。透かし孔3ヶ所。長方形二段。透かし上部にケガキ線2条。内面：ロクロナデ。体部下半ユビナデ。 | 長石 | 外面：暗青灰内面：暗青灰 | 焼成良好。透かし孔は長方形2段3方向、焼成前に外→内方向であけられる。6C中～後半。 |
| 106 | SM1001 | C-3·4 | 4層 | 須恵器壺 | 口縁部1/4 | 9.0 | | | | 5.1 | | 口縁部 | 口頸部は外反し上方へ延び、端部は肥厚し丸く収める。 | 外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石 | 外面：黄灰内面：灰 | 焼成良好。 |
| 107 | SM1001 | C-4 | | 須恵器壺 | 口縁部1/11 | 24.0 | 25.0 | | | 5.7 | | 口縁部 | 口縁部外反し、端部は上下に拡張し、下方に屈曲する。 | 外面：針状工具による斜行文。内面：ナデ。自然釉。 | 長石 | 外面：青灰内面：灰 | 焼成良好。内面に黄の自然釉。 |
| 108 | SM1001 | C-4 | 4層 | 須恵器短頸壺 | 全体1/1 | 7.5 | | 3.8 | | 10.1 | | 全体 | 扁平な球形の体部から口縁部へほぼ垂直に延び、端部は丸みをもって収める。体部と口縁部の境目に沈線1条が入る。 | 外面：口縁部から体部ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石・砂粒 | 外面：明オリーブ灰内面：明オリーブ灰 | 焼成良好。体下部に接合部有り。6C中～後半。 |
| 109 | SM1001 | C-4 | 3層 | 土師器甕 | 口縁部1/15 | 17.0 | 17.95 | | | 2.1 | | 口縁部 | 口縁部外反し、端部を上下に拡張する。 | 外面：ナデ。内面：ナデ。 | 石英・長石 | 外面：にぶい褐内面：明褐 | 焼成良好。 |
| 110 | SM1001 | D-3 | | 弥生土器台付鉢 | 体部～底部ほぼ完形 | | | 2.8 | | 6.1 | | 体部～底部 | 小さな平底。体部外上方に延びる。 | 外面：ユビオサエ。ナデ。内面：ハケ（7条／6㎜）。強いナデ。 | 石英・雲母 | 外面：にぶい黄橙内面：にぶい黄橙 | 焼成良好。外面に黒斑有り。 |
| 111 | SM1001 | D-3 | | 弥生土器鉢 | 不明 | | | | | 5.4 | | 不明 | 体部外上方に延びる。 | 外面：ナデ。底部ユビオサエ。内面：ハケ（6条／4㎜）。ユビオサエ。 | 石英・結晶片岩・雲母 | 外面：にぶい黄橙内面：にぶい黄橙 | 焼成良好。 |

## ST（土器）

| 報告書掲載番号 | 遺構 | 出土地点 | 層位 | 器種 | 残存率 | 口径(cm) | 体部最大径(cm) | 底径(cm) | 頸部(脚柱)径(cm) | 器高・残存高(cm) | その他の法量(cm) | 部位 | 形態 | 調整 | 含有物組成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 116 | ST1001 | C-2 | 4層 | 須恵器杯蓋 | 全体9/10 | 17.1 | | | | 4.6 | | 全体 | 天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部はやや肥厚し、丸く収める。全体的に器壁が厚い。 | 外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石・細砂粒 | 外面：明緑灰 内面：明緑灰 | 焼成良好。天井部外面に半周1条のヘラ記号が入る。6C後半～末期。 |
| 117 | ST1001 | C-2 | 3層 | 須恵器杯身 | 全体1/1 | 14.8 | | 8.2 | | 4.6 | | 全体 | 浅い皿形の体部に内傾するかえしをもつ。かえしの端部は僅かに肥厚し丸く収める。 | 外面：ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。当て具痕1ヶ所有り。 | 石英・長石・白色斑粒 | 外面：灰 内面：灰 | 焼成良好。6C後半。 |
| 118 | ST1001 | C-2 | 3層 | 須恵器杯蓋 | 全体1/1 | 16.4 | | | | 5.2 | | 全体 | 天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は丸く収める。端部内面に沈線有り。器壁が厚い。 | 外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石・砂粒 | 外面：灰白 内面：灰白 | 焼成良好。天井部外面に「丨」字のヘラ記号。 |
| 119 | ST1001 | C-2 | 3層 | 須恵器杯身 | 全体1/1 | 14.5 | 17.1 | 3.9 | | 5.4 | | 全体 | やや深い杯部に内傾するかえしをもつ。端部は丸く収める。内面の屈曲は弱い。 | 外面：底部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石 | 外面：灰 内面：灰 | 焼成良好。内底面に当て具痕有り、ヘラ記号に類するものか？6C後半。 |
| 120 | ST1001 | C-2 | 3層 | 須恵器杯蓋 | 全体1/1 | 16.6 | | | | 5.0 | | 全体 | 天井部は平坦で緩やかなカーブで口縁に至り、端部はやや肥厚し丸く収める。口縁との境に稜線を巡らせる。 | 外面：天井部回転ヘラケズリ。ロクロナデ。内面：ロクロナデ。当て具痕1ヶ所有り。 | 石英・長石 | 外面：灰 内面：灰 | 焼成良好。6C後半。 |

## 包含層（土器）

| 報告書掲載番号 | 遺構 | 出土地点 | 層位 | 器種 | 残存率 | 口径(cm) | 体部最大径(cm) | 底径(cm) | 頸部(脚柱)径(cm) | 器高・残存高(cm) | その他の法量(cm) | 部位 | 形態 | 調整 | 含有物組成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 121 | | C-3 | 4層 | 須恵器杯蓋 | 全体4/5 | 13.3 | 13.6 | | | 3.7 | | 全体 | 天井部は緩やかなカーブから口縁に至り、端部は丸く収める。 | 外面：ロクロナデ。天井部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石 | 外面：灰 内面：灰 | 焼成良好。 |
| 122 | No.5トレンチ | 拡張部 | 5層人力掘削 | 須恵器杯身 | 口縁～体部1/14 | 15.8 | 18.0 | | | 3.1 | | 口縁～体部 | やや内傾するかえしをもち、端部は丸く収める。内面の屈曲は弱い。 | 外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 長石 | 外面：青灰 内面：オリーブ灰 | 焼成良好。 |
| 123 | No.5トレンチ | 拡張部 | 5層人力掘削 | 須恵器杯身 | 体部1/12 | | 16.8 | | | 2.4 | | 体部 | やや内傾するかえしをもち、内面の屈曲は弱い。 | 外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石 | 外面：青灰 内面：灰 | 焼成良好。 |
| 124 | | E-1 | 3層 | 須恵器高杯 | 脚部1/6 杯部不明 | | | 10.0 | 3.5 | 5.9 | | 脚部 | 杯部外上方に延びる。脚部「八」の字状に開き、端部は斜め上方へ拡張し、尖り気味に収める。 | 外面：ナデ。回転ナデ。内面：ナデ。 | 長石 | 外面：灰白 内面：灰白 | 焼成良好。 |
| 125 | | C-3 | | 須恵器高杯 | 脚部3/4 | | | 10.3 | | 4.7 | 高台高3.5 | 脚部 | 杯部外上方に延びる。脚部「八」の字に開き、端部は下方へ拡張し、尖り気味に収める。 | 外面：ナデ。内面：ナデ。 | 石英 | 外面：灰白 内面：灰白 | 焼成良好。 |
| 126 | No.5トレンチ | | | 須恵器甕 | 口縁～底部4/5 | | 10.1 | 1.6 | 3.8 | 15.1 | 注孔12mm | 口縁～底部 | やや中位に斜め下への穿孔がある。球形の胴部に大きく朝顔形に広がる口頸部が付く。 | 外面：ナデ。底部ケズリのちナデ。内面：ナデ。頸部絞り模様。 | 石英 | 外面：灰 内面：灰 | 焼成良好。 |
| 127 | No.9トレンチ | | 客土層 | 陶器徳利 | 口縁～頸部1/1 | 3.6 | | | 3.2 | 10.2 | | 口縁～頸部 | 体部緩やかに内彎しながら立ち上がり、頸部は直立。口縁端部は外側に拡張し、丸く収める。 | 外面：ナデ。施釉。内面：回転ナデ。 | 緻密 | 鉄釉 釉：グレイみのブラウン 胎：橙 | 焼成良好。大谷焼。 |
| 128 | No.5・7トレンチ | | | 須恵器瓶口 | 口縁部1/1 | 4.4 | 4.65 | | 3.45 | 5.4 | | 口縁部 | 口頸部は外反し上方へ延び、端部は丸く収める。 | 外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・雲母 | 外面：灰 内面：灰 | 焼成良好。接合痕有り。 |
| 129 | | C-3 | 4層 | 須恵器壺 | 口縁部1/10 | 22.0 | | | 16.0 | 5.9 | | 口縁部 | 口縁部外反し、端部でやや内彎。口縁端部は肥厚し四角く収める。 | 外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石 | 外面：灰白 内面：灰白 | 焼成良好。 |
| 130 | | C-3 | 4層 | 須恵器鉢 | 口縁部1/28 | 27.3 | | | | 3.8 | | 口縁部 | 口縁部は外反し、端部は外側へ拡張し、丸く収める。 | 外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。 | 石英・長石 | 外面：灰 内面：灰 | 焼成良好。 |
| 131 | | B-4 | 4層 | 弥生土器甕 | 底部1/3 | | | 6.0 | | 2.4 | | 底部 | 平底。体部外上方に延びる。 | 外面：ミガキ（2mm／本）。内面：ケズリ。 | 雲母・赤色斑粒 | 外面：にぶい橙 内面：灰褐 | 焼成良好。 |
| 132 | No.5トレンチ | 拡張部 | 5層人力掘削 | 弥生土器不明 | 不明 | | | | | | 縦5.2 横5.3 厚さ0.8 | 不明 | | 外面：ハケ。内面：不明。 | 石英・長石 | 外面：明赤褐 内面：明赤褐 | 焼成良好。 |

# XX 大　代　古　墳

# 例　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う大代古墳の発掘調査報告書である。

2　所在地　鳴門市大津町大代字日開谷1482－2他

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間　平成12年３月１日～平成12年３月31日　1,035㎡

平成12年４月１日～平成12年11月30日　1,730㎡

調査対象面積2,765㎡

調査面積440㎡

試掘面積260㎡

報告書作成期間　平成16年４月１日～平成17年３月31日

4　遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。ただし第71図の遺物番号は図幅において通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

6　ST1001箱式石棺および大代古墳出土鉄器の一部については栗林誠治が、大代古墳のトレンチ出土埴輪の一部および「まとめ　埴輪について」については藤川智之が報告を行った。また大代古墳の現地保存についての報文は湯浅利彦が執筆した。

# 1　調査の経過

## （1）調査の経過

調査着手前、遺跡は山林に覆われていた。大代古墳は阿讃山脈東端南麓から南へ派生する鳴門市大津町大代の標高40～47mの尾根上に所在する。この地域は宮谷古墳（前方後円墳）の所在する徳島市国府町の気延山周辺と並び、周辺一帯には多数の古墳群が密集する地域として周知され、以前から古墳群の存在が指摘されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が高まった。

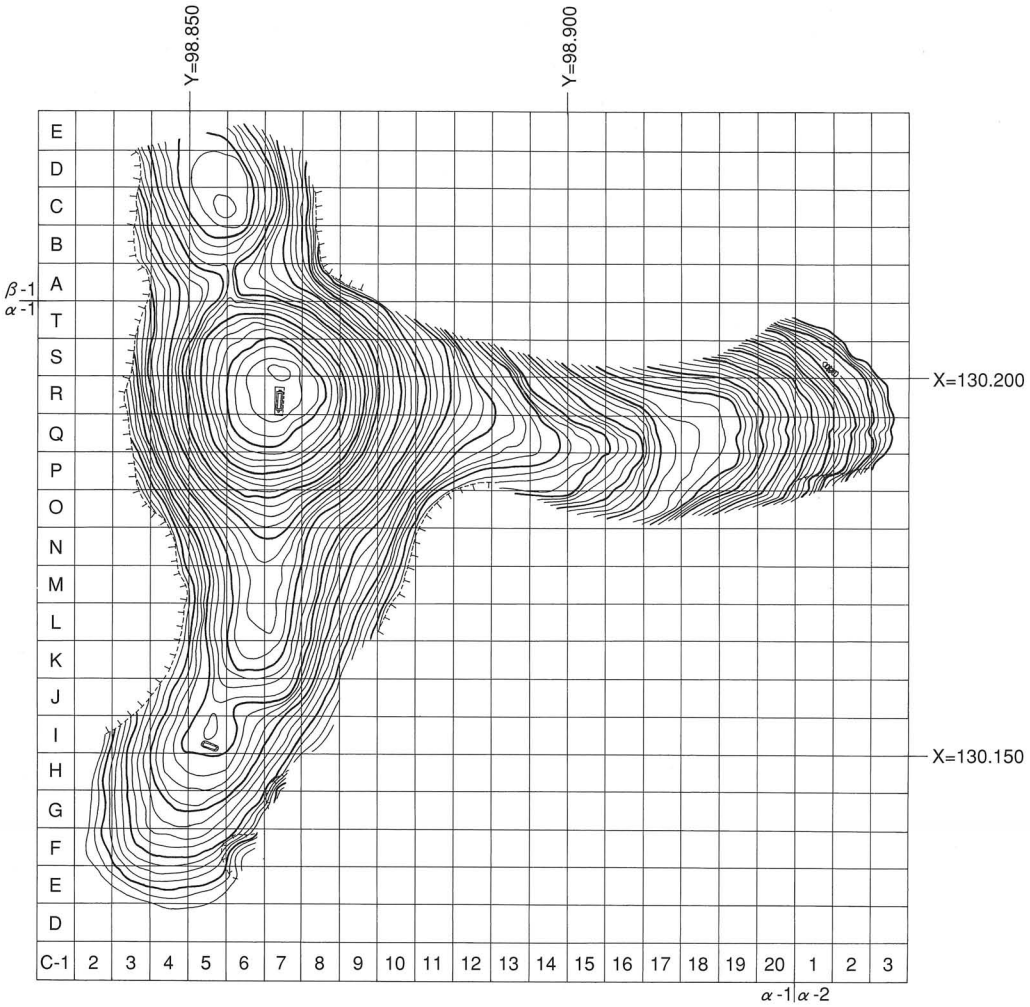
したがって、四国横断自動車道建設に伴い、分布調査で推定された遺跡の範囲の内1,730㎡を調査対象面積として設定した。平成11年11月に大部の用地が取得されたため、平成12年１月末に調査に係る立木伐採範囲の設定作業を実施した。引き続き平成12年３月１日～平成12年３月31日の期間、試掘調査を設定・実施し、平成12年３月10日に山林伐採終了後の調査区確認を目的とする現地立会によって古墳群の存在が初めて明らかになった。

平成11年度は調査範囲の確定を主眼におき、まず現況の地形測量を実施するにとどめた。地形測量が進捗するに従い、これまで知られていなかった前方後円墳を含む３基の古墳群の存在が明らかとなった。確認された前方後円墳の名称は「大代古墳」とした。

センターは直ちに文化財課と協議を行い、３月16日にJH徳島工事事務所において現状保存を申し入れ、事務レベルの協議を開始した。これと併行して文化財課は文化庁記念物課との協議を実施した。３月31日当該用地の取得が完了したため、４月11日より築造年代・主体・外表施設、保存を要する範囲確認のための調査を開始した。この後、調査経過を踏まえつつ、文化財課・センター・JH四国支社・JH徳島工事事務所・県高速道路推進局は保存に起因する諸課題について協議を重ねた結果、９月の現地説明会段階において、トンネル工法（片側３車線の双設トンネル）に構造変更して現状保存されることが決定した。大代古墳は保存・整備作業が実施され、現在、下を通るトンネルは「大代古墳トンネル」と呼称されている。

## （2）発掘調査の方法（第１図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、５ｍメッシュを１グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に１・２・３…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。




第１図　グリッド配置図

## （３）調査日誌抄

大代古墳調査日誌抄

2000年

３月１日　事務所引越し。

３月３日　事前準備。

３月８日　トレンチ掘削開始。図面作成。

３月13日　図面作成。調査区整備。

３月30日　図面整理。

３月31日　事務所引越し。

４月３日　辞令交付式。調査準備。

４月６日　現地形平板測量。

４月11日　人力掘削開始。調査前風景空中写真撮影。Ａトレンチ掘削開始。

４月12日　Ａ～Ｆトレンチ掘削、土層図作成。

４月19日　東尾根部分全掘作業。

４月27日　東尾根部平面発掘。前方後円墳東側後円部墳丘斜面にＧトレンチを設定し、調査を開始する。墳丘基底部を検出し、その外側テラス面上に円筒埴輪底部が原位置を保った状態で検出。

４月28日　東尾根部Q-12～Q-13区拡張区完掘、写

真撮影。B～Cトレンチ付近拡張区完掘。Gトレンチ掘削。前方後円墳、墳丘部各トレンチ設定。

5月1日　前方後円墳、後円部東斜面Gトレンチ完掘。K、L、Mトレンチ掘削開始。（～2日）

5月8日　K、L、M、N、Jトレンチ掘削。Kトレンチより敷石、土器片出土。

5月9日　Hトレンチ掘削。北側円墳墳丘部各トレンチ設定。前方後円墳墳丘部西側トレンチ設定。

5月11日　Gトレンチ埴輪基底部半裁土層図作成。登山道整備。

5月12日　Kトレンチ拡張区設定。Kトレンチ下部より敷石が出土。Gトレンチ埴輪基底部写真撮影。

5月16日　P、Q、R、Hトレンチ、Lトレンチ北側拡張区、Nトレンチ西側拡張区掘削。Gトレンチ埴輪基底部配置平面図作成。

5月17日　S、H、R、Qトレンチ拡張区設定。J、G、M、P、L掘削。Qトレンチ下部より敷石が出土。

5月18日　Kトレンチ拡張区、S、H、R、Q、P、Rトレンチ掘削。Qトレンチ拡張区設定。

5月19日　Sトレンチ中央部より円筒埴輪基底部が出土。

5月22日　K、R、Qトレンチ拡張区、S、P、Hトレンチ掘削。L、Gトレンチ拡張区設定。Sトレンチより埴輪基底部出土。

5月24日　Q、Lトレンチ拡張区掘削。Gトレンチ拡張区設定。
W、V、U、Tトレンチ設定。GトレンチおよびQトレンチより埴輪基底部出土。

5月25日　Lトレンチ北拡張区、Gトレンチ拡張区、Pトレンチ南拡張区、Mトレンチ西拡張区掘削。1号墳墳頂部調査区設定、表土剥ぎ開始。

5月30日　1号墳墳丘地形平面図（S=1/200）再作成。

6月1日　1号墳表土、流土除去作業。Hトレンチ北拡張区、Lトレンチ拡張区より埴輪片多数出土。

6月5日　1号墳、2号墳流土除去作業。Pトレンチ拡張区より埴輪片多数出土。

6月7日　1号墳墳頂部遣り形測量の設定、全景写真、流土除去、盗掘坑埋土掘削除去開始。墳頂部盗掘坑にて直径9.4cmの鏡（青銅製品）の破片が出土。

6月8日　1号墳墳頂部盗掘坑埋土除去、墳頂部周辺土嚢設置作業。墳頂部盗掘坑にて鉇が1点、その他鉄製品が出土。

6月12日　1号墳墳頂部盗掘坑埋土除去、後円部墳頂主体部、盗掘坑埋土より鉄鏃等出土。Pトレンチより埴輪基底部が出土。1号墳後円部墳頂主体部、盗掘坑埋土より石棺の一部が出土し始める。

6月13日　2号墳墳頂部より北側へ地形調査（S=1/200）。

6月26日　1号墳墳頂部盗掘坑全掘開始。後円部墳頂主体部③－④区間盗掘坑埋土（ベルト部）中より、青銅鏡片が1点出土。2号墳墳頂部拡張区設定、表土除去。

6月27日　1号墳後円主体部盗掘坑埋土ベルト除去。銅鏃が1点出土。1号墳後円主体部盗掘坑ベルトより石器が出土。

6月30日　1号墳後円主体部盗掘坑ベルト除去、精査。①区より青銅器片、②区より鉄鏃等が出土。

7月4日　1号墳後円主体部盗掘坑完掘状況写真。銅鏃1点出土。

7月5日　1号墳前方部トレンチ設定流土除去。2号墳拡張区設定表土除去。3号墳前年度トレンチ拡張区設定表土除去。2号墳拡張区設定表土中より片岩が出土。

7月7日　1号墳後円主体部盗掘坑埋土除去（石棺内盗掘坑埋土除去開始。墓壙埋土掘り下げ開始。）1号墳前方部トレンチ流土除去。2号墳拡張区流土除去。3号墳にて主体部を一部検出。円筒埴輪基底部？1基検出。平成11年度トレンチ拡張区より埴輪基底部が出土。1号墳後円主体部盗掘坑より鉄器1点、水銀朱（石棺内盗掘坑埋土）が出土。1号墳後円主体部盗掘坑完掘状況平面図（S=1/10）作成。

7月10日　3号墳（前年度トレンチ拡張区）流土除去。（主体部を全面検出するための調査区拡張）1号墳後円主体部石棺内（最下層黒色腐葉土）より管玉および臼玉等が出土。

7月11日　2号墳拡張区流土除去終了。周辺部土嚢撤去。

7月12日　1号墳後円主体部石棺内盗掘坑埋土、土層堆積状況写真撮影。1号墳後円主体部石棺内土層断面図作成。2号墳完掘状況写真撮影。1号墳石棺内盗掘坑埋土①、③区掘り下げ開始。

7月13日　1号墳後円主体部石棺内盗掘坑埋土ベルト除去。前方部トレンチ流土除去。3号墳主体部盗掘坑埋土除去。3号墳主体部遺構検出状況写真。
W-Jトレンチ拡張区表土、流土除去。

7月14日　1号墳後円主体部石棺内盗掘坑埋土除去。墓壙覆土除去。2号墳墳頂部トレンチ平面図（S=1/10）作成。

7月17日　1号墳後円主体部石棺内盗掘坑埋土除去。墓壙内覆土除去。前方部トレンチ流土除去（遺構内半掘）。3号墳主体部覆土半掘開始。Mトレンチ精査。Nトレンチ流土除去。J、Mトレンチ拡張区より葺石が出土。1号墳石棺内盗掘坑完掘状況写真。

7月18日　1号墳後円主体部石棺内埋土除去。墓壙内埋土除去。J、Mトレンチ拡張区設定。1号墳後円主体部石棺内より管玉が26点出土。朱のサンプル採集。石棺内作業風景写真撮影。

7月19日　1号墳後円主体部墓壙内埋土除去。前方部トレンチベルト除去。3号墳前年度トレンチ拡張区流土除去。

7月21日　3号墳主体部精査、半掘状況写真。

7月24日　前方部J-Iトレンチベルト除去。3号墳主体部墓壙内埋土除去。前年度トレンチ拡張区流土除去。

7月25日　1号墳拡張区設定、表土剥ぎ、埋土除去。後円主体部墓壙内埋土除去。

7月26日　1号墳後円主体部拡張区設定、表土剥ぎ。後円主体部墓壙再設定、埋土除去。3号墳主体部（Bトレンチ）L字掘削。Cトレンチ拡張区流土除去。

7月27日　文化庁より伊藤文部技官来訪。Cトレンチより葺石が数点出土。

7月28日　1号墳後円主体部墓壙内埋土除去、精査。Cトレンチ表土除去。

7月31日　1号墳後円主体部第2墓壙埋土除去。3号墳Bトレンチ流土除去。Bトレンチより石列が出土。

8月1日　1号墳第1主体部礫床検出作業。第2主体部土層堆積状況写真撮影、土層図作成。Lトレンチ北拡張区、Wトレンチ東拡張区表土除去。3号墳Bトレンチ L字掘削下層部写真撮影、土層堆積状況写真、作図。Dトレンチ流土除去。E・Fトレンチ、Cトレンチ拡張区表土除去。

8月2日　1号墳後円部第1主体部墓壙、礫床検出作業。第2主体部墓壙内埋土除去。Lトレンチ北拡張区、Wトレンチ東拡張区表土除去。3号墳Bトレンチ掘削、C・D・E・Fトレンチ流土除去。Wトレンチ東拡張区流土内より埴輪片が数点出土。

8月3日　第2主体部完掘状況写真、遺物出土状況

写真撮影。

8月4日　1号墳後円部第1主体部、第2主体部及び調査区内精査、写真撮影。Wトレンチ東拡張区流土除去。3号墳Bトレンチ平面図作成。Cトレンチより石列が出土、拡張区設定。

8月7日　1号墳後円部主体部及び墓壙ベルトはずし、精査、完掘状況写真。Dトレンチより石列が出土。3号墳調査区内トレンチ配置図（石列含む）作成。

8月8日　1号墳後円部主体部、埋土除去及び精査。S、L、Wトレンチ流土除去。
3号墳B・C・D・Eトレンチ流土除去。

8月9日　岡山県倉敷考古館長 間壁忠彦氏来訪。Sトレンチ拡張区より埴輪基底部が出土。Sトレンチ完掘状況写真撮影。

8月10日　同志社大学名誉教授 森浩一氏来訪。空撮準備作業。

8月11日　1号墳後円部主体部、ブーム空中写真撮影。

8月17日　鳴門市教育長来訪。1号墳後円部主体部拡張区設定、表土剥ぎ。Sトレンチ精査。Wトレンチ拡張区設定、表土剥ぎ。

8月18日　1号墳後円部主体部拡張区、Wトレンチ拡張区流土除去。3号墳C・D・Eトレンチ流土除去。Aトレンチ精査、完掘状況写真撮影。

8月21日　調査区拡張のためのくい打ち作業。

8月22日　1号墳後円部主体部拡張区表土、流土除去。Wトレンチ拡張区流土除去。3号墳C・D・Eトレンチ流土除去。Fトレンチ精査。Cトレンチ完掘状況写真撮影。Wトレンチより全景写真。

8月23日　1号墳後円部主体部拡張区表土、流土除去。Lトレンチ拡張区流土除去。3号墳C・Dトレンチ流土除去。

8月25日　石棺、周辺礫床断ち割り掘削。W、Lトレンチ流土除去。3号墳Cトレンチ流土除去。3号墳D・Eトレンチ拡張区流土除去。

8月28日　1号墳後円部主体部礫床断ち割り、精査。石棺立面図作成。Lトレンチ流土除去。

8月29日　1号墳Lトレンチ拡張区流土除去。3号墳D・Eトレンチ拡張区流土除去、精査。

8月30日　1号墳W、Lトレンチ流土除去。3号墳図面作成。東尾根部登坂道整備。

8月31日　1号墳石棺平面図作成。Lトレンチ拡張区流土除去。

9月1日　Wトレンチ拡張区流土除去。3号墳Cトレンチ平面図作成。

9月4日　鳴門市長来訪。1号墳W、Lトレンチ流土除去。N、Vトレンチ拡張区設定。Xトレンチ設置。現地説明会用見学道整備。

9月5日　マスコミ取材(11社)のための準備作業。

9月6日　文化庁、臼杵文部技官が来訪。1号墳L、S、W、Nトレンチ拡張区表土除去。Xトレンチ表土除去。

9月7日　Nトレンチ拡張区精査。Xトレンチ流土除去。墳頂部整備。Nトレンチ石列出土状況写真。

9月8日　Wトレンチ拡張区設定。調査区内見学道整備完了。

9月11日　現地説明会準備。

9月16日　現地説明会（約300名入場）。

9月17日　現地説明会（約1100名入場）。約1600名が見学（学識者200名、一般1400名）。

9月18日　現地説明会会場撤収。1号墳L、W、Sトレンチ流土除去。Gトレンチ表土除去。G、L、Wトレンチより埴輪片が多数出土。

9月20日　3号墳主体部蓋石除去、埋土除去。4号墳主体部表土除去、石棺（箱式）蓋石出土。

9月21日　1号墳主体部石棺周囲礫床取り外し。K、J、Yトレンチ拡張区流土除去。3号墳G・Hトレンチ流土除去。4号墳主体部表土除去、箱式石棺検出状況写真。

9月22日　1号墳主体部礫床取り上げ。石棺立面図作成。4号墳主体部平面図作成。

9月25日　東京国立博物館 原史室長　古谷毅氏来訪。3号墳主体部墓壙埋土除去。4号墳蓋石除去。(～26日)

9月26日　4号墳主体部埋土除去。Ⅱトレンチ表土除去（南側）。4号墳主体部より鉄刀が出土。

9月27日　1号墳後円主体部礫床取り上げ。U、L、Wトレンチ拡張区流土除去。Tトレンチ流土除去。3号墳G・Bトレンチ精査、写真。4号墳主体部精査。調査区外トレンチ表土、流土除去。

9月28日　4号墳主体部精査、鉄刀取り上げ、写真、完掘状況平面図作成。調査区内整備。

10月2日　大代古墳保存範囲ポイント設定。ポイント図（S=1/400）作成。

10月3日　1号墳主体部完掘状況写真。調査区全景完掘状況写真。Pトレンチ流土除去。

10月4日　1号墳Gトレンチ拡張区設定、表土除去。L、W、N、Qトレンチ精査。3号墳Dトレンチ拡張区流土除去。4号墳主体部墓壙埋土除去。空撮に伴う調査区整備。

10月6日　1号墳、2号墳、3号墳、4号墳空中写真撮影。

10月10日　1号墳主体部清掃（石棺等）レプリカ作成に伴うもの。Zトレンチ表土、流土除去。Tトレンチ拡張区流土除去。Wトレンチ清掃、精査。4号墳主体部墓壙流土除去、側石除去。

10月11日　1号墳主体部石棺清掃、空撮に伴う清掃作業。4号墳壁体石取り上げ。墓壙清掃、精査。2号墳埋め戻し。3号墳Dトレンチ拡張区より結晶片岩が出土。

10月12日　1号墳Tトレンチより埴輪基底部が出土。4号墳主体部埋土除去終了。レプリカ作成（京都科学）。

10月14日　主体部石棺レプリカ作成現地作業（京都科学）。

10月17日　石棺埋土ふるいがけ。トレンチ埋め戻し（3号墳各トレンチ、1号墳一部トレンチ）。石棺埋め戻し準備。

10月18日　各トレンチ埋め戻し。主体部埋土ふるいがけ。Gトレンチ埴輪基底部内完掘作業。

10月19日　1号墳主体部断ち割り。後円部北側清掃、精査。

10月26日　1号墳主体部埋土埋め戻し。主体部埋土内より臼玉及び鉄剣（鉄製品）が数点出土。

10月30日　墳丘部埋め戻し。主体部盗掘坑埋土ふるいがけ。

11月6日　埴輪基底部取り上げ。

11月8日　各トレンチ埋め戻し。1号墳埋め戻し。表土整地作業。

11月14日　調査区養生。物品撤収。

11月15日　引越し作業。

# 2　調査成果

## （1）遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・6・24図）

調査地点は鳴門市大津町大代の阿讃山脈東端南麓、標高約43mの尾根上に位置する。現況は山林である。徳島県鳴門市の南西部、吉野川河口の北岸、鳴門市大麻町の阿讃山脈南麓の低丘陵には多くの古墳が形成され、近隣には萩原墳墓群・天河別神社古墳群・宝幢寺古墳などの前期古墳が所在する。

## （2）古墳群の構成（第2・3図）

### 調査概要

大代古墳は徳島県と香川県を分断する阿讃山脈の東端南麓、標高約43mを測る尾根上に位置する。2000年3月10日、立木伐採後の調査区域確認のための立会によってその存在が明らかとなった。大代古墳が所在する尾根上には、大代古墳を中心としてその周囲に2基の円墳が築かれており、計3基の古墳群を構成している。また大代古墳から東方向にのびる尾根先端部の斜面では墳丘を伴わない箱式石棺1基を検出している。

平成12年度に、大代古墳を含む古墳群の範囲確定のため、周辺3,840m²についてS=1/200、25cmコンタラインによる平板地形測量を実施した。地形測量により確認された大代古墳北側の円墳を2号墳、南側の円墳を3号墳とする。また地形測量と併行して、東尾根部、大代古墳、2号墳、3号墳および東尾根部で検出された1号箱式石棺の順に試掘調査を行った。大代古墳については現状保存を念頭に置き、必要最小限のトレンチによる確認調査にとどめた。調査の概略については以下の通りである。

東尾根部では、尾根頂上にA～Fの6ヵ所のトレンチを設定して掘削作業を実施した。A～Fトレンチでは、表土直下は和泉層群起源の砂岩・泥岩の礫群の岩盤となっており、上からの流れ込みと思われる摩滅した埴輪小片が少量出土したが、遺構は確認されなかった。

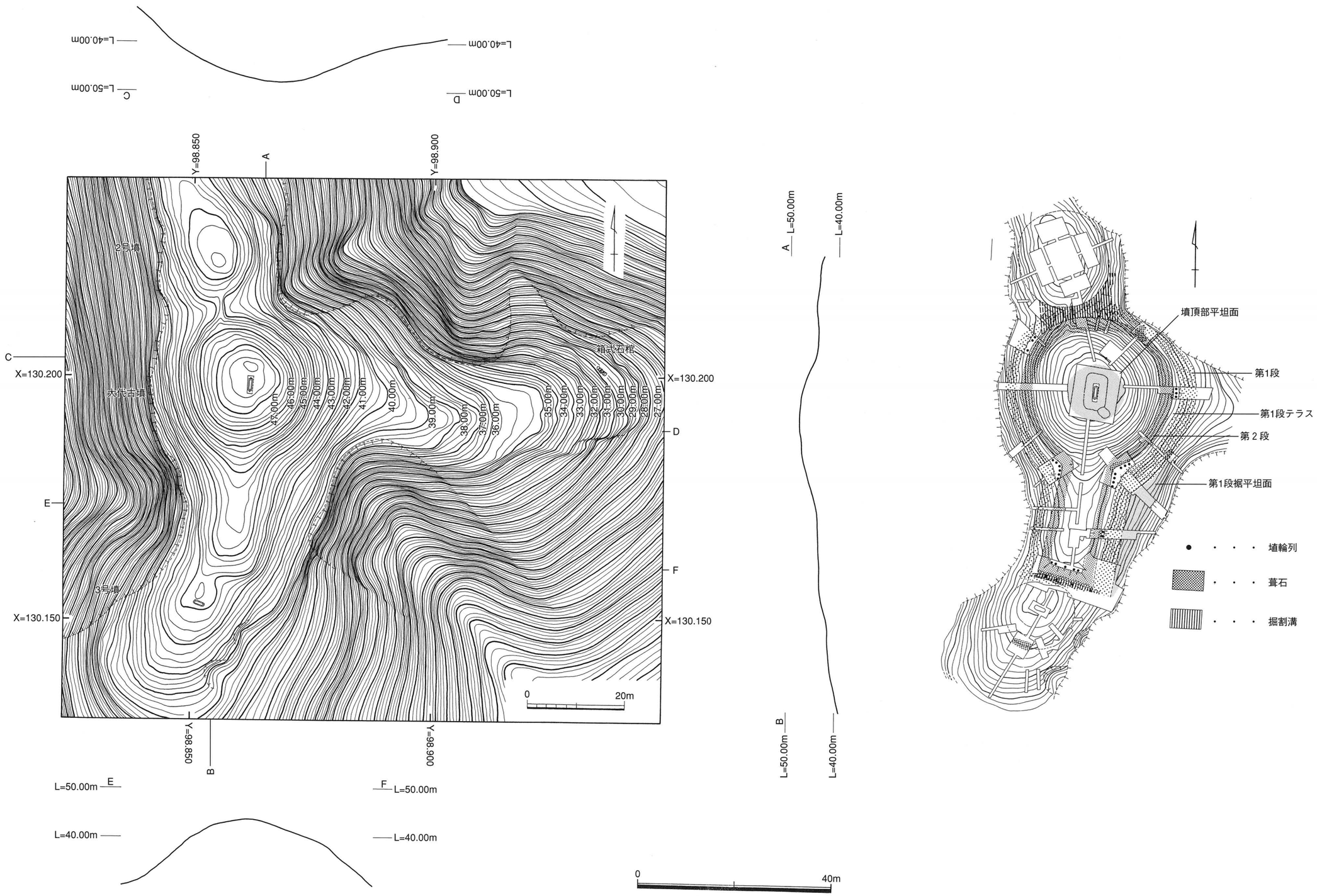
大代古墳については、主体部と墳丘部の両方の調査を実施した。墳丘部はG～Zの20ヵ所のトレンチを設定し、墳丘構造の把握に必要な最小限度の調査を実施した。また石棺については、レプリカの製作を実施し、当センターに展示・活用されている。

2号墳は東西中心軸にⅠ・Ⅱトレンチを設定し、掘削作業を実施した。また墳頂部には放射状に5ヵ所の調査区を設定し、調査を行った。2号墳は直径約22m程度の円墳で、地山削出しにより墳丘を整形する。葺石、埴輪等の外表施設は確認していない。また主体部も未確認である。

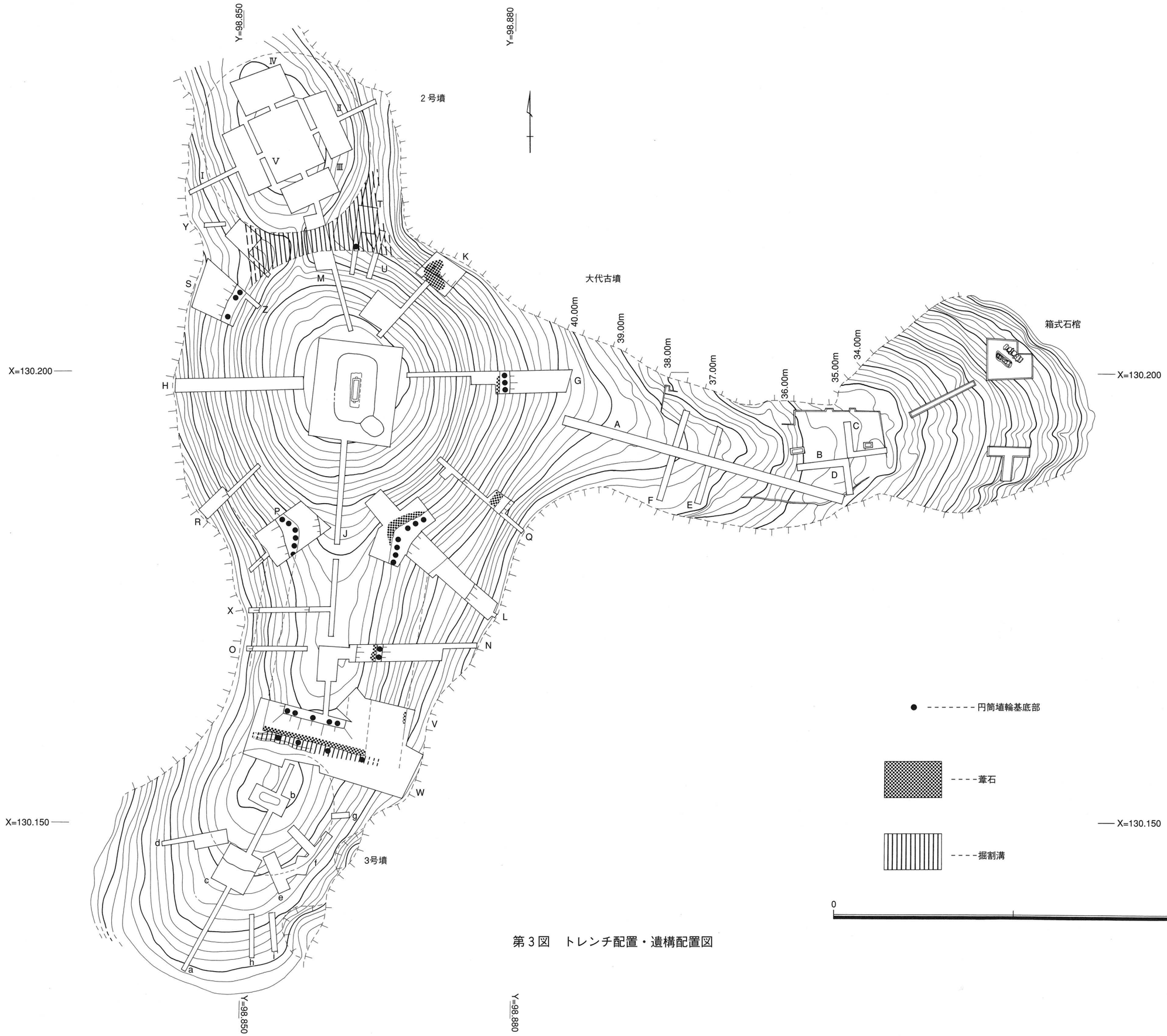
3号墳はa～iの9ヵ所のトレンチを設定し、必要最小限度の調査を実施した。3号墳は直径約15mの円墳である。墳丘斜面において葺石を、墳頂部において円筒埴輪基底部1基を検出した。主体部として箱式石棺1基を検出したが、構築位置が墳丘の中心軸からやや北にずれることから、さらに別の埋葬主体が存在する可能性も考えられる。

調査途中に東尾根部東端斜面において箱式石棺が検出され、1号箱式石棺として本調査を実施した。

なお本墳の調査概要については速報として一部報告を行っている（菅原・幸泉 2000）。




第 2 図　大代古墳周辺地形平面・大代古墳墳丘断面図および大代古墳墳丘各段企画模式図




第3図　トレンチ配置・遺構配置図

## （3）大代古墳（1号墳）

### 各トレンチの所見

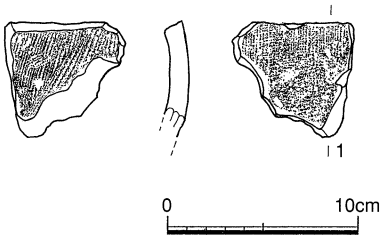
調査に先立ち、現況地形測量を実施し、墳丘位置を確認した後、現地保存を念頭に置き、古墳の規模形状・墳丘構造の把握に必要な最小限度のトレンチ調査を実施した。また必要に応じてトレンチの拡張も行った。各トレンチは墳丘・調査区斜面に平行もしくは直交するように設定した。

### Aトレンチ（第4図）

東尾根部の尾根筋に沿って斜面に直交するように、東西方向に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤である。出土遺物はほとんど無く、若干の埴輪小片が出土したのみである。

### 出土遺物（第5図）

円筒埴輪片が出土したが、小片のため詳細は不明である。1は円筒埴輪の口縁部片である。器面調整は、外面タテハケ、内面は斜め方向のハケを施す。




第5図　Aトレンチ出土埴輪

### B・Cトレンチ（第6図）

東尾根部に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤である。遺構・遺物の出土はみられない。

### 出土遺物

出土遺物はなかった。

### D～Fトレンチ（第6図）

東尾根部に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤である。出土遺物は若干の土師器細片が出土したのみである。

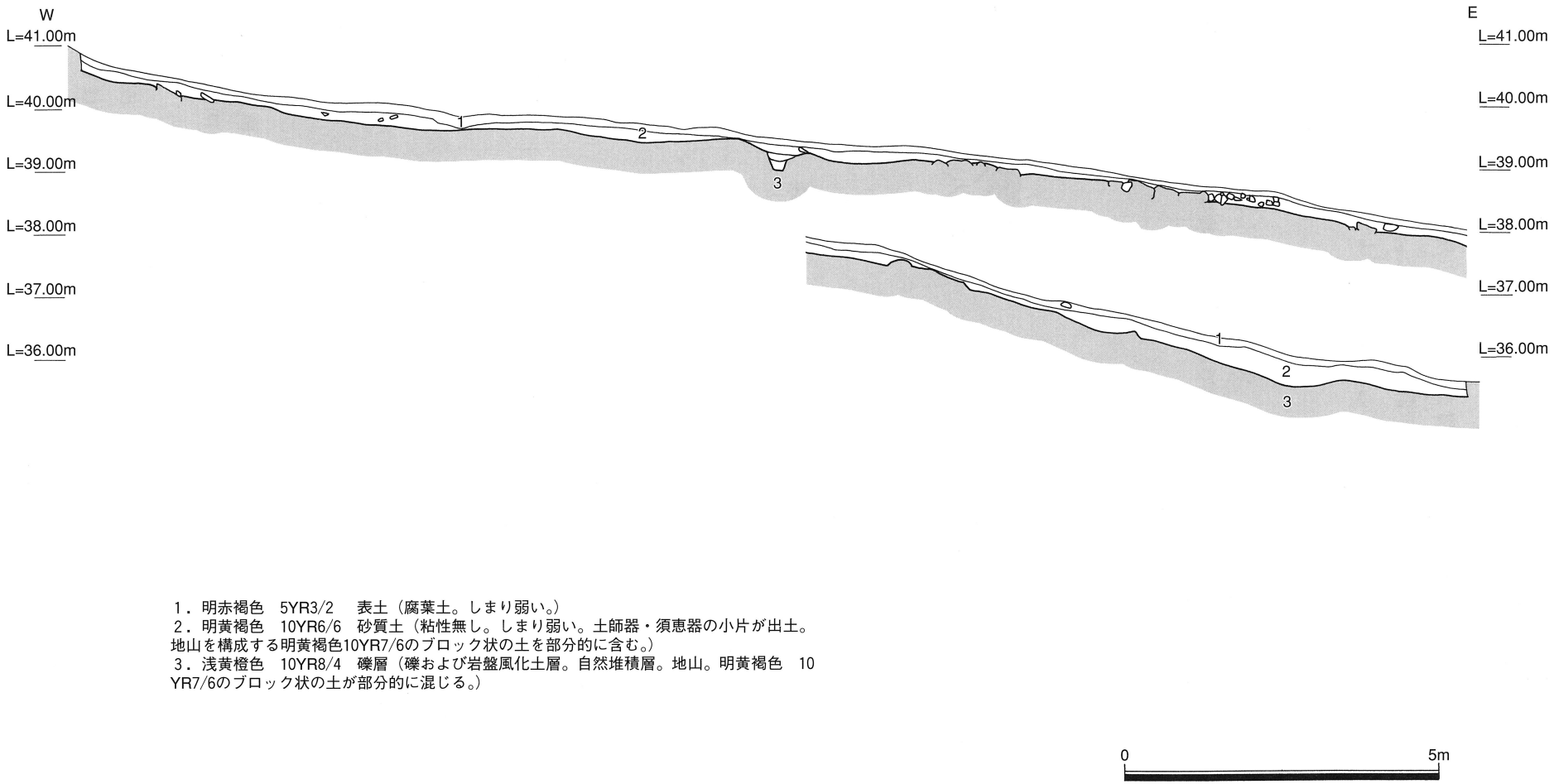
### 出土遺物

出土遺物は細片のため、実測可能なものはなかった。

### Gトレンチ（第7・8図）

後円部東側斜面に直交するように設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

第1段外周裾、第1段テラス、第2段外周裾を確認し、また墳丘裾、および第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。葺石は流出のためか、遺存状況は良くない。葺石はその出土状況から墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画する構造をとるものと思われる。




1．明赤褐色　5YR3/2　表土（腐葉土。しまり弱い。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性無し。しまり弱い。土師器・須恵器の小片が出土。地山を構成する明黄褐色10YR7/6のブロック状の土を部分的に含む。）
3．浅黄橙色　10YR8/4　礫層（礫および岩盤風化土層。自然堆積層。地山。明黄褐色　10YR7/6のブロック状の土が部分的に混じる。）

0　5m

第４図　Ａトレンチ土層断面図

第１段テラス上において、円筒埴輪列の基底部を確認した。基底部は中心点間の距離がいずれも約90㎝を測り、一定の基準にもとづいて埋設されたものとみられる。

このほか墳丘調査区の流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土した。基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

**出土遺物**（第９・10図）

出土した円筒埴輪片はいずれも小片である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30㎝前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの２者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

墳丘流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

２～15は形象埴輪で、家形（２・６・７・８・９・10・11・12・13・14）、蓋形（３・15）、盾形（４・５）がある。

家形のうち、２・11・12は縦横の線刻による網代文様をもつ屋根部分である。９は軒先に水平方向の格子によって押縁を表現したものである。上半は摩滅していて表面が残っていない。７・８・10・11・13・14は表裏ともに表面調整が粗く、内部構造または基部にあたる。10・14は角材状の部材を表したもの、13は壁体で下辺に突帯の剥離痕跡がある。なお家形埴輪についての用語は、宮本氏の表現に準じた（宮本 1996）。

蓋形のうち、３は表裏の同位置に平行な線刻をもつもので、立飾とみられる。15は円筒形の軸部に扁平な突帯を貼り付け、２条の平行な線刻を重ねる。軸部にも斜位の線刻がある。

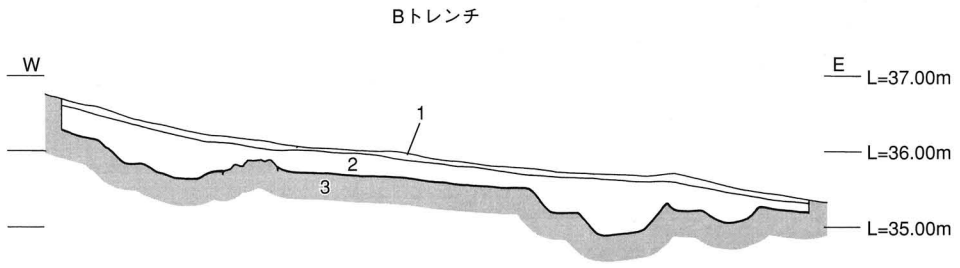
盾形はいずれも小片で、うち４は盾面の外向鋸歯文の一部と思われる。

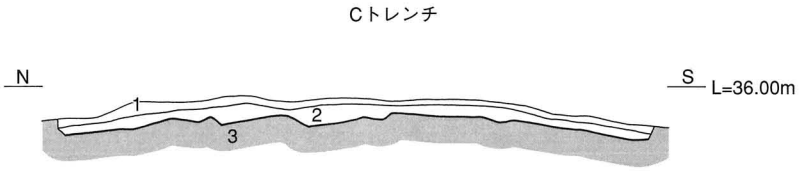
**Ｈトレンチ**（第11図）

後円部西側斜面、Ｇトレンチの対面に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。第１段外周裾、第１段テラス、第２段外周裾を確認したが、遺存状況はあまり良くない。流出のためか葺石・円筒埴輪列基底部は検出されなかった。

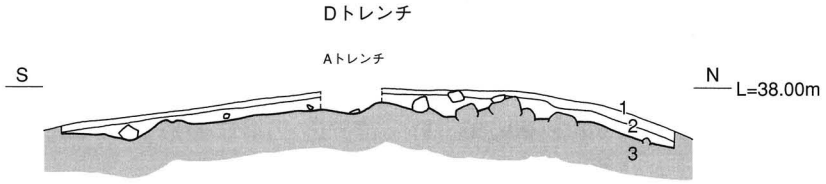
**出土遺物**（第12図）

出土した埴輪片には円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。いずれも小片であるため、詳細は不明である。胴部には断面台形状を呈するタガがめぐるが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテ

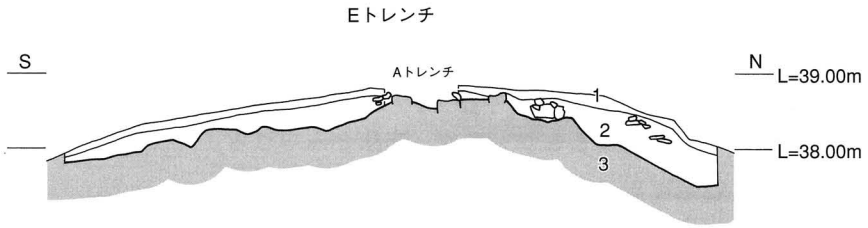


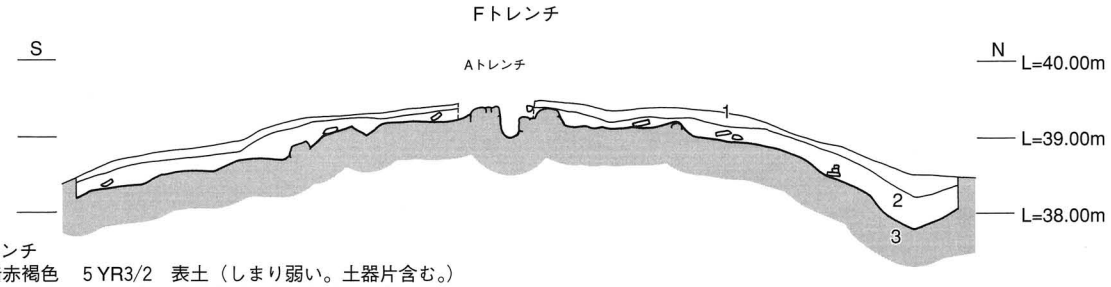




B・C トレンチ土色
1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（腐葉土。A トレンチ1層と対応。しまり弱い。土器片含む。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（A トレンチ2層と対応。粘性無し。しまり弱い。）
3．浅黄橙色　10YR8/4　礫層（A トレンチ3層と対応。地山。拳大以上の砂岩系礫に明黄褐色10YR7/6のブロック状の土が部分的に混じる。）




D・E トレンチ土色
1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（A トレンチ1層と対応。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（A トレンチ2層と対応。土師器小片を出土。）
3．浅黄橙色　10YR8/4　礫層（A トレンチ3層と対応。人頭大程度の砂岩系礫（地山）が3層上面に多く露出している。）

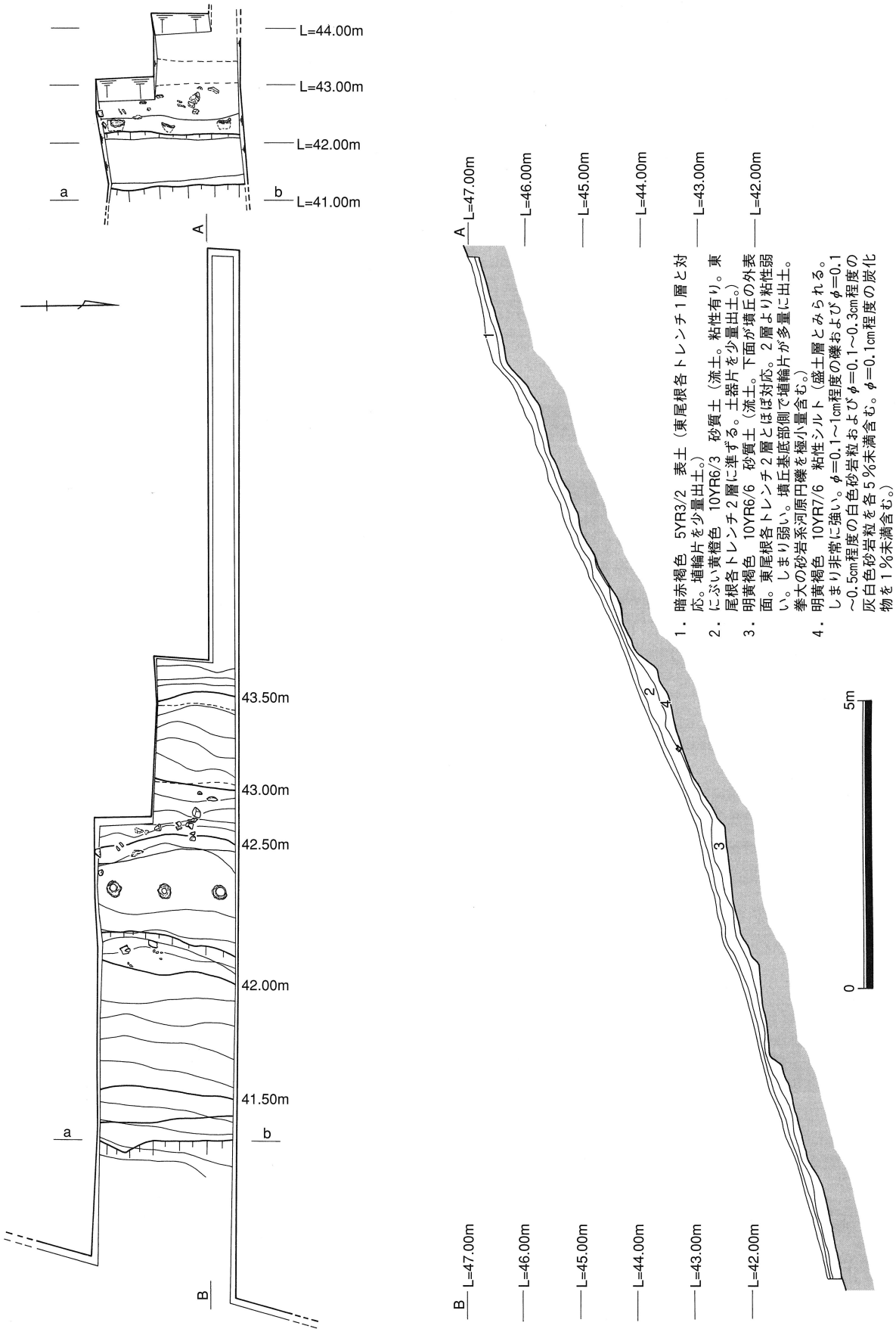


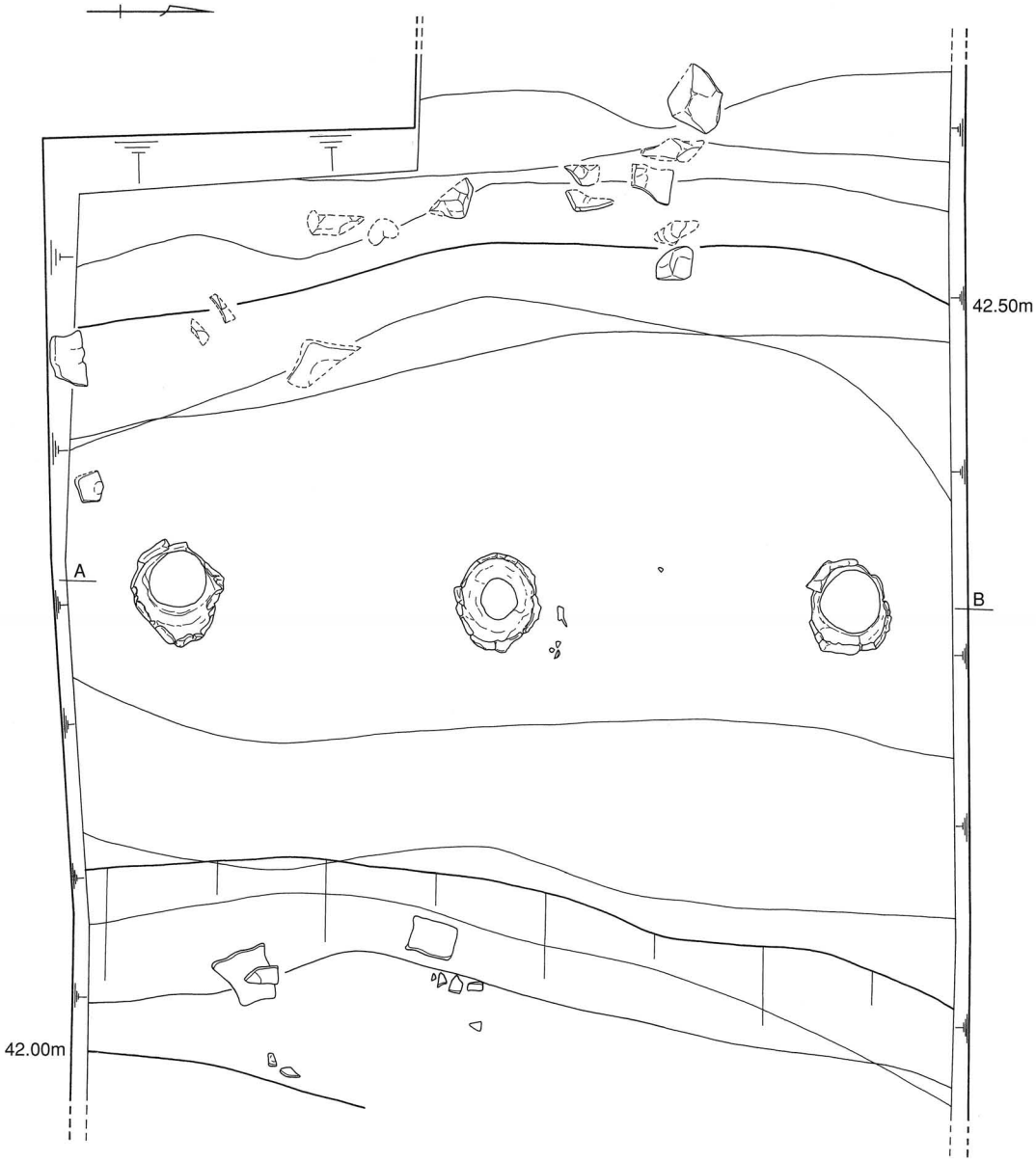

F トレンチ
1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（しまり弱い。土器片含む。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（流土。粘性やや有り。しまり弱い。礫及び埴輪片を含む。）
3．浅黄橙色　10YR8/4　礫層(A トレンチ3層と対応。人頭大程度の砂岩系礫（地山）が3層上面に多く露出している。)

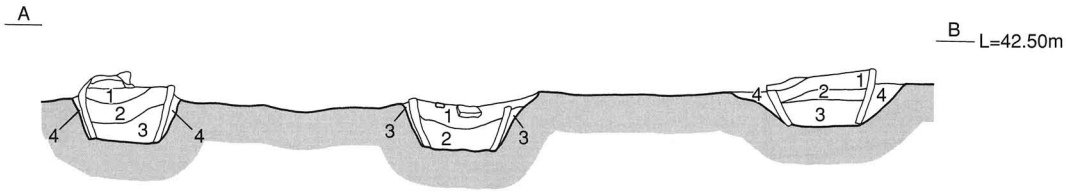
0　5m

第6図　B～F トレンチ土層断面図




第7図　Gトレンチ平・断・立面図




埴輪1　　埴輪2　　埴輪3

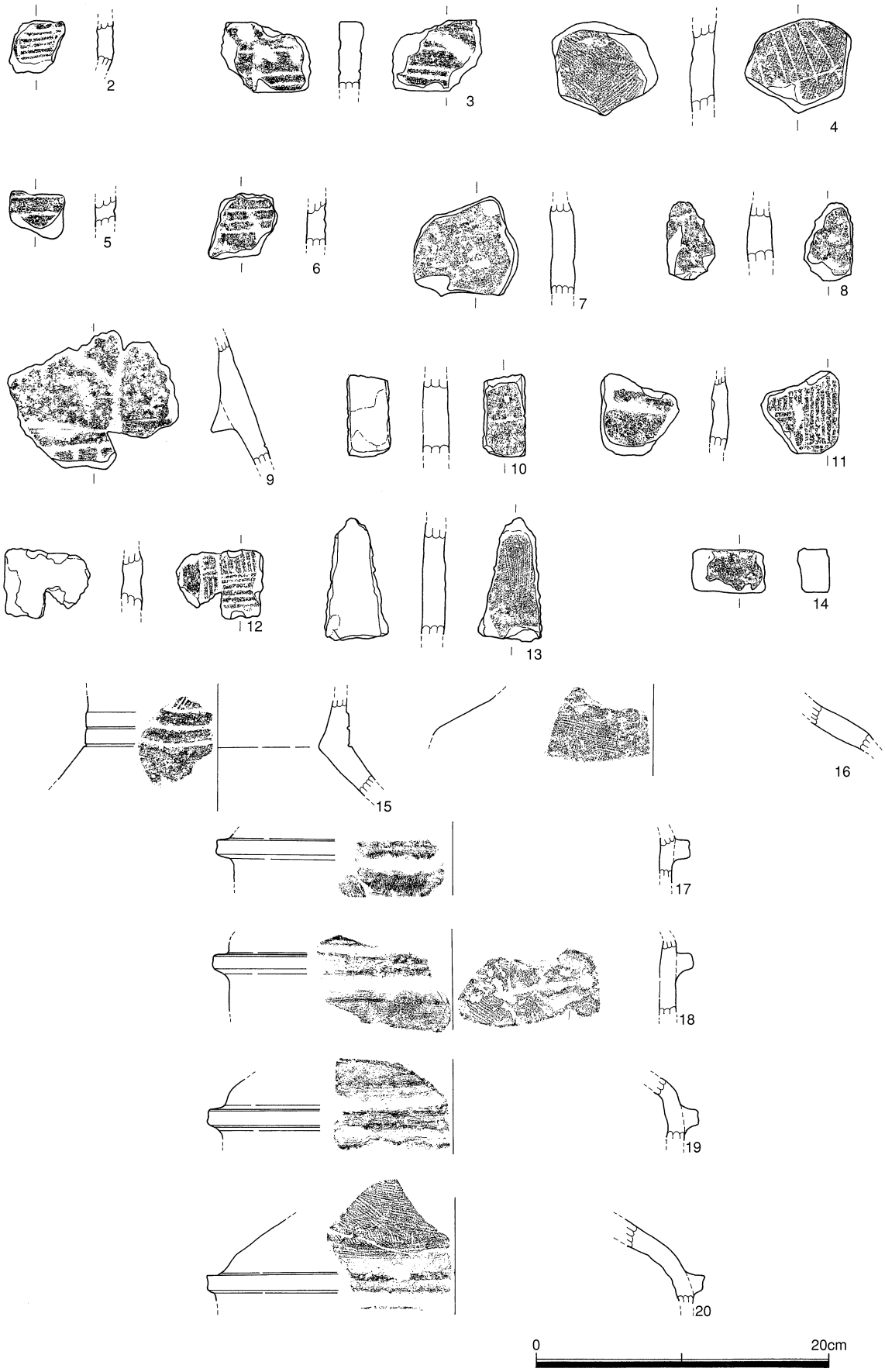
埴輪1
1．橙色　2.5YR6/6　砂質土（土師器細粒を多く混入。極めてしまり強い。埴輪基底部を固定する埋土層。φ=0.1～0.7cm程度の礫、土師器細片等を多く含む。φ=0.1～1cm程度の白色系軟質砂岩粒10%未満および明黄褐色系の礫粒 φ=0.1～0.4cm程度を３%未満含む。土器を粉末状にして土壌中に混入しているものとみられる。）
2．橙色　7.5YR7/6　粘性シルト（φ=0.3～1.5cm程度の地山系角礫を多く含む。粘性強い。しまり強い。土器粉末を若干混入した可能性あり。人為的流土層。）
3．明黄褐色　10YR6/8　粘性シルト（粘性かなり強い。しまり強い。φ=0.5cm未満の白色系軟質砂岩粒を３%未満含む。人為的な盛土層。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　粘性シルト（粘性弱い。しまりかなり良い。埴輪を固定するための埋土層。）

埴輪2
1．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（流土層。粘性あり。φ=0.5～1.5cm程度の砂岩系礫を５%未満含む。）
2．赤褐色　2.5Y4/6　粘性シルト（しまり非常に強い。人為的埋土土中に埴輪と同質の土師器細粒を混入している。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（しまり強い。φ=0.1cm前後の砂粒を５%未満含む。）

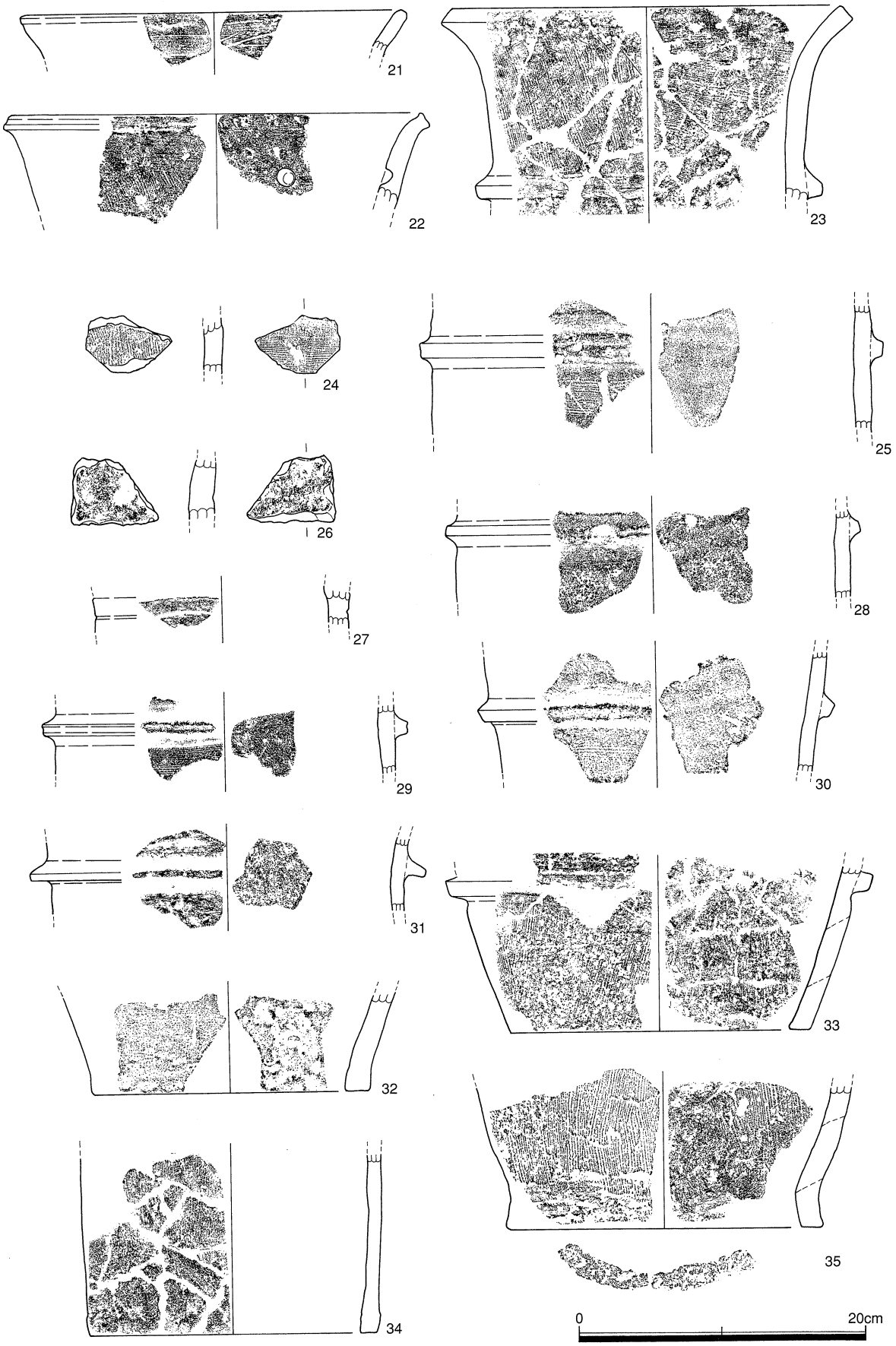
埴輪3
1．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（流土層。粘性あり。しまり強い。φ=0.5～1.5cm程度の砂岩系礫を５%未満含む。）
2．赤褐色　2.5Y4/6　粘性シルト（粘性強い。しまり非常に強い。人為的埋土。土師器細粒を混入している。）
3．黄橙色　10YR7/8　粘性シルト（しまり非常に強い。φ=0.5cm以内の少量の砂粒を均一に３～５%含む。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（しまり強い。φ=0.1cm前後の砂粒を５%未満含む。）

0　　2m

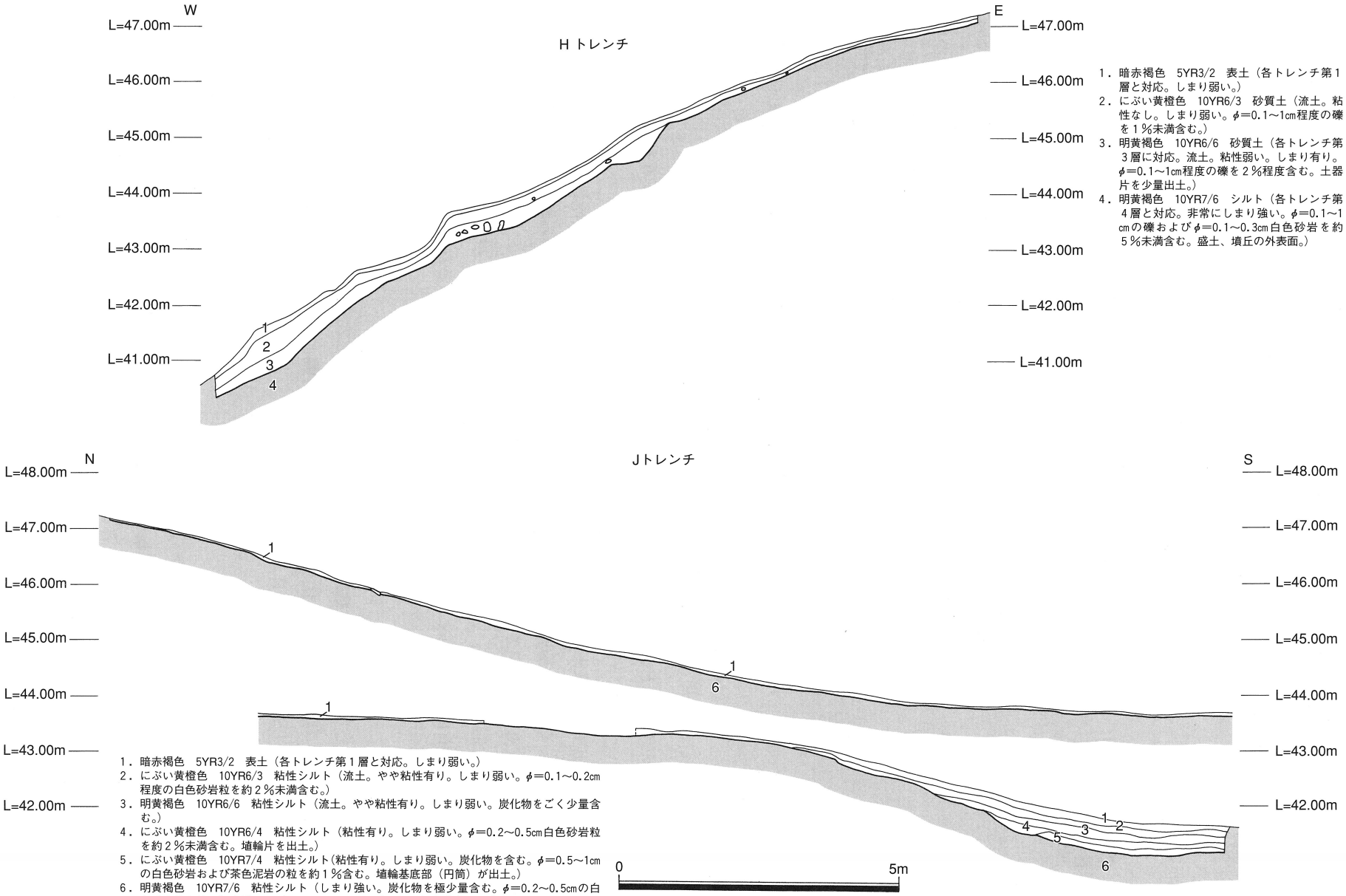
第８図　Ｇトレンチ円筒埴輪基底部平・断面図




第９図　Ｇトレンチ出土埴輪１



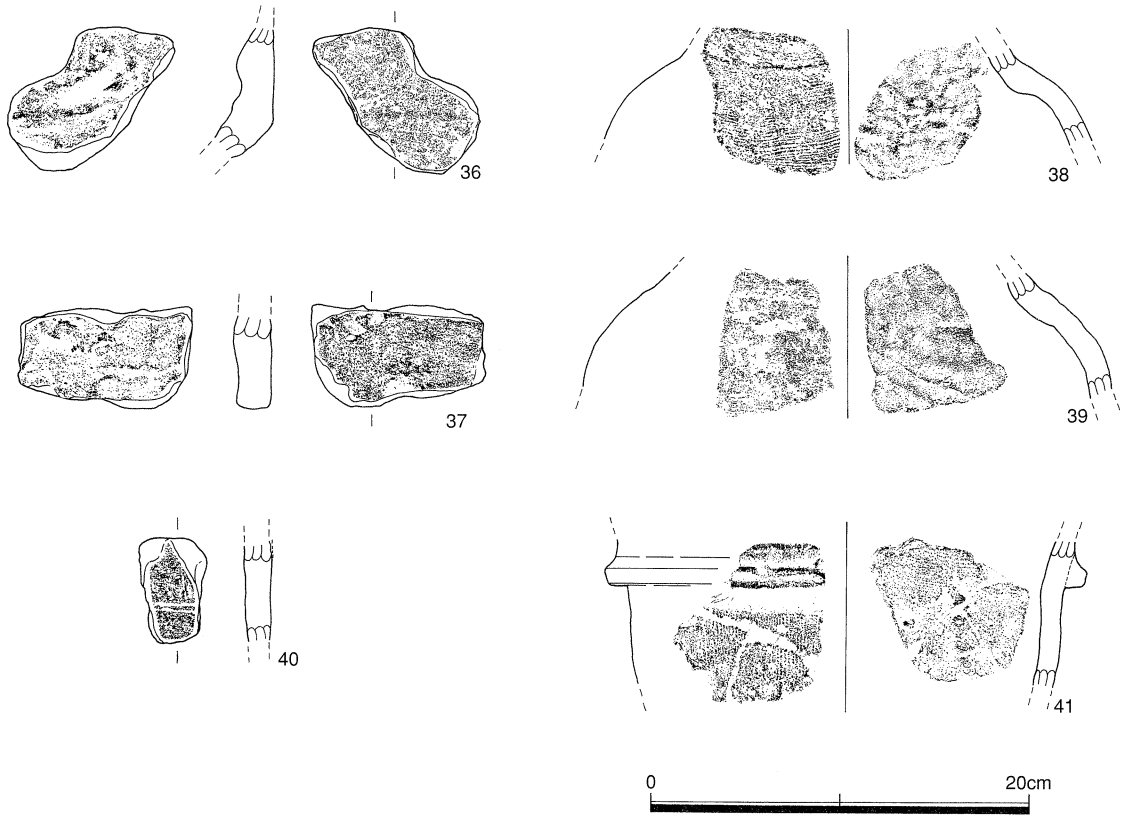

第10図　Ｇトレンチ出土埴輪２




1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（各トレンチ第１層と対応。しまり弱い。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（流土。粘性なし。しまり弱い。φ=0.1～1cm程度の礫を１％未満含む。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（各トレンチ第３層に対応。流土。粘性弱い。しまり有り。φ=0.1～1cm程度の礫を２％程度含む。土器片を少量出土。）
4．明黄褐色　10YR7/6　シルト（各トレンチ第４層と対応。非常にしまり強い。φ=0.1～1cmの礫およびφ=0.1～0.3cm白色砂岩を約５％未満含む。盛土、墳丘の外表面。）

1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（各トレンチ第１層と対応。しまり弱い。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/3　粘性シルト（流土。やや粘性有り。しまり弱い。φ=0.1～0.2cm程度の白色砂岩粒を約２％未満含む。）
3．明黄褐色　10YR6/6　粘性シルト（流土。やや粘性有り。しまり弱い。炭化物をごく少量含む。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　粘性シルト（粘性有り。しまり弱い。φ=0.2～0.5cm白色砂岩粒を約２％未満含む。埴輪片を出土。）
5．にぶい黄橙色　10YR7/4　粘性シルト(粘性有り。しまり弱い。炭化物を含む。φ=0.5～1cmの白色砂岩および茶色泥岩の粒を約１％含む。埴輪基底部（円筒）が出土。）
6．明黄褐色　10YR7/6　粘性シルト（しまり強い。炭化物を極少量含む。φ=0.2～0.5cmの白色砂岩粒を約３％未満およびφ=0.2～0.5cmの礫を約２％未満含む。盛土、墳丘外表面となる可能性が高い。）

第11図　Ｈ・Ｊトレンチ土層断面図




第12図　Ｈトレンチ出土埴輪

ハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

墳丘流土内から出土した家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

形象埴輪には、家形（36・37）があり、家形または蓋形とみられる（40）がある。

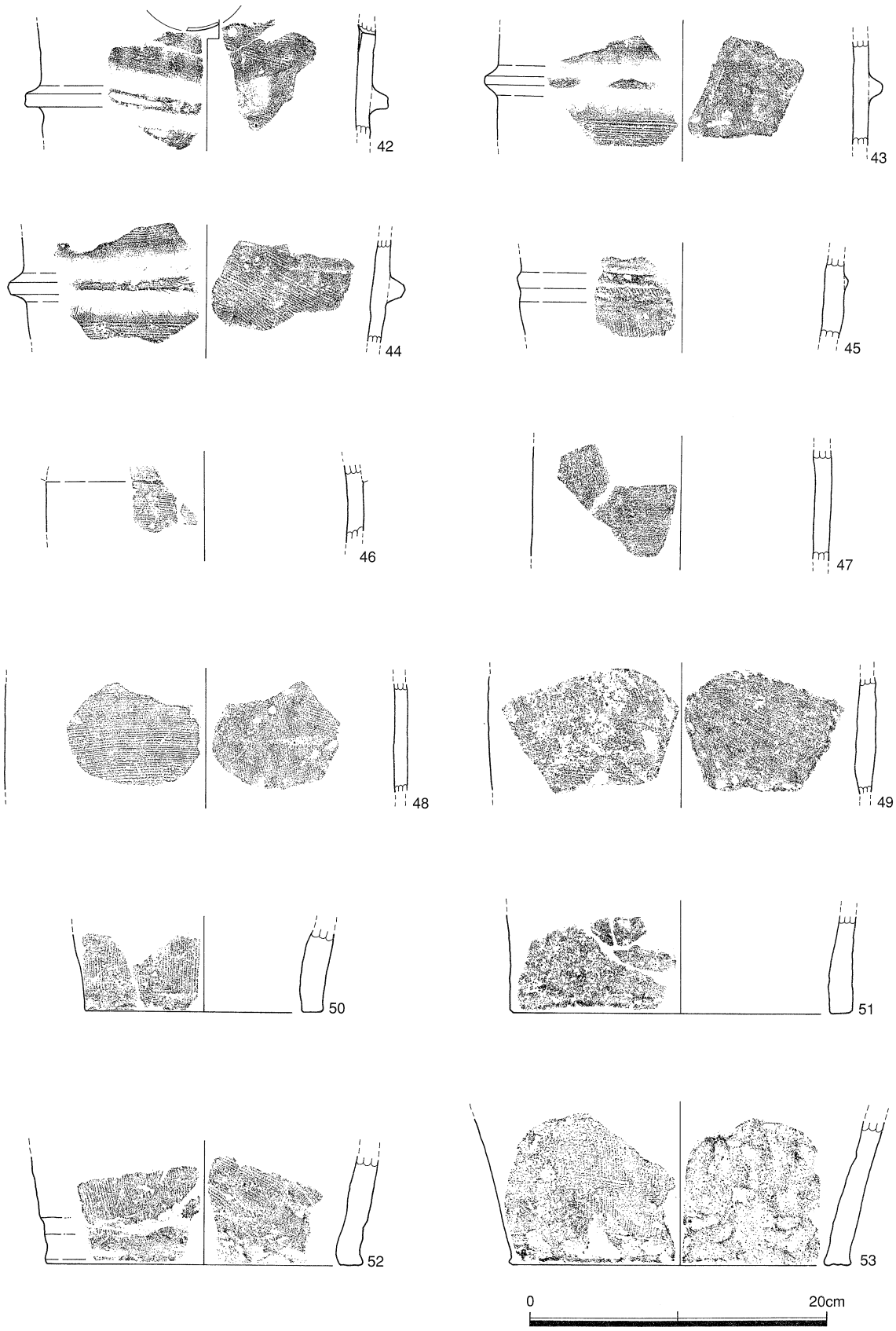
家形のうち、36は断面「へ」字形となる鼠返形突帯で、上面は平滑に整形されている。37は基部である。

Ｊトレンチ（第11図）

後円部南側斜面から前方部前面掘割溝にかけて南北方向に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となるが、２層以下は掘割溝内堆積土である。掘割溝内埋土からは円筒埴輪片等が出土している。

出土遺物（第13図）

埴輪片が出土している。主に掘割溝内からの出土であり原位置は遊離している。いずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、胴部に断面台形状を呈するタガがめぐるが、その条数については不明である。器面調整は、１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。




第13図　Ｊトレンチ出土埴輪

Kトレンチ（第14図）

後円部北東側、斜面に直交して設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

第１段テラス、第２段外周裾を確認したが、流出のためか、円筒埴輪列は検出されなかった。また第１段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。出土状況から葺石は墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用する。基底石には人頭大程度のやや大型材を使用し、列石状に裾部に並べる。その上に葺石を墳丘斜面に張り付けるように積み上げて外周を巡らせる。

出土遺物（第15～24図）

墳丘流土内からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。出土した埴輪片はいずれも小片であるため、詳細は不明である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの２者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

墳丘流土内から出土した朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪片については、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

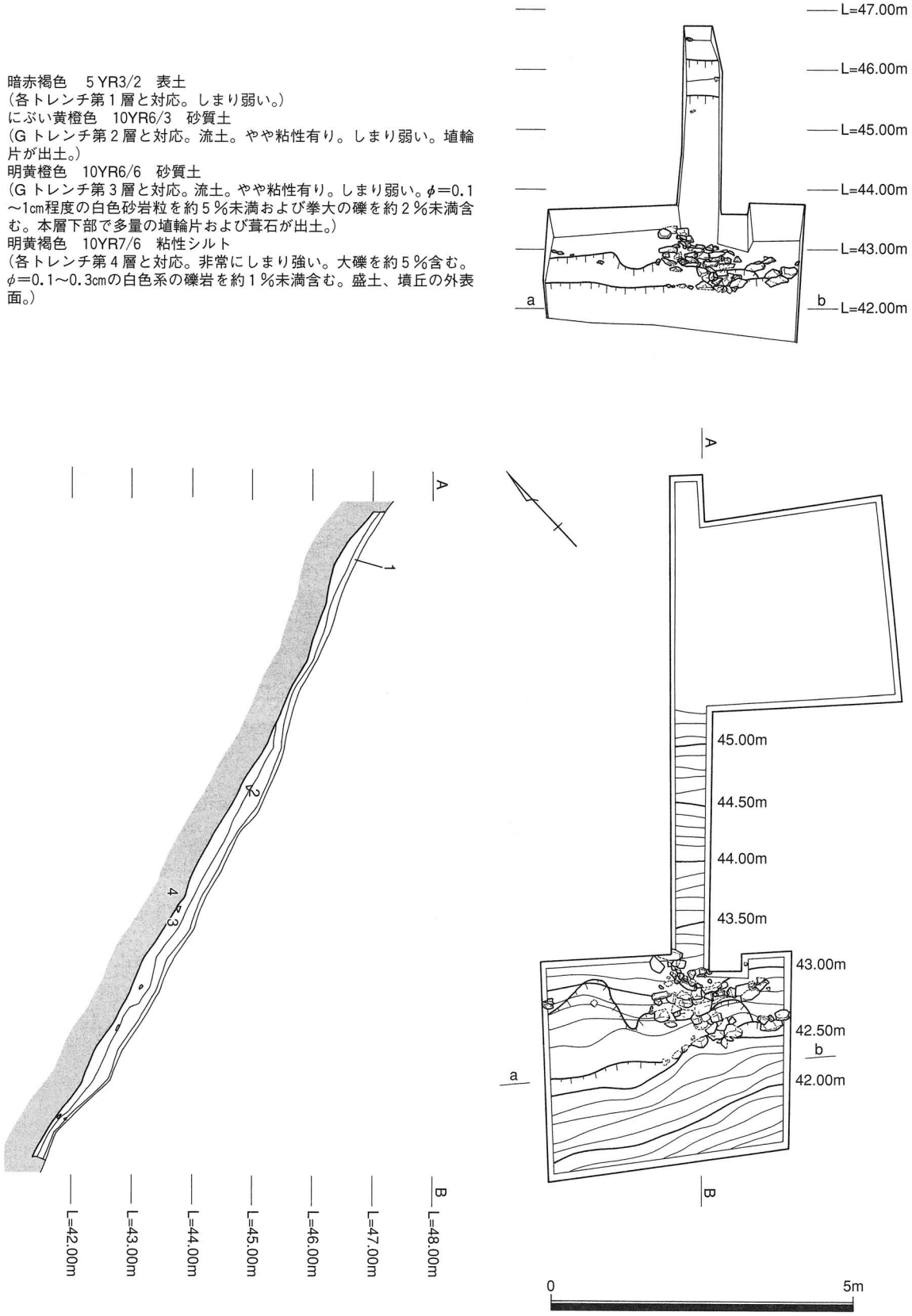
54～145は形象埴輪で、家形・靫形・蓋形があり、盾形とみられるものもある。54～56は、線刻による網代文様を表現した寄せ棟造りの屋根部分の上半部分である。棟覆は線刻を付した扁平幅広な突帯を縦・横に貼り付けることで表現している。網代は縦横の区画を広く割り付けてから、小さい単位に分割しているため、部分的に当初の割付線が残る。妻側の縁辺と中央にも同様に棟覆の突帯と網代文様が表される。このパーツと同様に網代文様がある破片には72・80・144がある。

71・88は網代文様をもたない寄せ棟造りの屋根の上半部分である。上述のものと比較して全体に小形である。妻・屋根双方ともに54～56と同様のパターンの棟覆をもつが、突帯ではなく線刻による表現を施す。

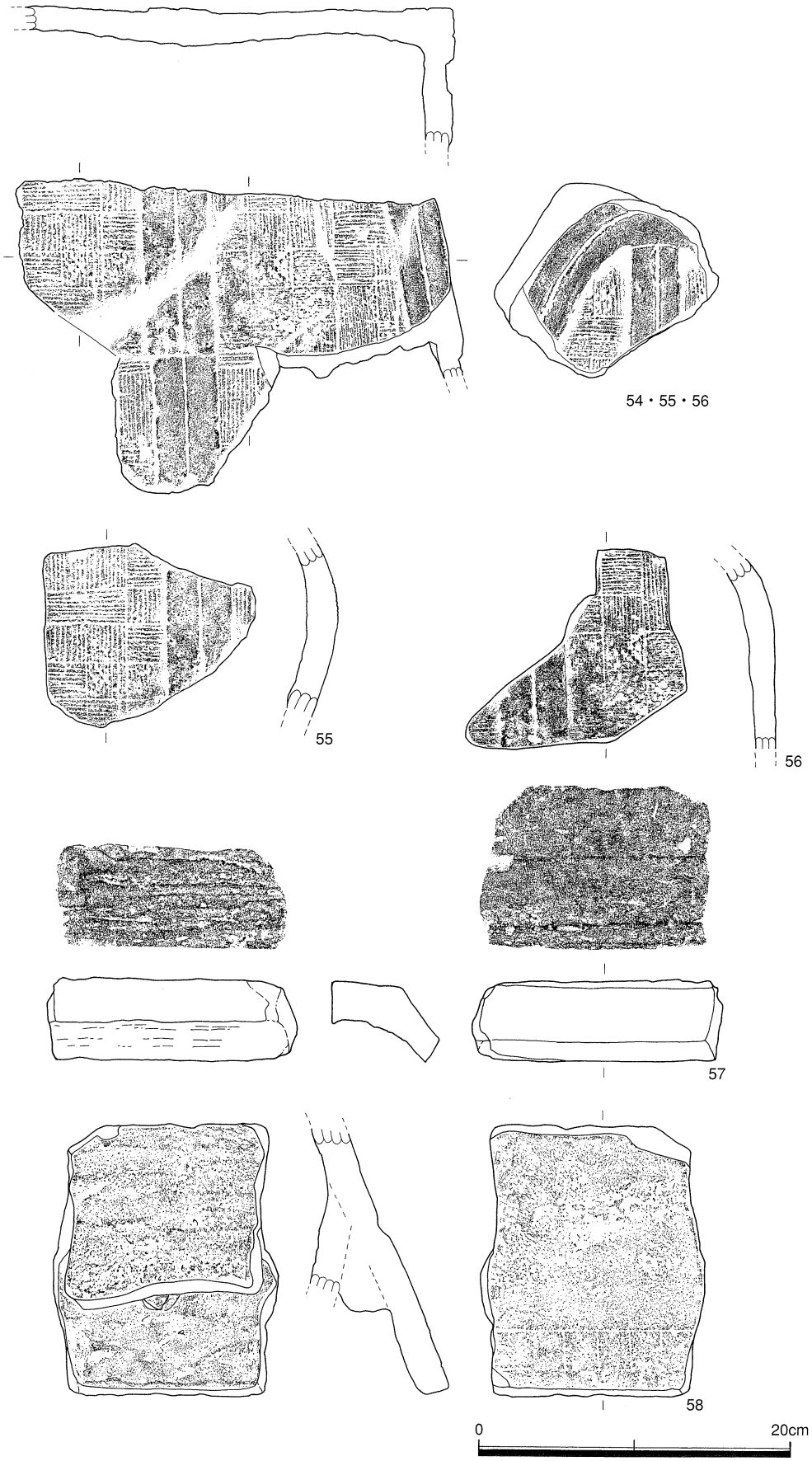
屋根の軒部分には、器壁が厚手で軒が深く押縁の格子が大きく表現されたもの（58・86）と、やや薄目の器壁で軒が浅く押縁の格子が小振りなもの（59・65・74・79・103）とがある。58は軒の重量を支えるための補強の粘土塊が軒下に用いられている。屋根の面が完全に剥落している140にも同様の補強がある。66・96も屋根との接合付近の破片である。軸部と屋根の接合はいずれも軸部の上端面全体で屋根を受ける技法である（青柳 1995）。

壁体部分としては、69・70・77・85・92・98・104・122・141・142がある。いずれも板状の破片で、縦方向のハケの施される個体とハケをもたない個体とがある。69・70・92にはコーナーが表れている。70には線刻により扉を表現している。69の線刻状に入った圧痕は、成形時のものである。

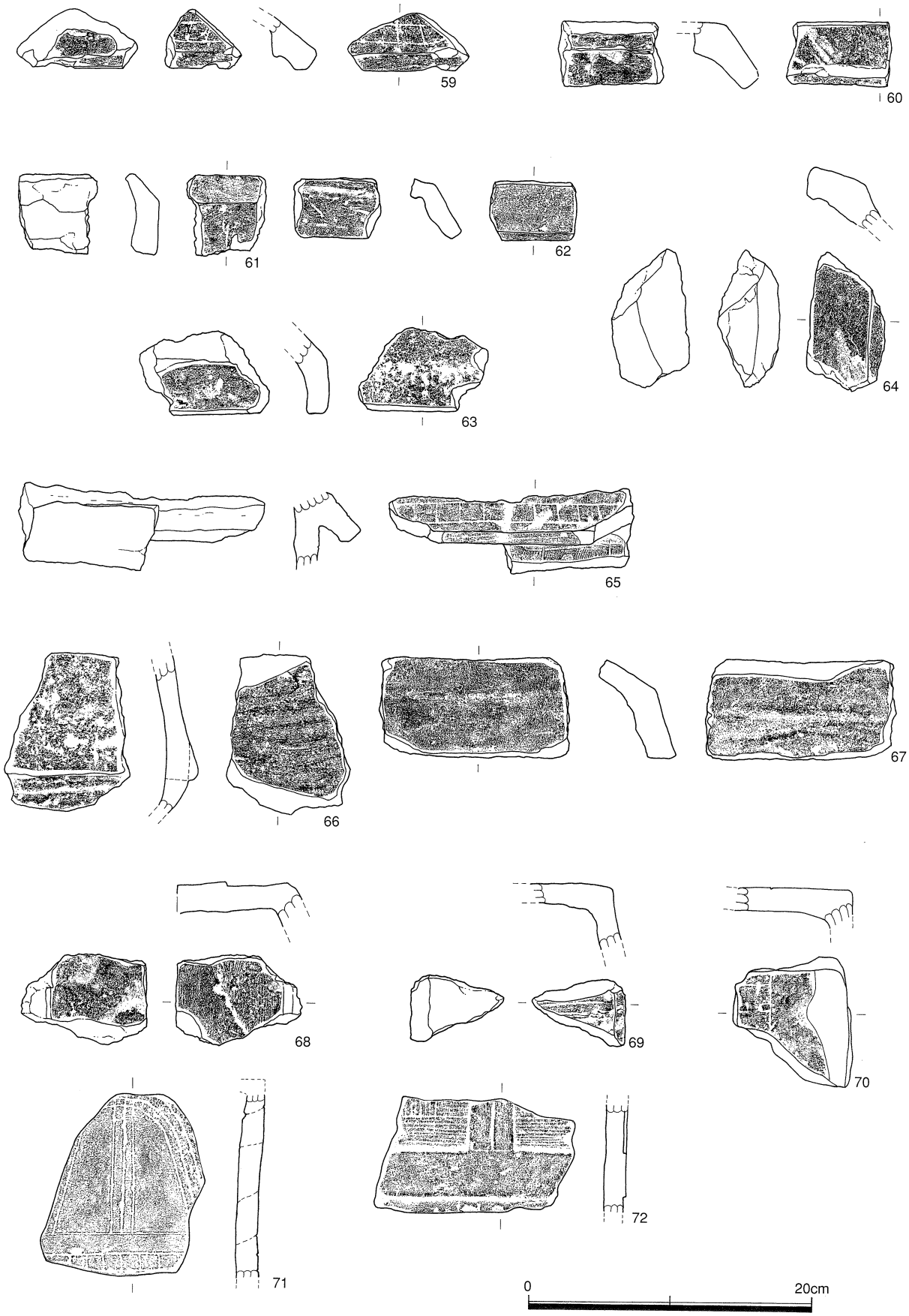
1．暗赤褐色　5YR3/2　表土
（各トレンチ第1層と対応。しまり弱い。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土
（Gトレンチ第2層と対応。流土。やや粘性有り。しまり弱い。埴輪片が出土。）
3．明黄橙色　10YR6/6　砂質土
（Gトレンチ第3層と対応。流土。やや粘性有り。しまり弱い。$\phi$=0.1～1㎝程度の白色砂岩粒を約5％未満および拳大の礫を約2％未満含む。本層下部で多量の埴輪片および葺石が出土。）
4．明黄褐色　10YR7/6　粘性シルト
（各トレンチ第4層と対応。非常にしまり強い。大礫を約5％含む。$\phi$=0.1～0.3㎝の白色系の礫岩を約1％未満含む。盛土、墳丘の外表面。）



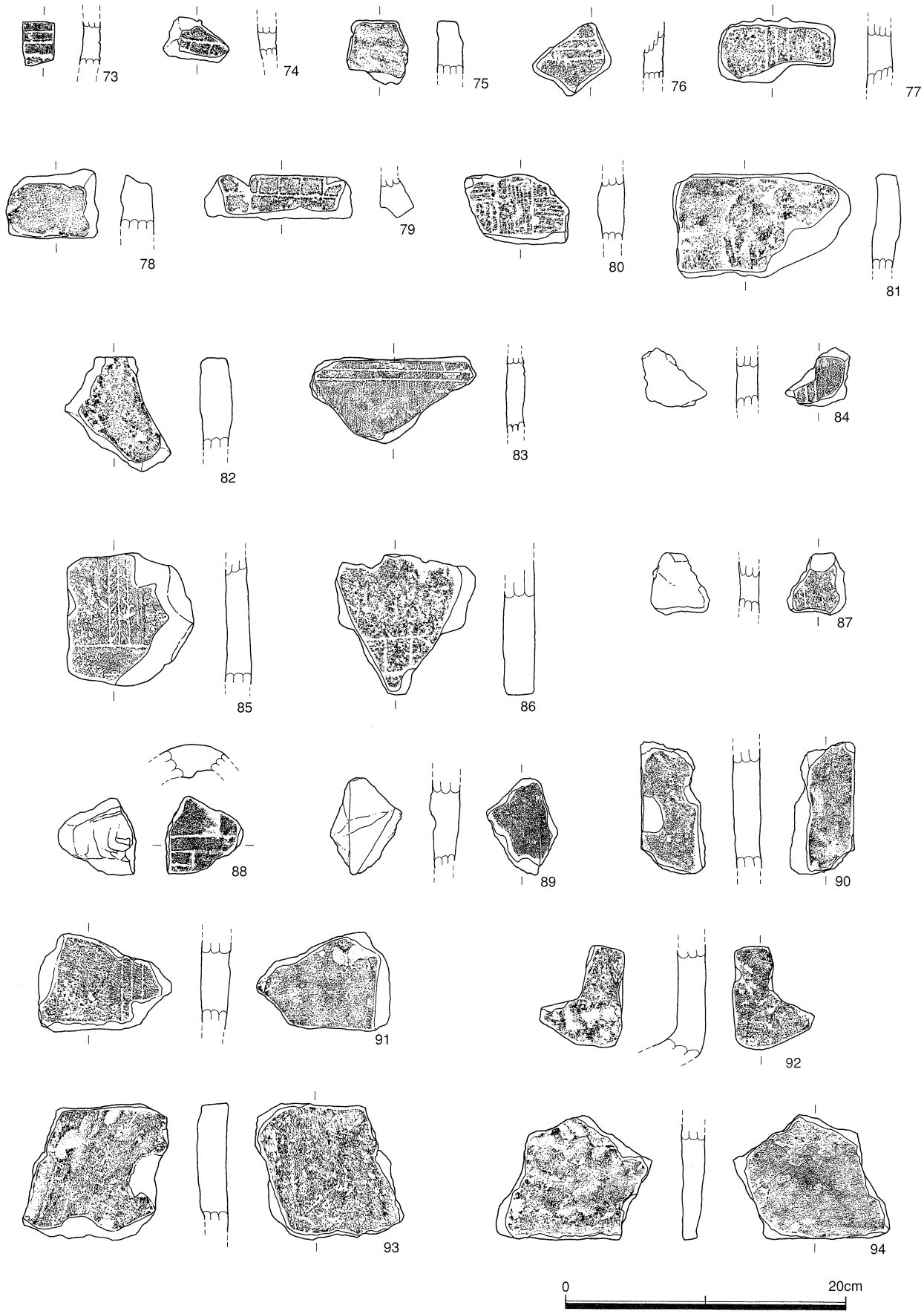

第14図　Kトレンチ平・断・立面図



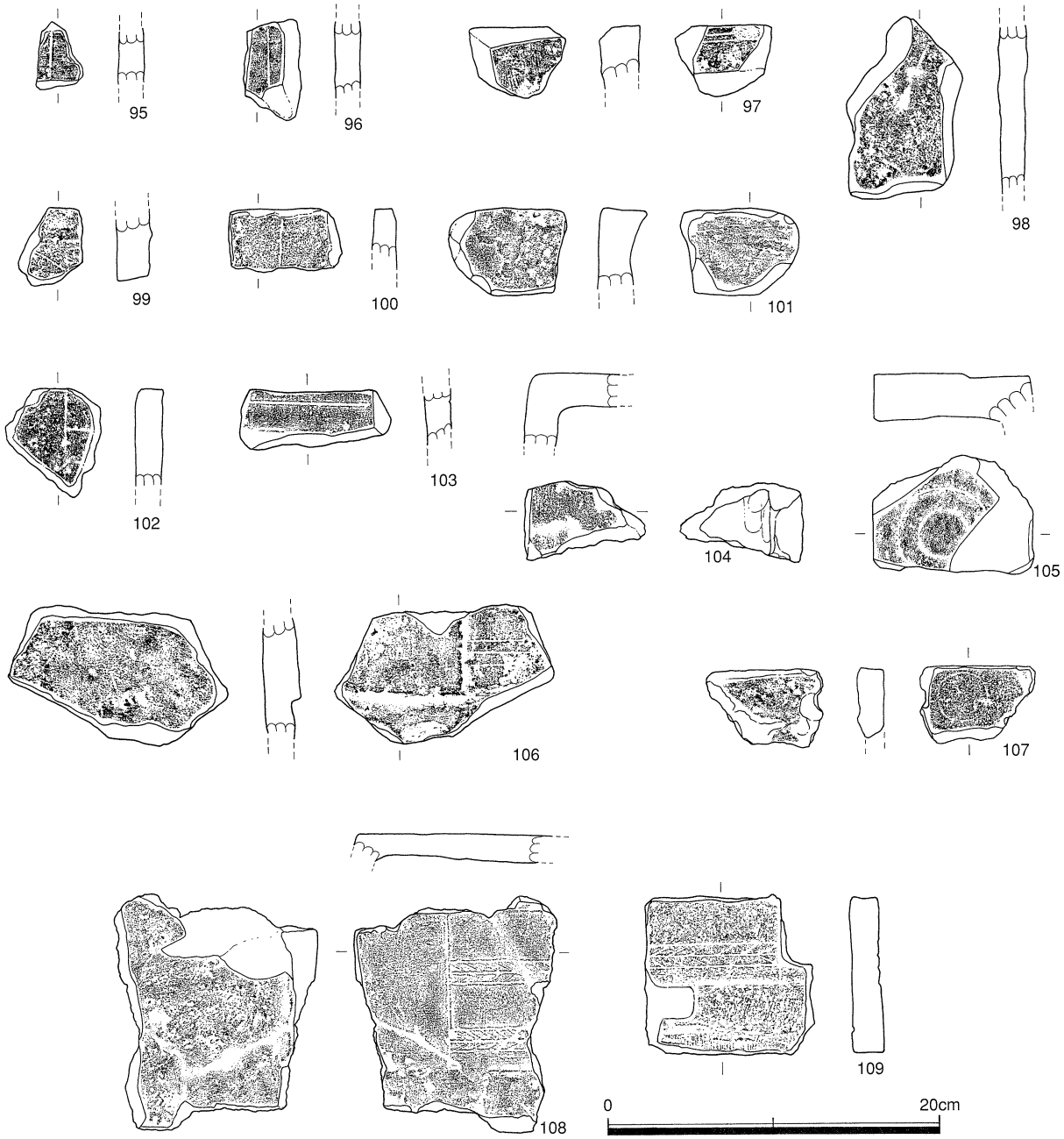

第15図　Kトレンチ出土埴輪1




第16図　Kトレンチ出土埴輪2




第17図　Kトレンチ出土埴輪3




第18図　Kトレンチ出土埴輪4

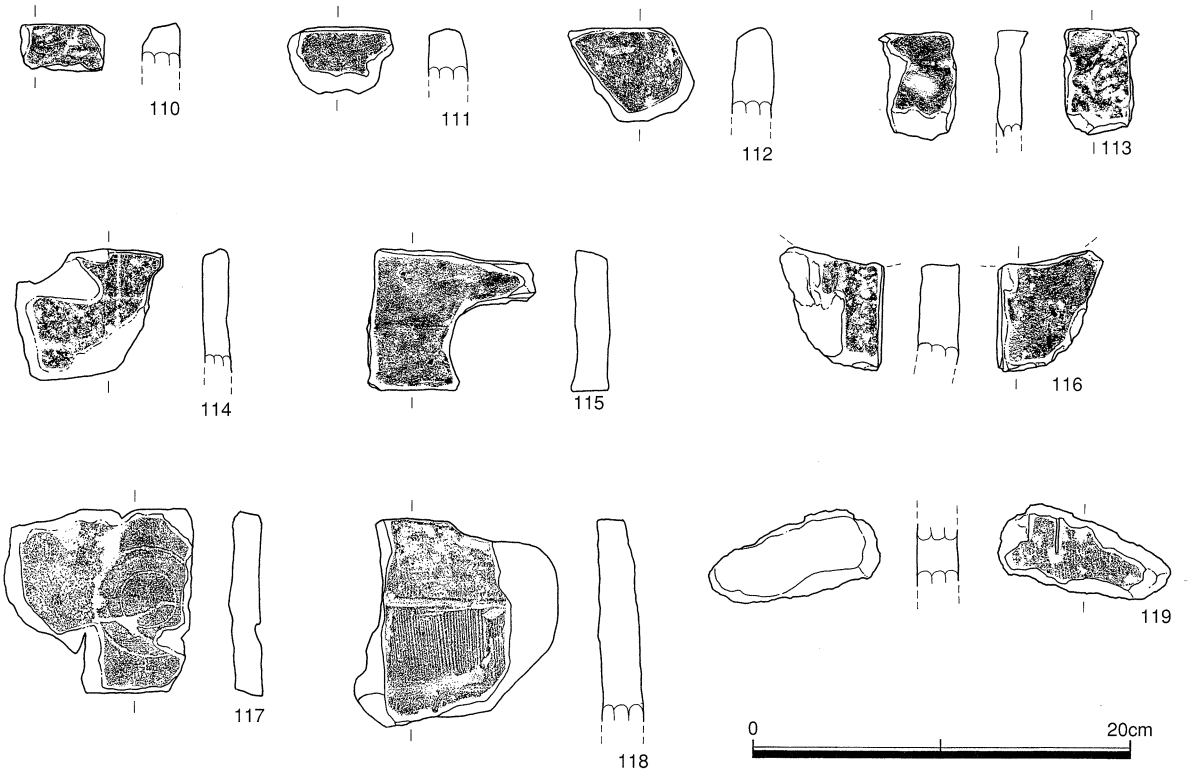
鼠返形突帯には、57・60・61・62・63・64・67・78・89・90・100・127がある。いずれも外面側の調整は丁寧で、非常に平滑である。やや厚手で張り出しの長い57・60・64・67・78・89・90・127と、やや小振りの61・62・63・100の二種があり、2個体以上に付属することが想定される。

75・82・93・101・128・129・133は家形の基部とみられるものである。調整は内外面ともに粗い。

靫形は68・81・105～109・117・118・123が該当し、97・98・104もその可能性がある。81・108・109は箱形の矢筒部である。いずれも厚手の板状のもので、108・109には横帯が線刻による綾杉文で表現されている。105・106・107・117・123は飾板部分で、いずれも二重円がやや細めの工具で線刻される。

138は蓋形の円筒形の軸部とみられるものである。

73・87・95・102・110～116・119などは小片で器種を決め難い。家形・蓋形・盾形・靫形の可能性が




第19図　Kトレンチ出土埴輪5

ある。145には外面からの穿孔がある。

Lトレンチ（第25図）

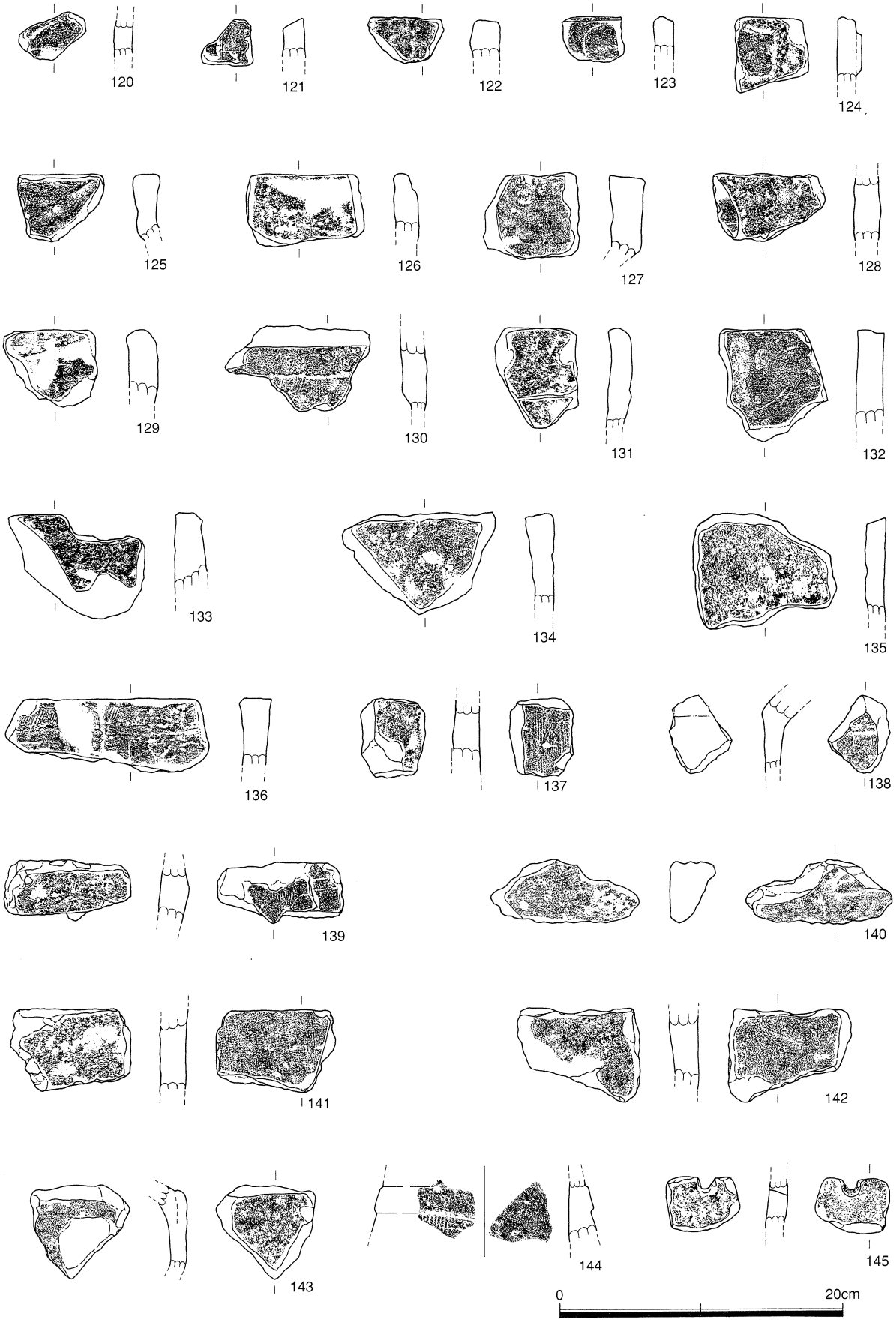
東側括れ部に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。括れ部の張り出しはない。

第1段外周裾、第1段テラス、第2段外周裾を確認した。第1段テラス上においては円筒埴輪列の基底部を検出した。基底部は中心点間の距離がいずれも約90cmを測り、一定の基準にもとづいて埋設されたものとみられる。また墳丘裾および第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。出土状況から葺石は墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用する。基底石には人頭大程度のやや大型材を使用し、列石状に裾部に並べ、その上に葺石を墳丘斜面に張り付けるように積み上げて外周を巡らせるものと考えられる。

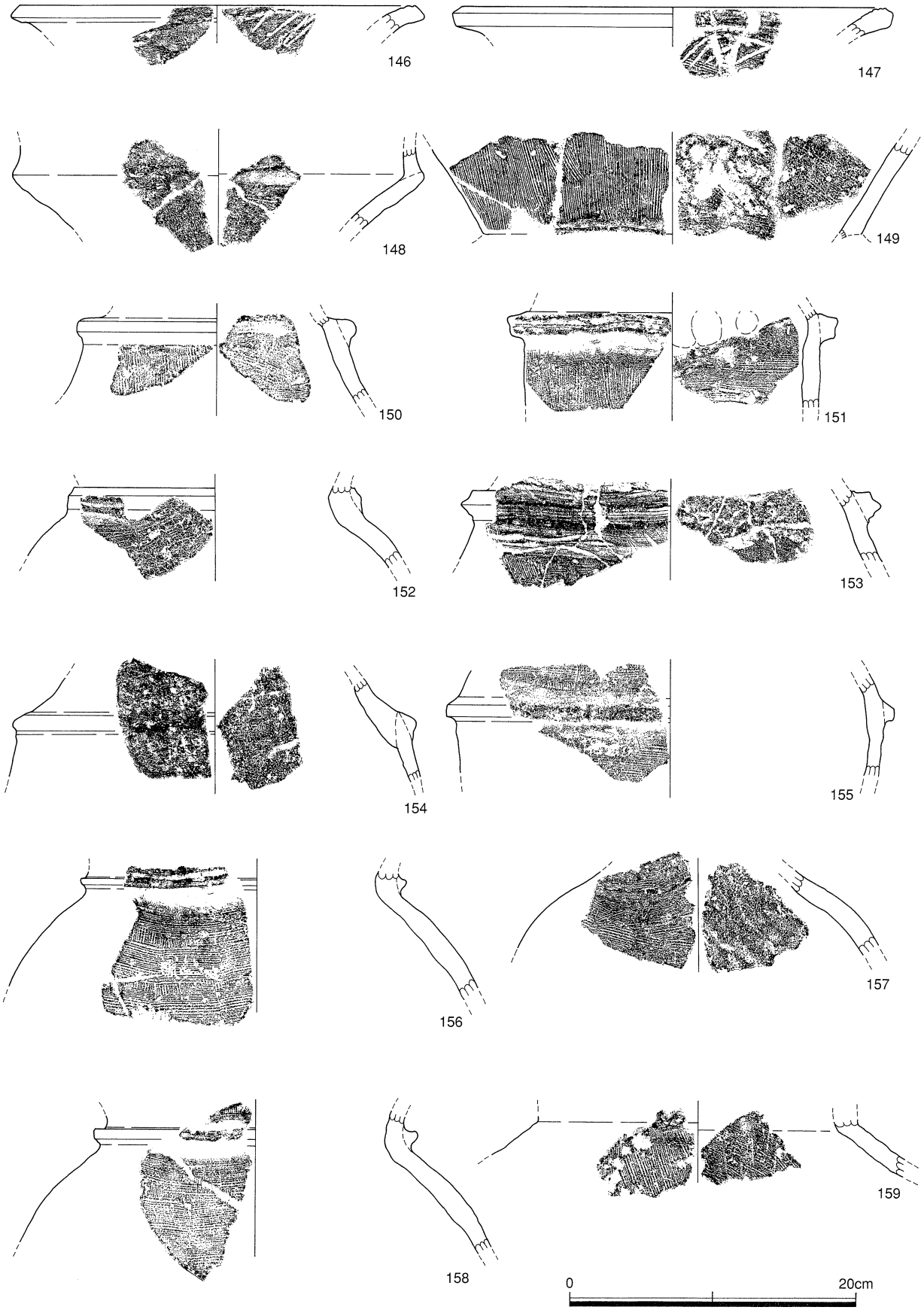
出土遺物（第26～35図）

埴輪はほとんどが流土中からの出土であり、原位置の判明するものは少ない。またいずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。

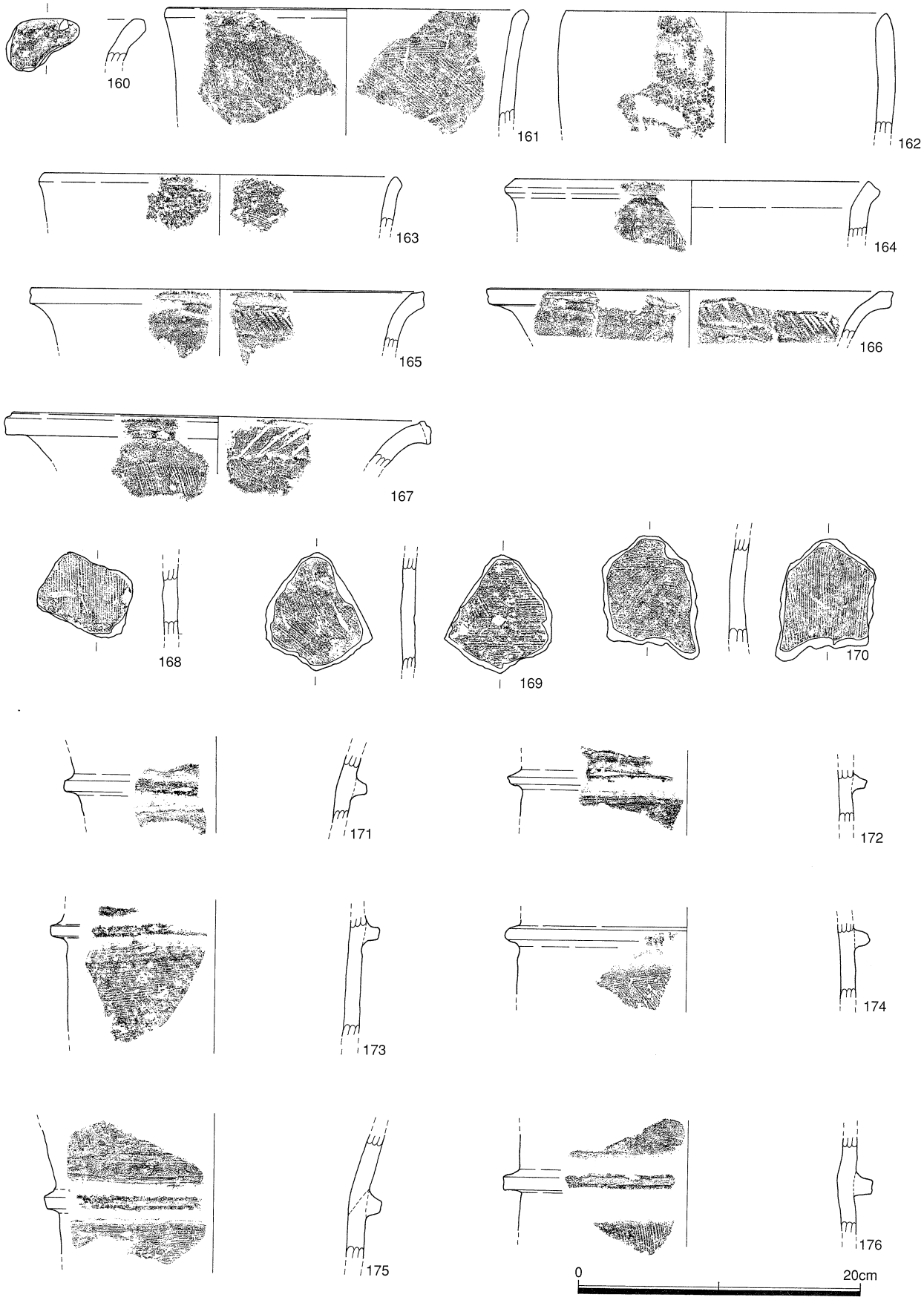
口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。透かし孔は円孔に復元されるもの



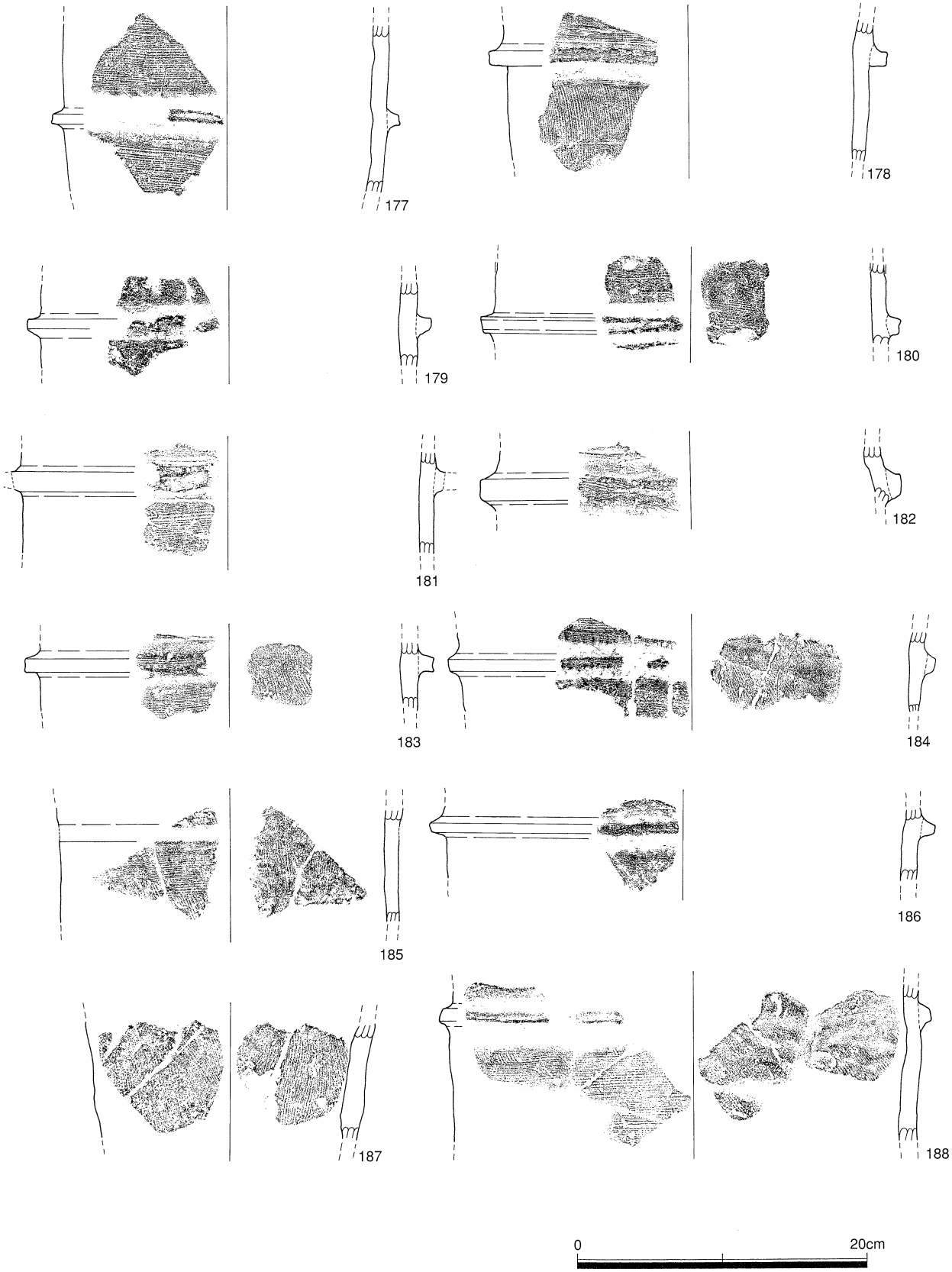

第20図　Kトレンチ出土埴輪6



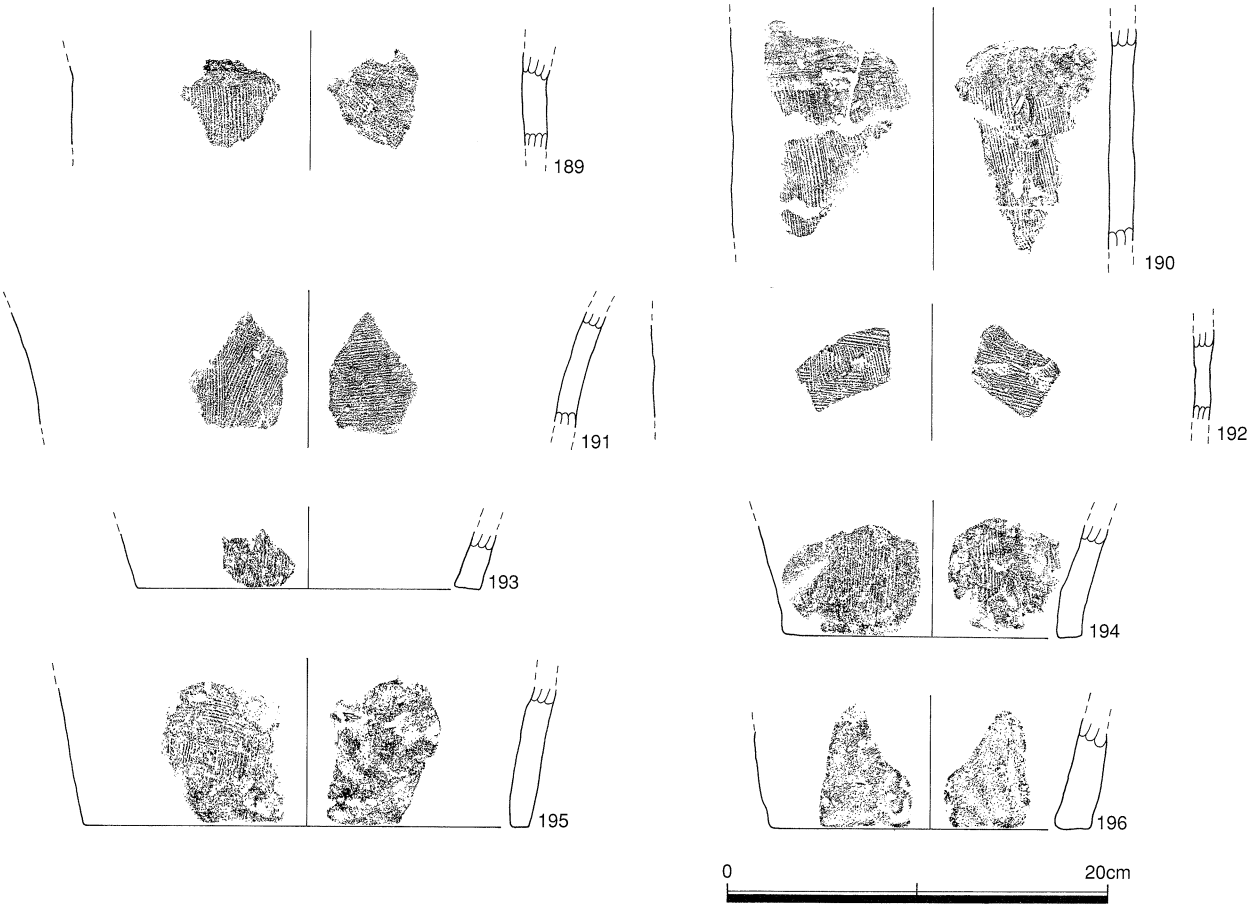

第21図　Kトレンチ出土埴輪７




第22図　Ｋトレンチ出土埴輪８




第23図　Kトレンチ出土埴輪9

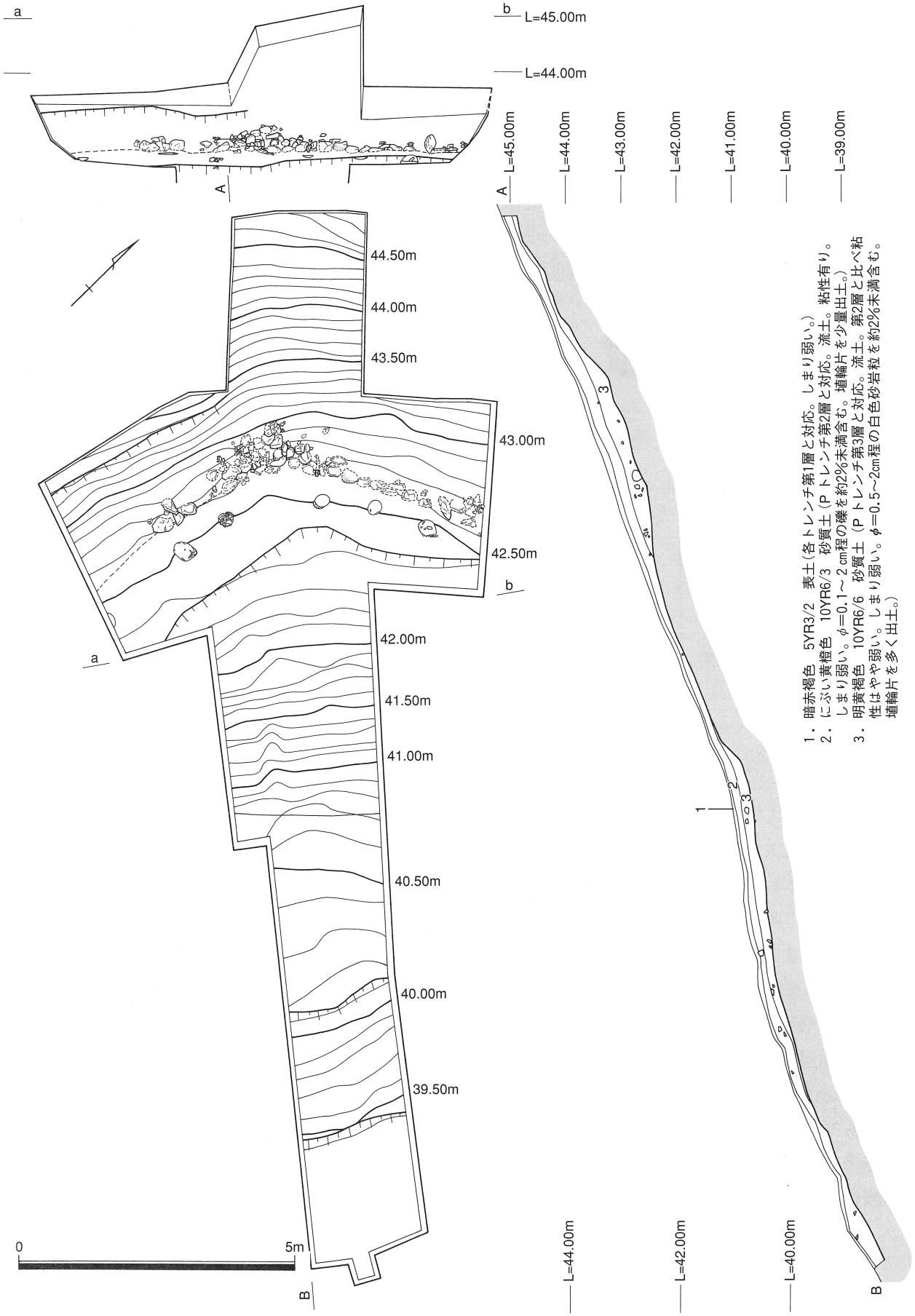



第24図　Kトレンチ出土埴輪10

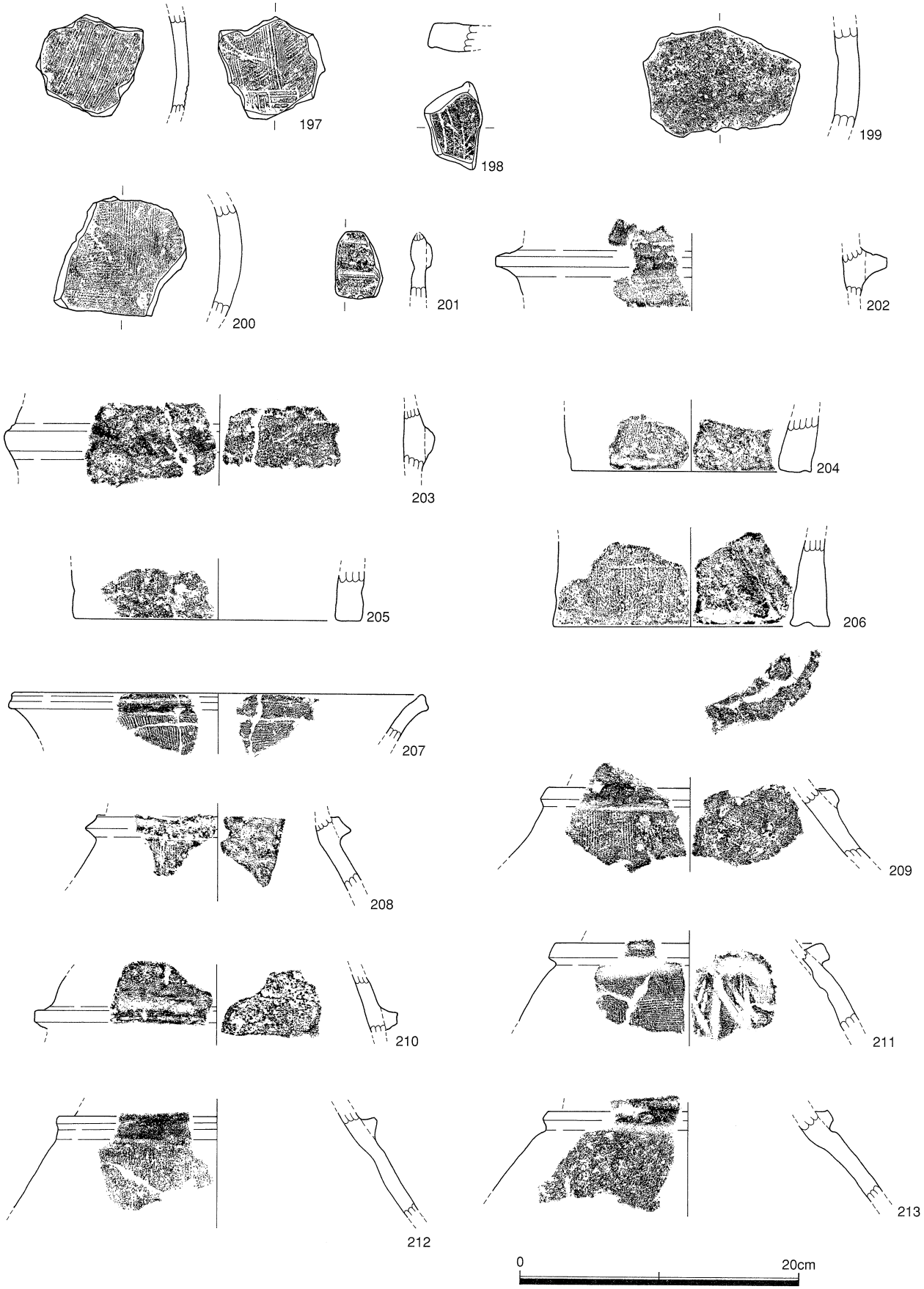
数点を確認している。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

このほか墳丘流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土した。このうち形象埴輪片の出土は後円部墳丘斜面と後円部墳頂主体部の盗掘坑埋土中に限定されており、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

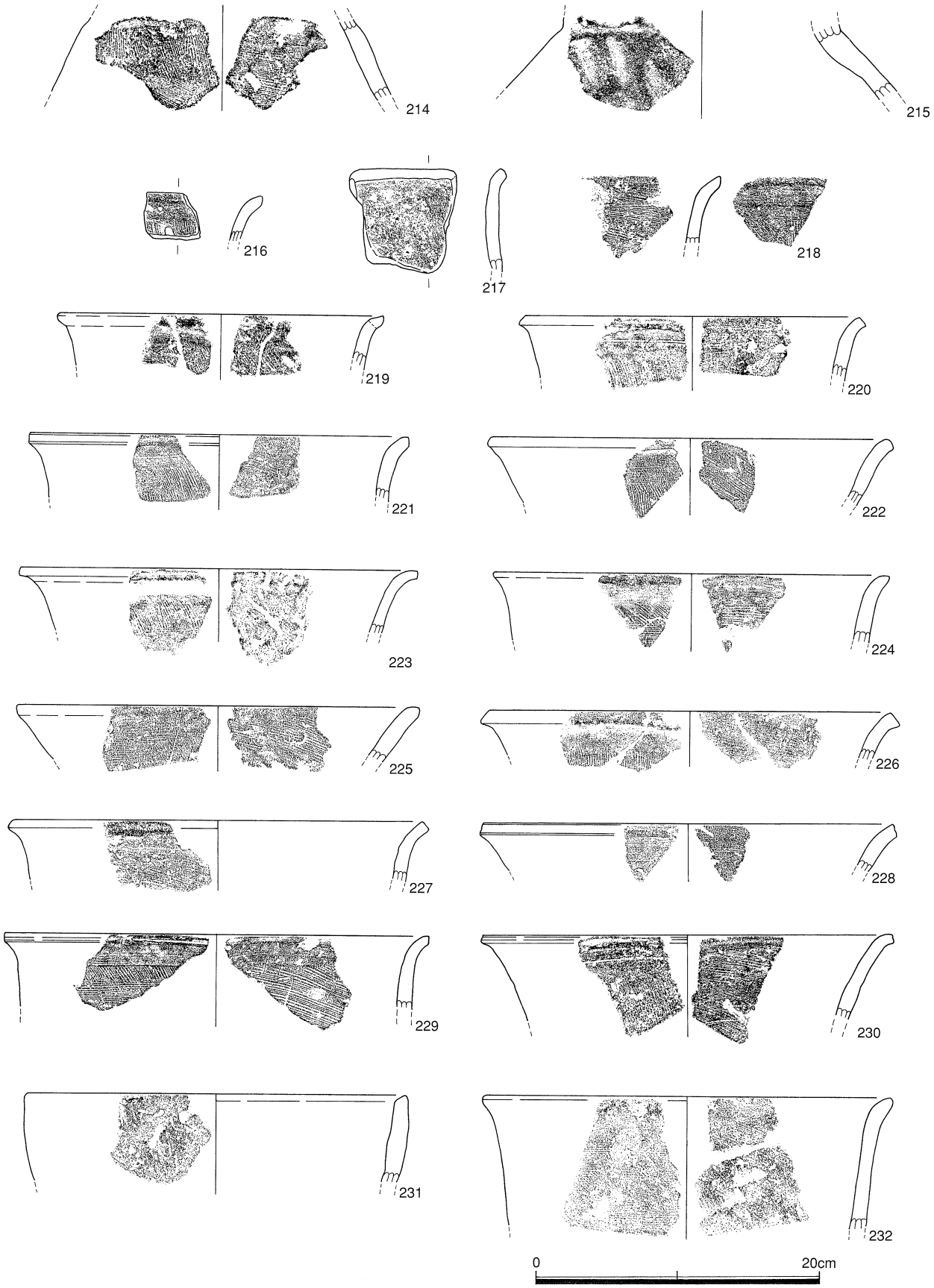
197は線刻による絵画のあるもので、部位は、破片形状・器面調整からみて円筒埴輪の外面口縁部直下にあたるとみられる。区画内を網代状の縦横交互の平行線で充填したモチーフと、舟の舳先あるいは人物の手のように見えるモチーフから構成されるが、詳細は不明である。198は蓋形の立飾の一部あるいは靫形の飾板の鰭部分のいずれかと考えられる。



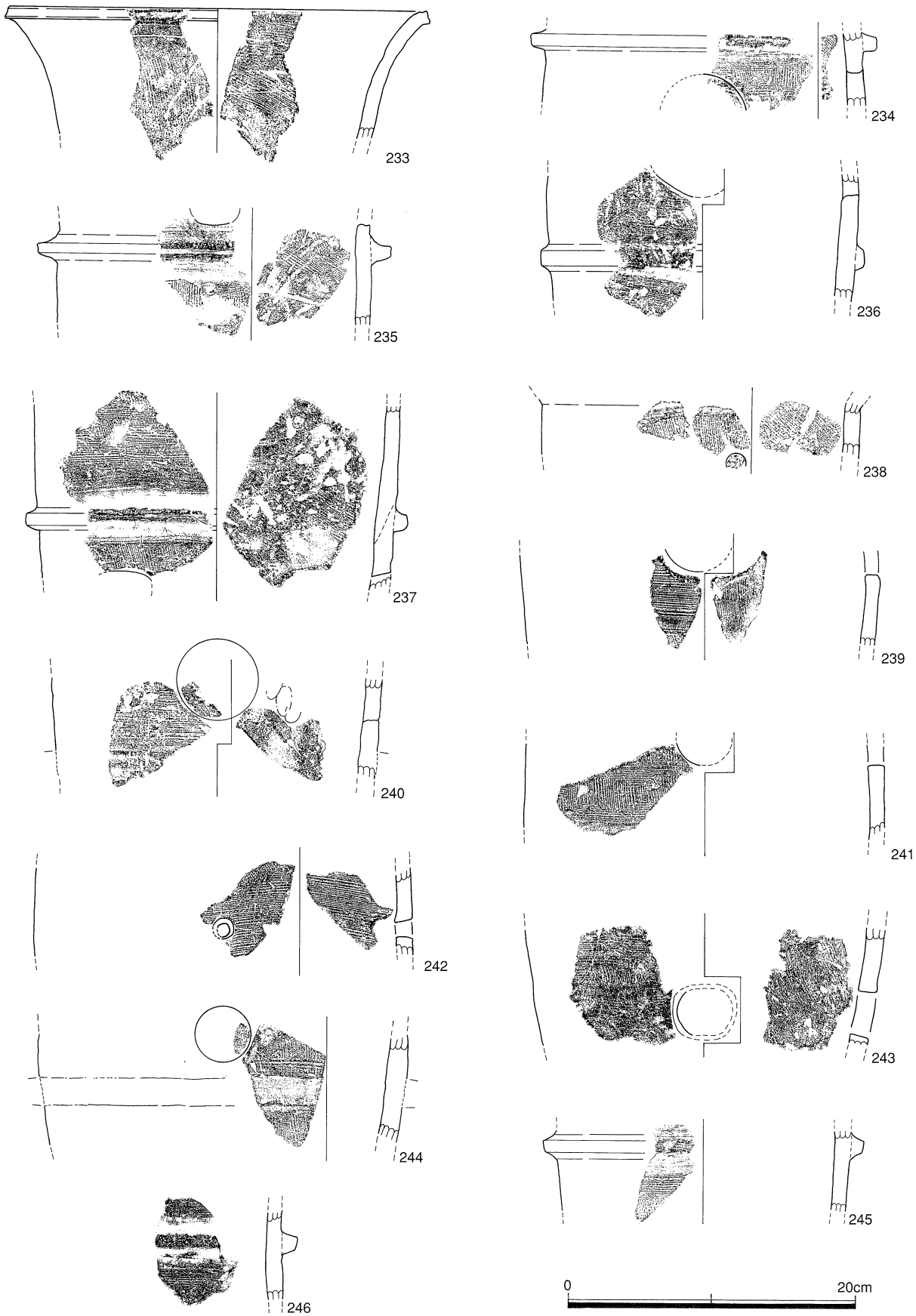

第25図　Lトレンチ平・断・立面図（括れ部）



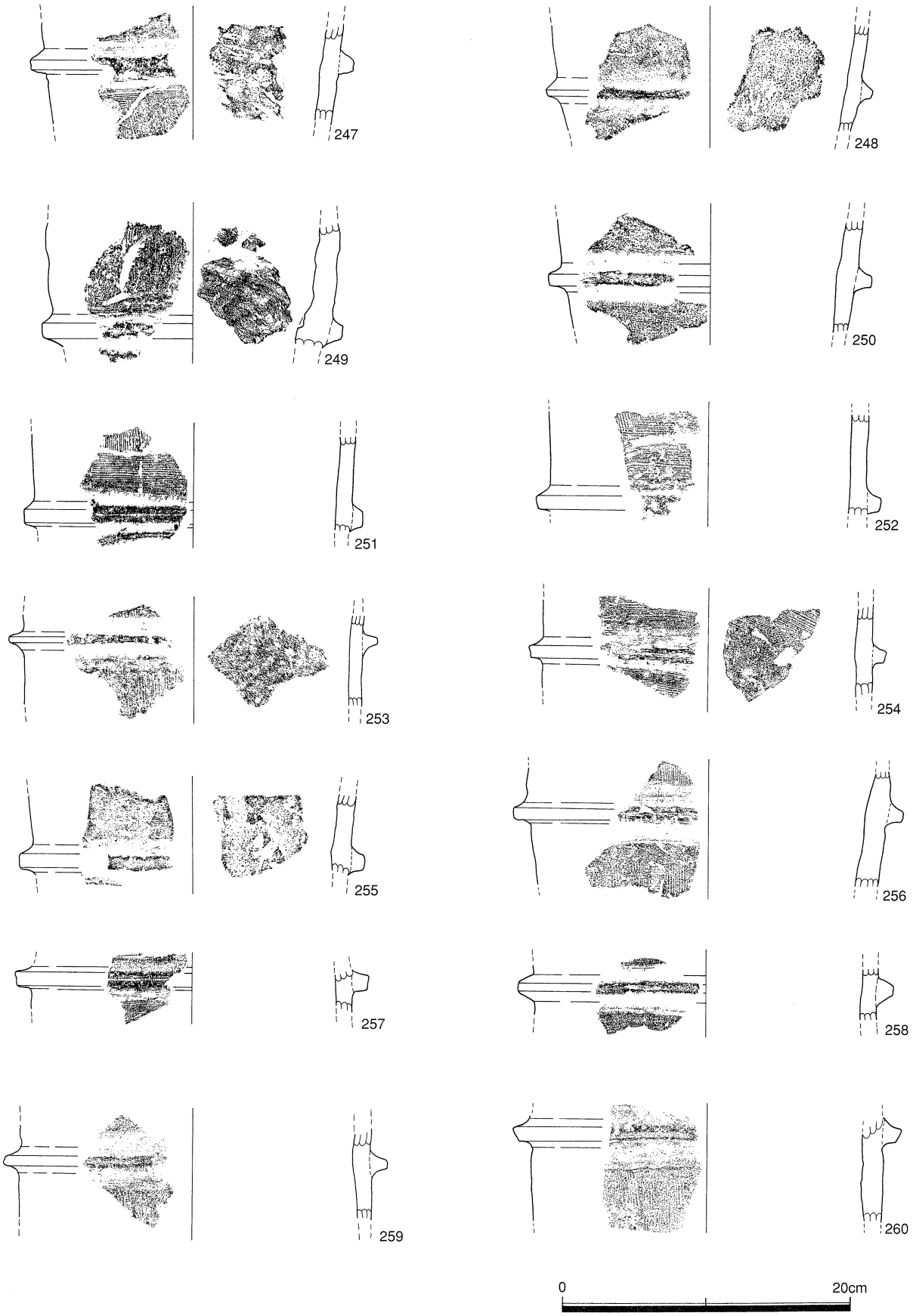

第26図　Ｌトレンチ出土埴輪１



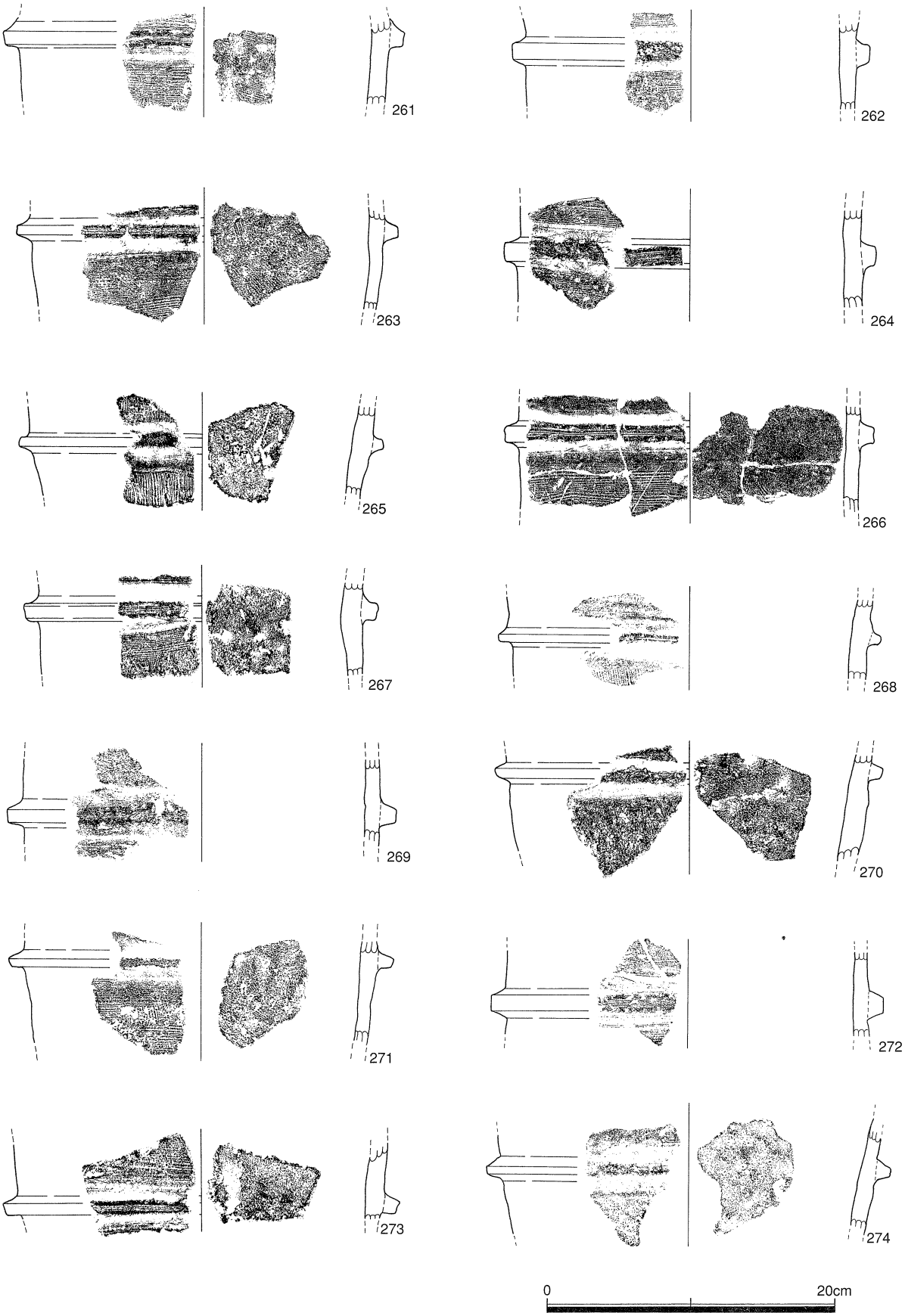

第27図　Ｌトレンチ出土埴輪２



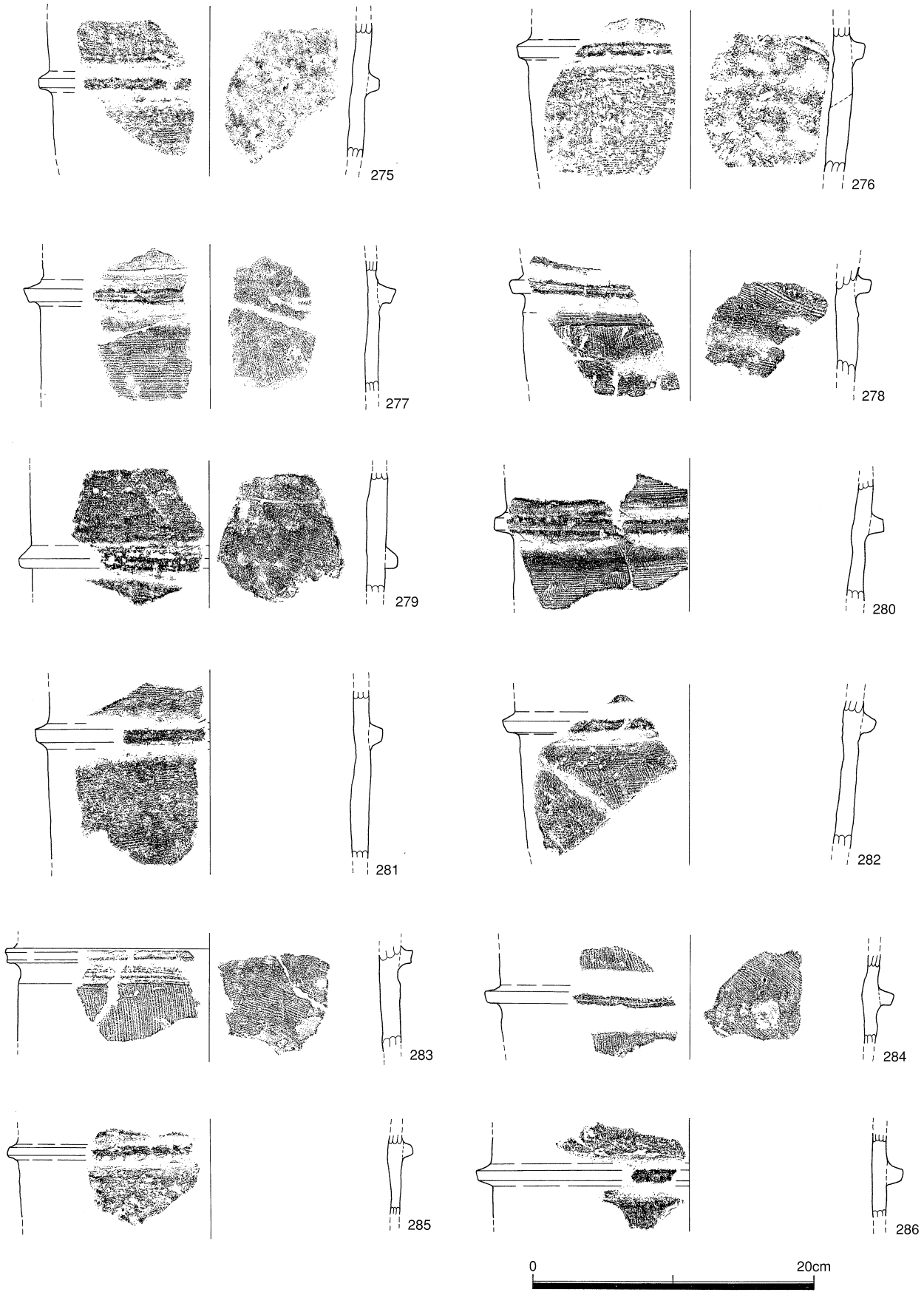

第28図　Ｌトレンチ出土埴輪３



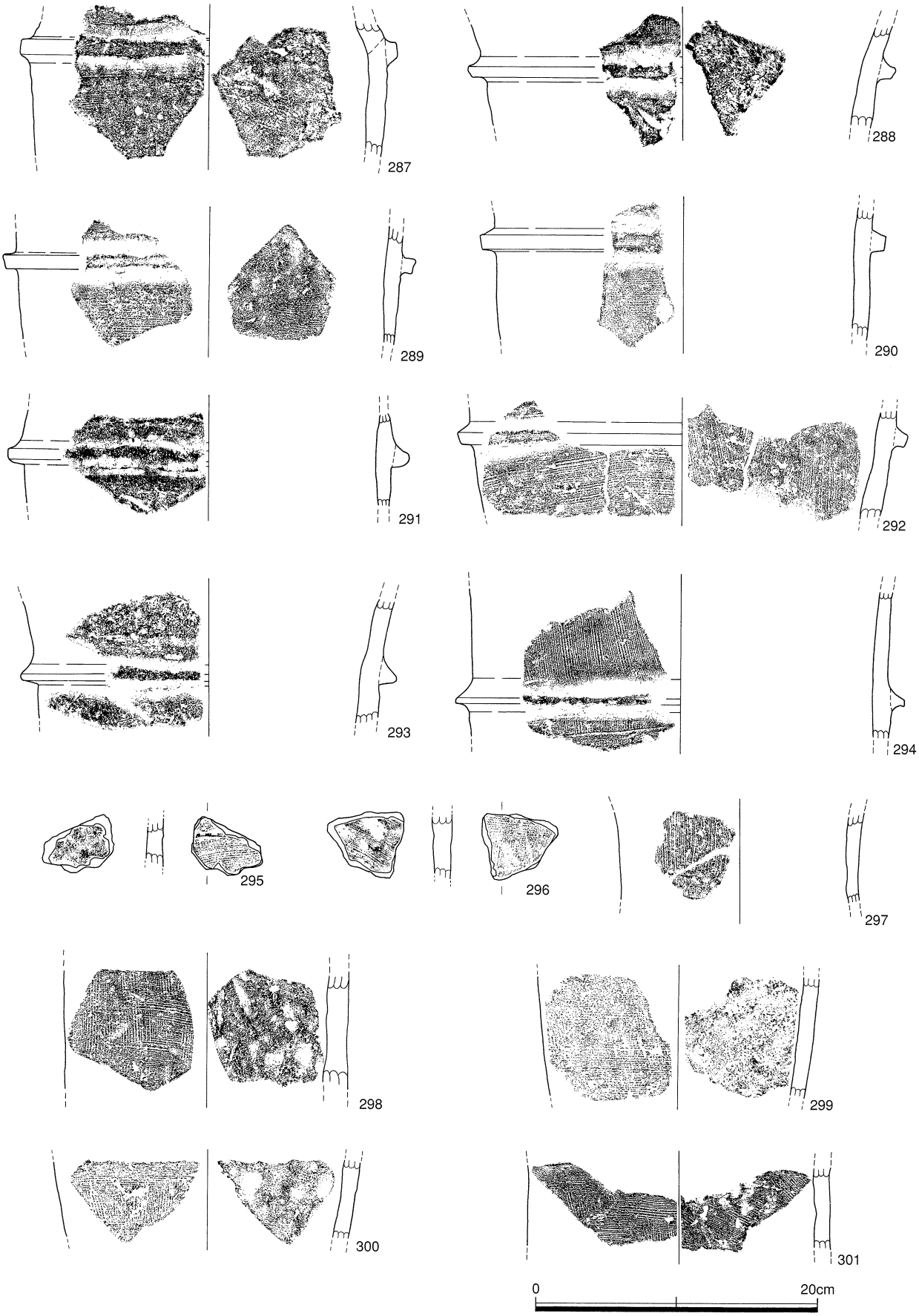

第29図　Ｌトレンチ出土埴輪４



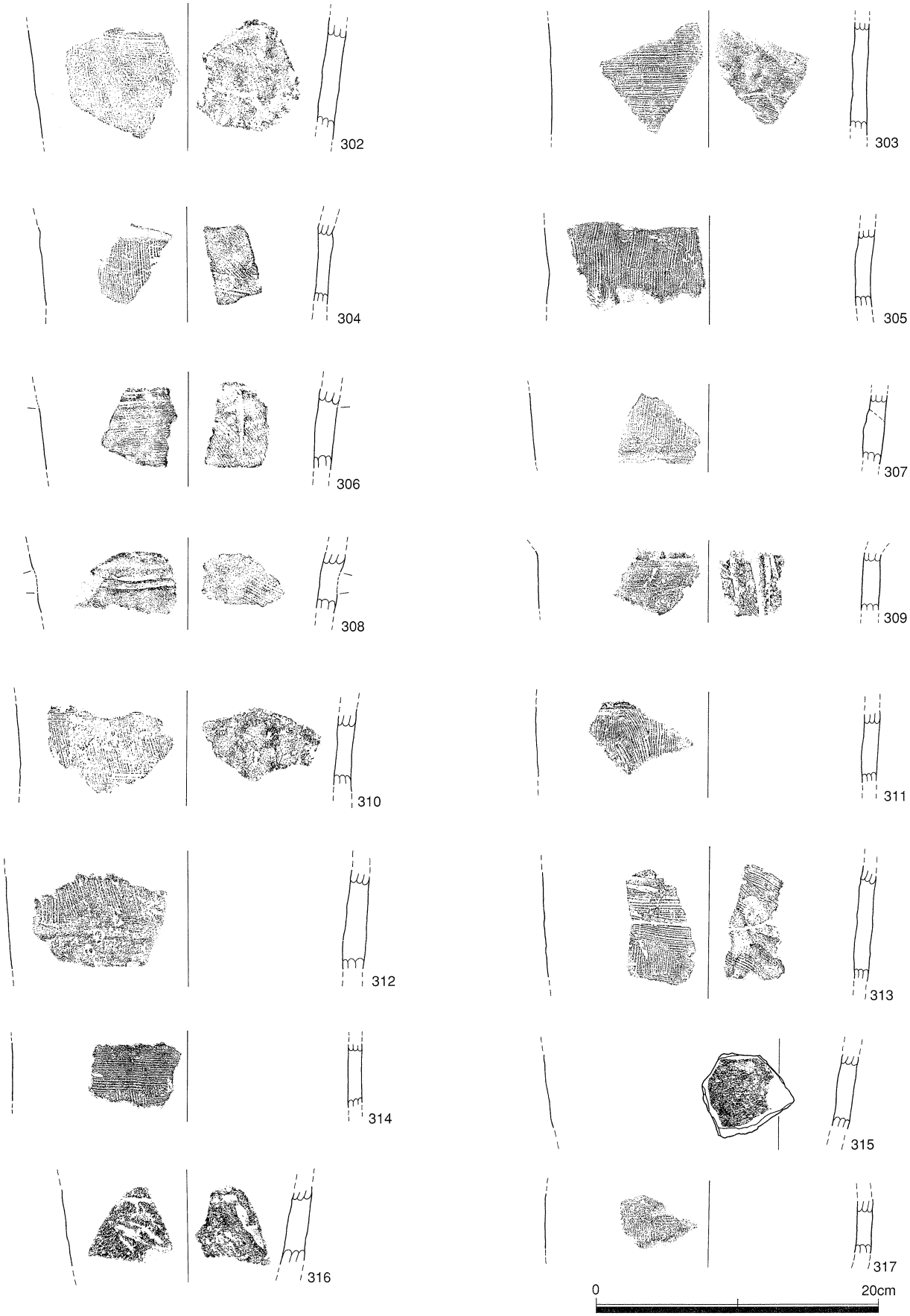

第30図　Ｌトレンチ出土埴輪５



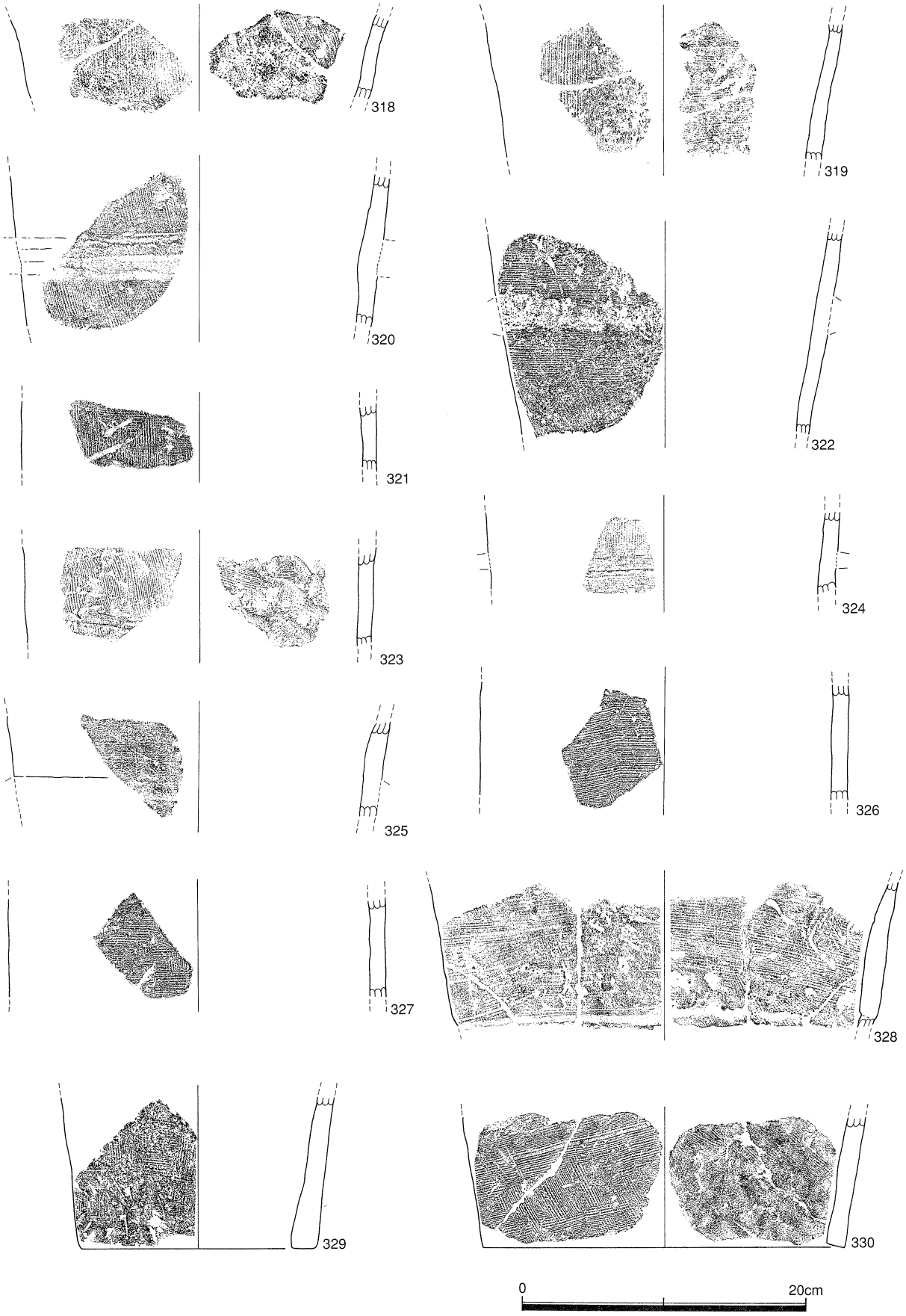

第31図　Ｌトレンチ出土埴輪６



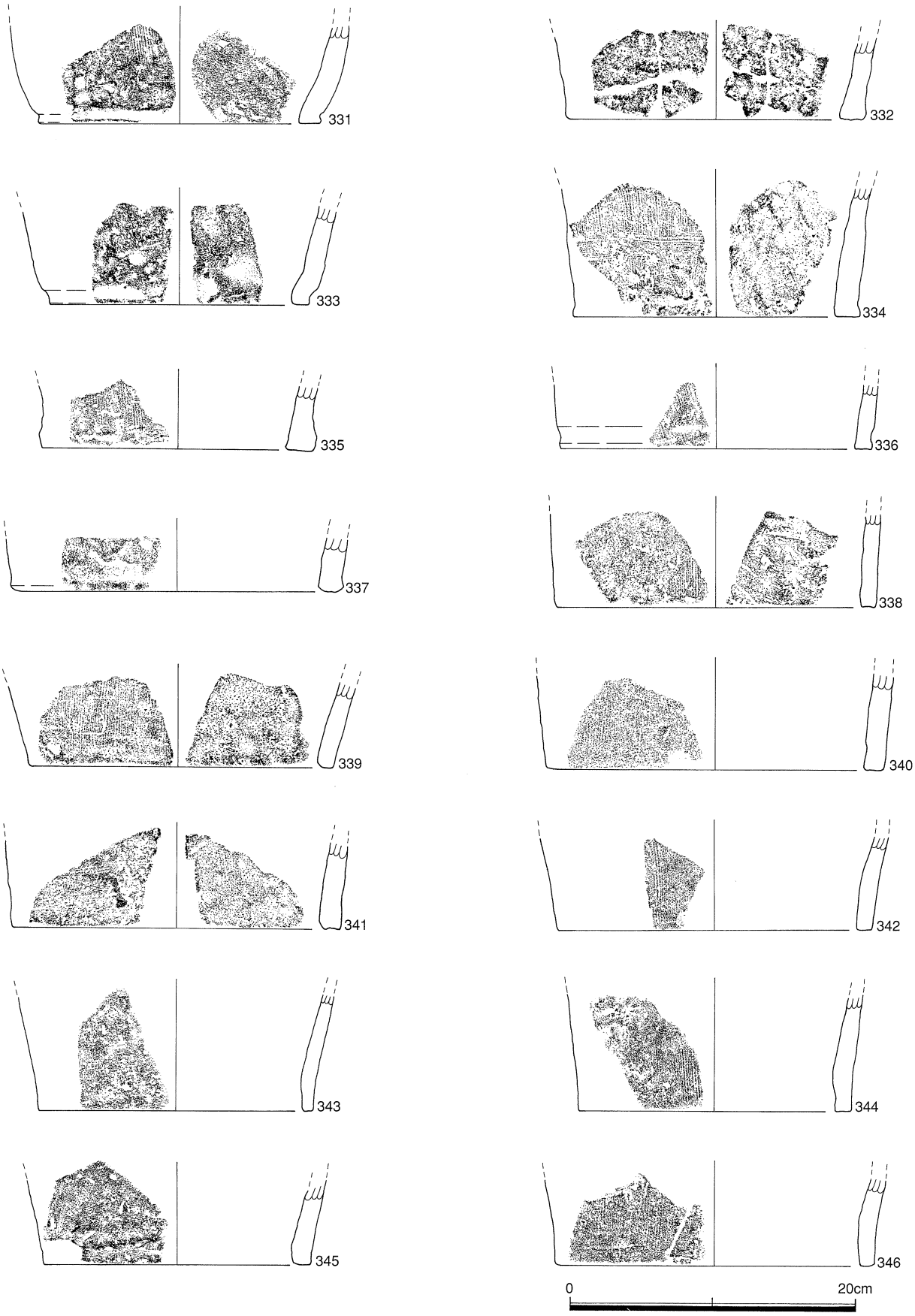

第32図　Ｌトレンチ出土埴輪７



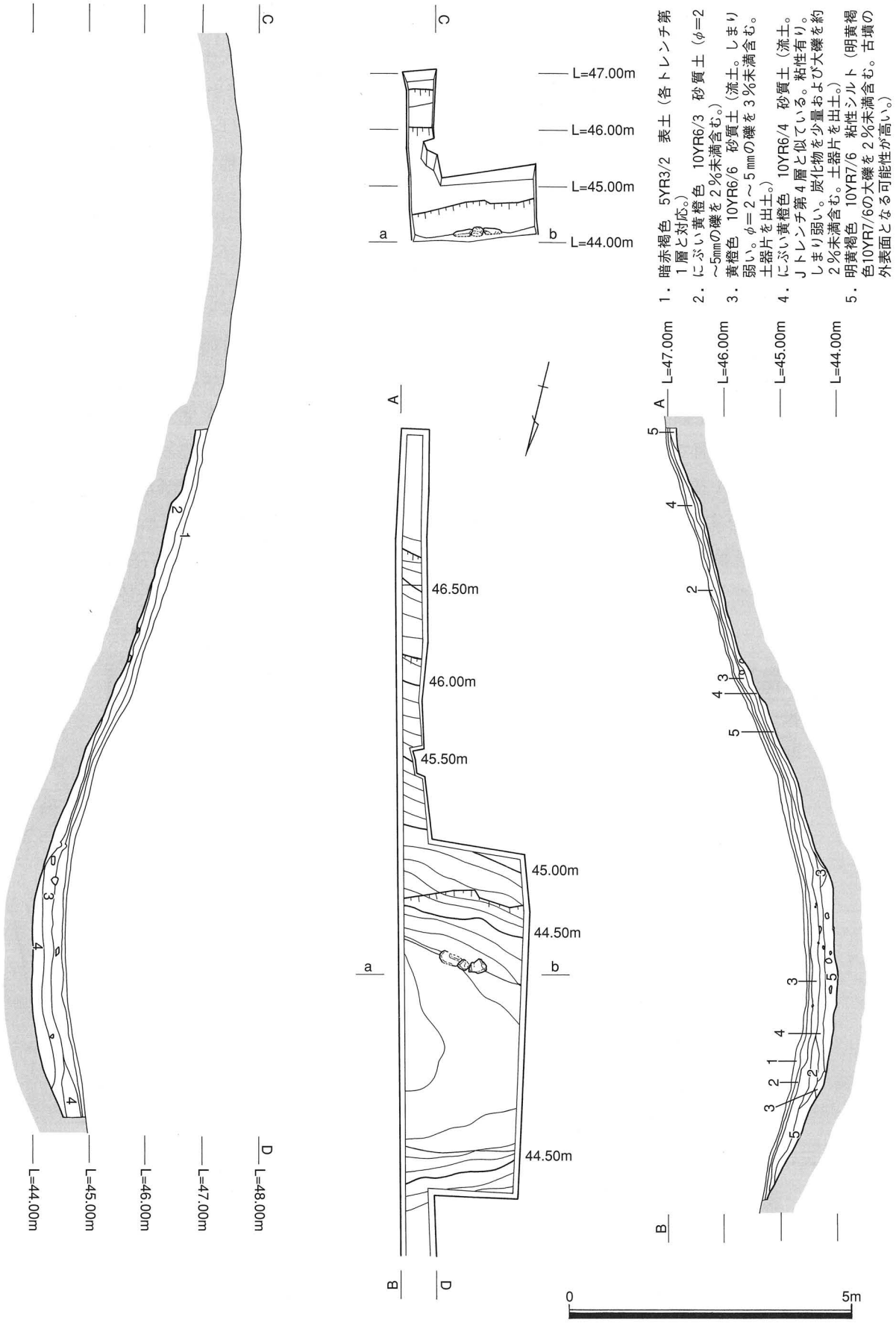

第33図　Ｌトレンチ出土埴輪８




第34図　Ｌトレンチ出土埴輪９




第35図　Ｌトレンチ出土埴輪10




第36図　Mトレンチ平・断・立面図（掘割溝）

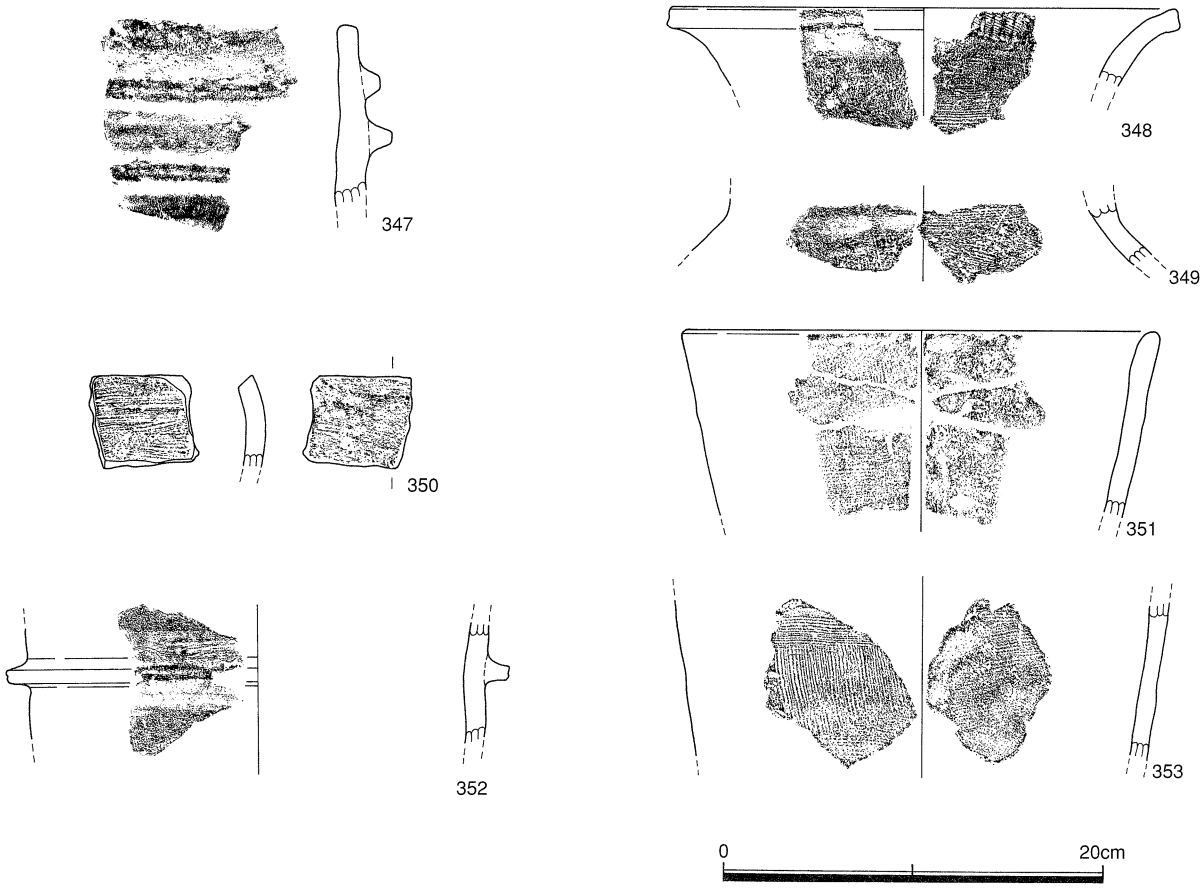
Mトレンチ（第36図）

後円部北側に設定したトレンチである。掘割溝を検出した。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）となるが、北側は掘割溝内堆積土で５層に分層される。埴輪列は検出されなかった。第１段テラス裾を確認した。掘割溝北側上場（後円部墳丘裾）には、列石状に区画するものと思われる人頭大程度の砂岩の並びを一部検出した。掘割溝の規模は、中央部で幅約５ｍ、墳丘裾からの深さは約１ｍである。

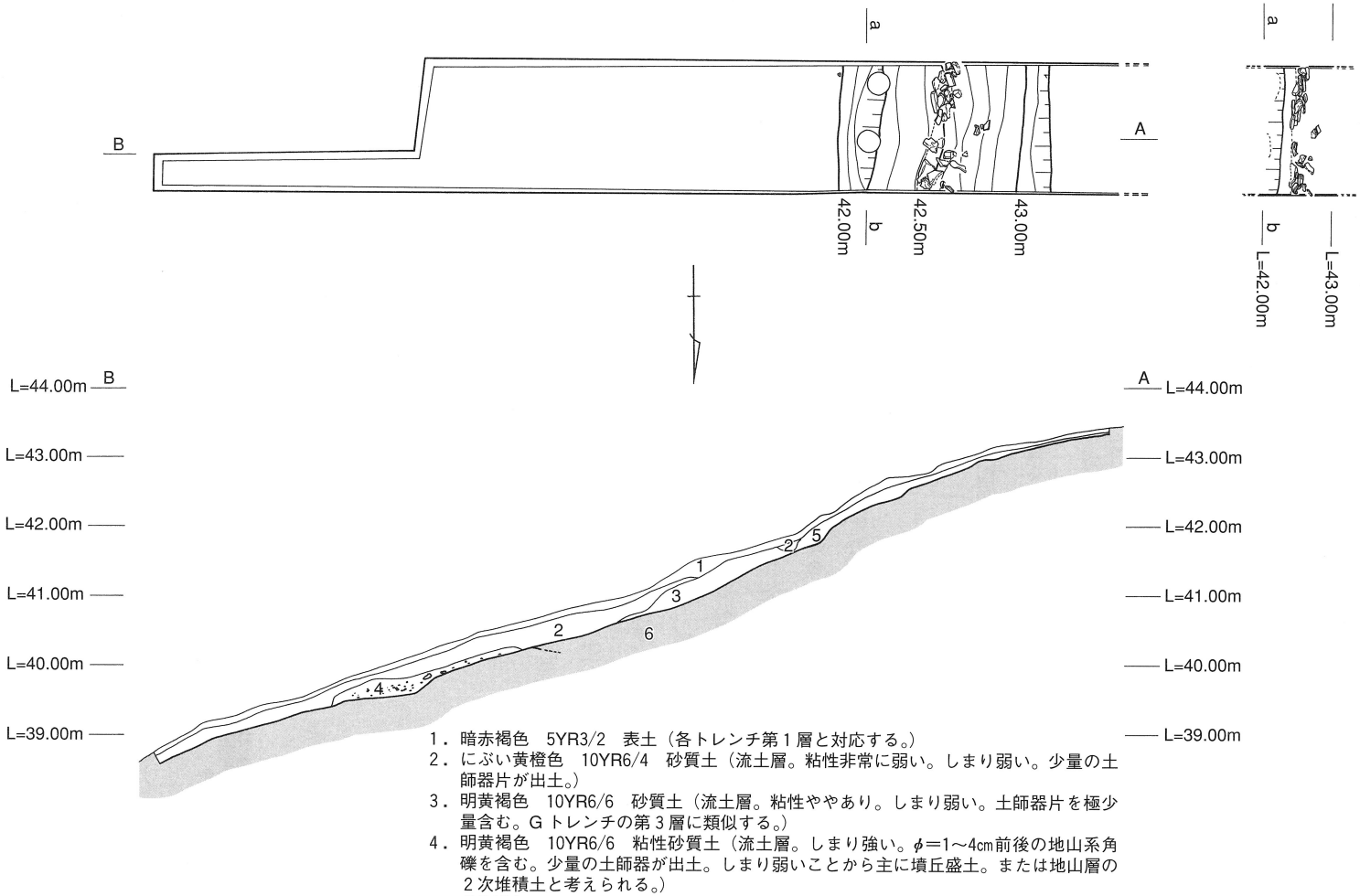
出土遺物（第37図）

埴輪はほとんどが流土中からの出土であり、原位置の判明するものは少ない。またいずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30㎝前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの２者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

このほか墳丘流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が




第37図　Mトレンチ出土埴輪




1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（各トレンチ第１層と対応する。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（流土層。粘性非常に弱い。しまり弱い。少量の土師器片が出土。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（流土層。粘性ややあり。しまり弱い。土師器片を極少量含む。Ｇトレンチの第３層に類似する。）
4．明黄褐色　10YR6/6　粘性砂質土（流土層。しまり強い。φ＝1～4cm前後の地山系角礫を含む。少量の土師器が出土。しまり弱いことから主に墳丘盛土。または地山層の２次堆積土と考えられる。）
5．明黄褐色　10YR7/6　粘性シルト（人為的な盛土層。非常にしまり強い。φ＝0.1～1cm前後の礫およびφ＝0.1～1.5cm程度の白色系軟質砂岩粒および灰白色砂岩粒（やや硬質）を各５～10％程度含む。）
6．明黄褐色　10YR6/8　地山層（地山層。拳大前後の礫を多く含み南北方向を基準とする岩脈を形成する。）

第38図　Ｎトレンチ平・断・立面図

考えられる形象埴輪小片等が出土した。このうち形象埴輪の基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

347は囲形埴輪である。上方ほど器壁が薄くなる板状の壁体をもち、断面台形で突出の高い突帯が水平方向に２条巡る。全国的には30以上の古墳からの出土が知られる（消 2005）が、四国でも初めての出土事例である。

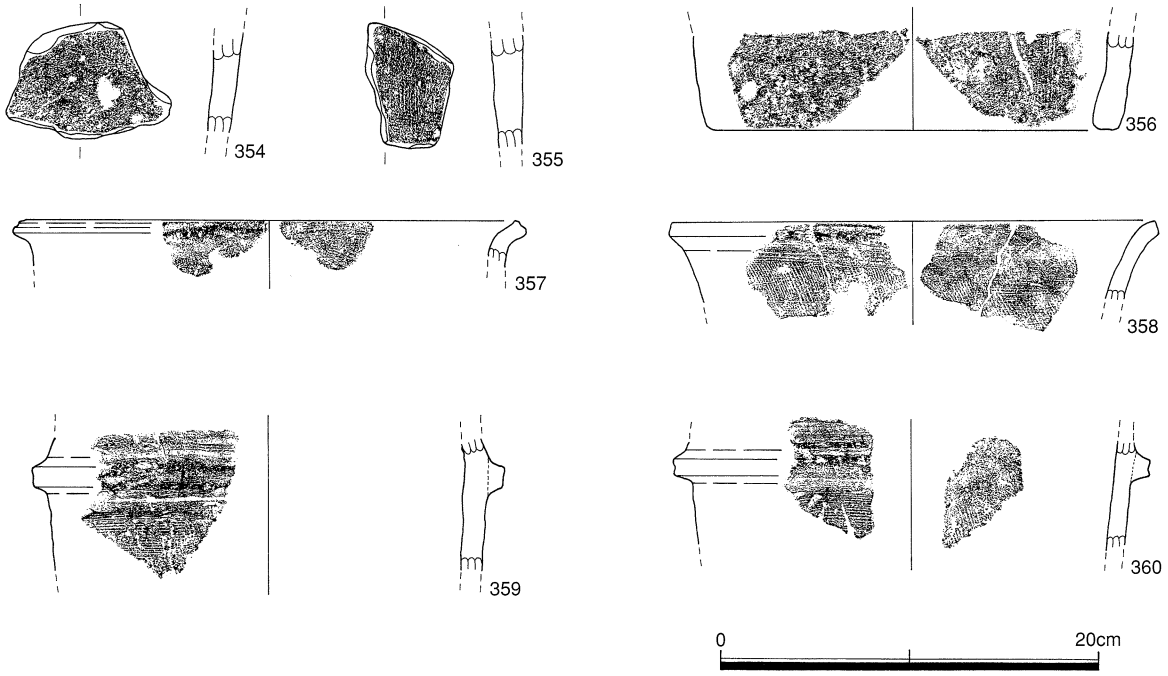
### Ｎトレンチ（第38図）

前方部東側中央、斜面に直交するように設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）となる。

第１段墳丘裾、第１段テラス、第２段墳丘裾を確認し、第１段テラスにいたる斜面では葺石を確認した。また第１段テラスにおいて円筒埴輪列を確認した。

### 出土遺物（第39図）

出土した埴輪は小片であるため、詳細は不明である。円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの２者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。354は内外面とも器表面の調整が粗い不明形象埴輪である。356は盾形や蓋形とみられる形象埴輪の基部である。




第39図　Ｎトレンチ出土埴輪

### Oトレンチ（第44図）

前方部西側中央、斜面に直交するように設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土(流土)・岩盤風化土(地山)となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

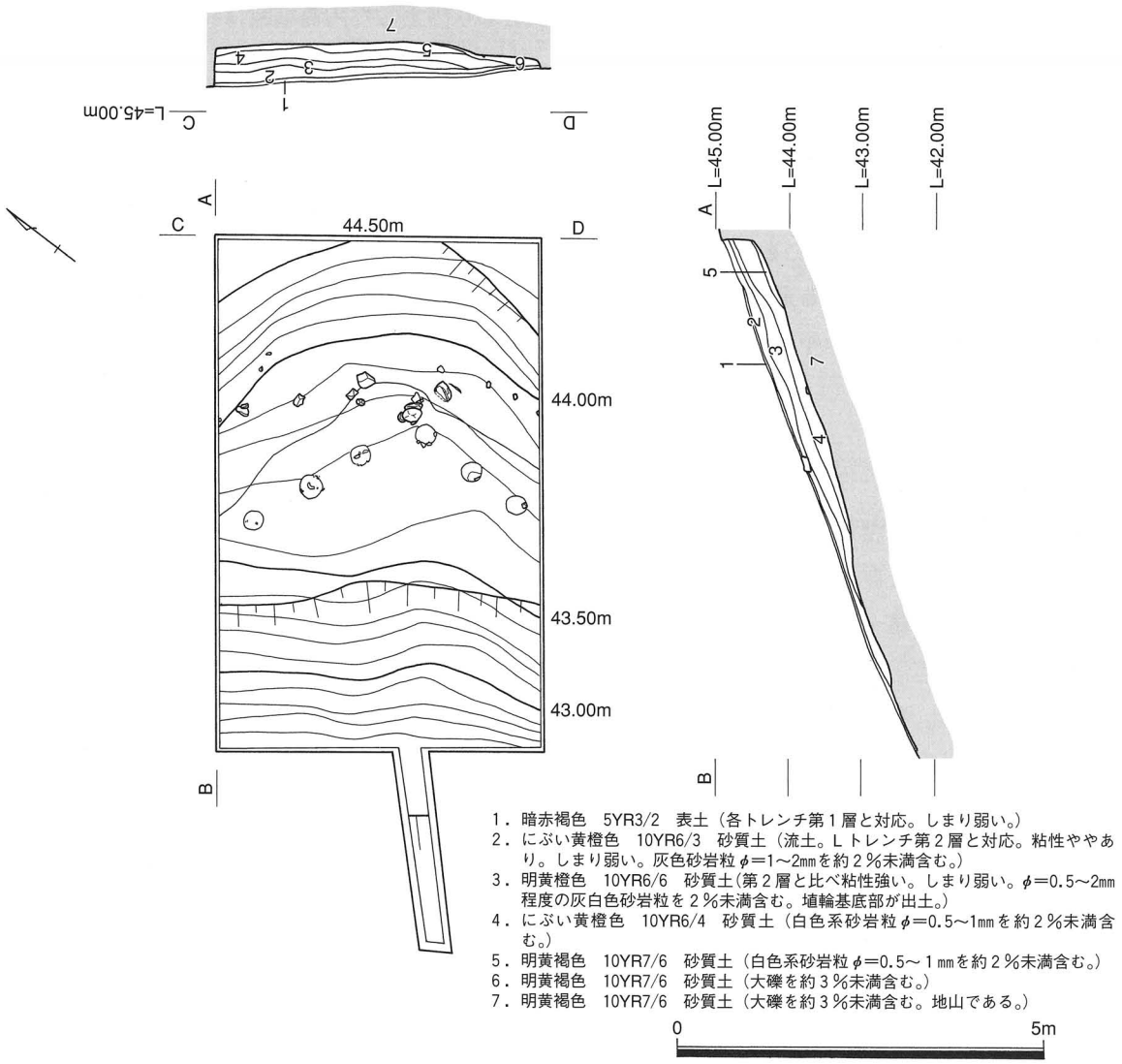
第１段墳丘裾、第１段テラス、第２段墳丘裾は確認できるものの、葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。

### 出土遺物

墳丘流土中より若干の円筒埴輪片等が出土しているが、小片のため実測可能なものはなかった。

### Pトレンチ（第40図）

西側括れ部に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。括れ部の張り出しはない。




1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（各トレンチ第１層と対応。しまり弱い。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（流土。Lトレンチ第２層と対応。粘性ややあり。しまり弱い。灰色砂岩粒φ=1～2㎜を約２％未満含む。）
3．明黄橙色　10YR6/6　砂質土(第２層と比べ粘性強い。しまり弱い。φ=0.5～2㎜程度の灰白色砂岩粒を２％未満含む。埴輪基底部が出土。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（白色系砂岩粒φ=0.5～1㎜を約２％未満含む。）
5．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（白色系砂岩粒φ=0.5～１㎜を約２％未満含む。）
6．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（大礫を約３％未満含む。）
7．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（大礫を約３％未満含む。地山である。）

第40図　Pトレンチ平・断面図（括れ部）

第１段外周裾、第１段テラス、第２段外周裾を確認した。第１段テラス上においては円筒埴輪列の基底部を検出した。基底部は中心点間の距離がいずれも約90cmを測り、一定の基準にもとづいて埋設されたものとみられる。

また墳丘裾、および第１段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。流出のため遺存状況は良くないが、出土状況から葺石は墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。

**出土遺物**（第41～43図）

埴輪はほとんどが流土中からの出土であり、原位置の判明するものは少ない。またいずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの２者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。透かし孔は円孔に復元されるもの数点を確認している。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

このほか墳丘流土内からは朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土した。このうち形象埴輪片の出土は後円部墳丘斜面と後円部墳頂主体部の盗掘坑埋土中に限定されており、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

361は靫形の可能性のある形象埴輪の板状の破片である。内外面の器表面の調整の違いが明瞭である。362・363・364は器壁がやや薄く緩やかな円弧を描く不明形象埴輪である。364には外面からの穿孔がある。

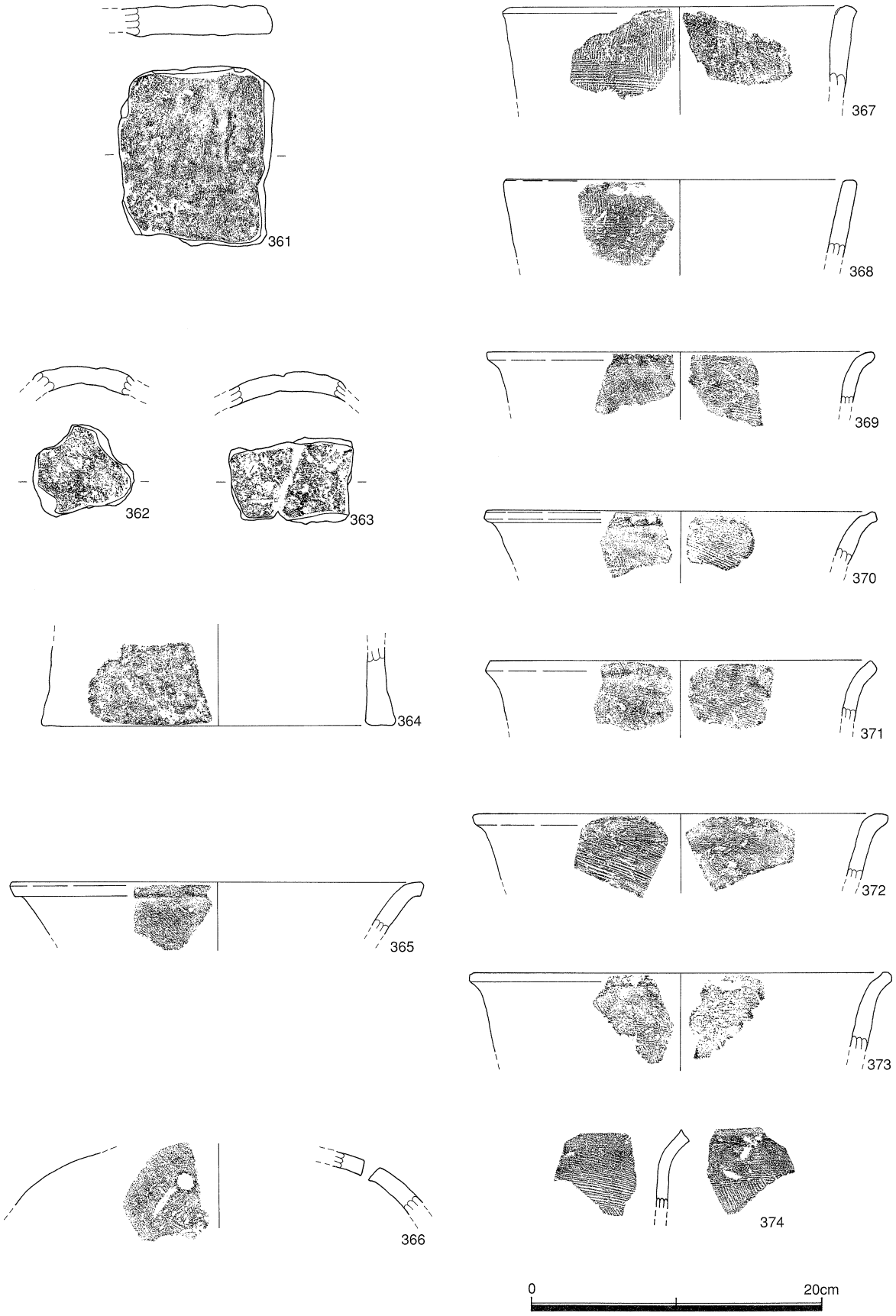
**Ｑトレンチ**（第46図）

後円部南東斜面に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

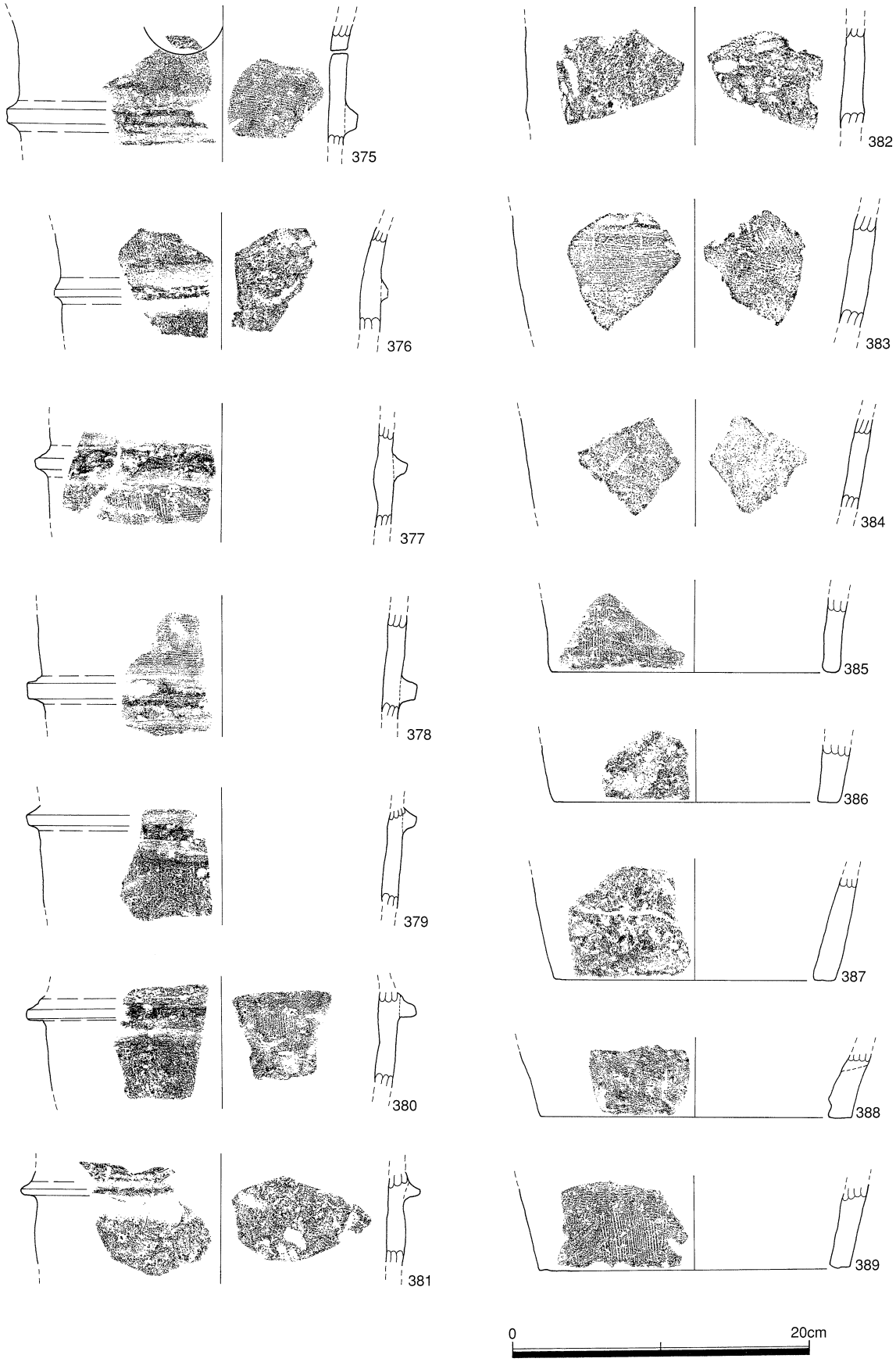
第１段外周裾、第１段テラス、第２段外周裾を確認した。墳丘裾および第１段テラスにいたる斜面裾部では一部で葺石を検出した。葺石はその出土状況から墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画する構造をとる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用し、基底石の上に葺石を積み上げ、各段墳丘斜面部裾部外周に葺石を貼り付けて巡らせる。埴輪列は検出されなかった。

**出土遺物**（第47～49図）

土師器甕が出土している。小片であるため、詳細は不明である。埴輪はほとんどが流土中からの出土であり、原位置の判明するものは少ない。またいずれも小片であるため、詳細は不明である。出土した円筒埴輪は、胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。透かし孔は円孔に復元されるもの数点を確認している。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ス



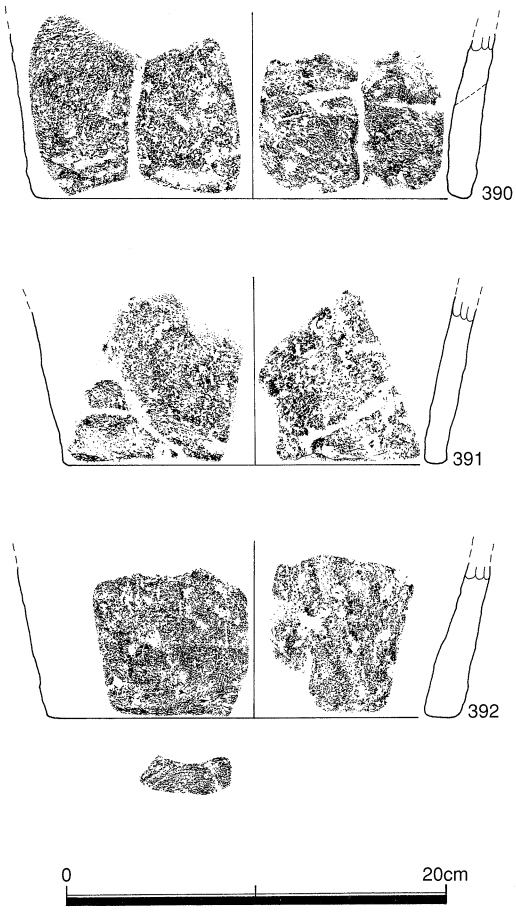

第41図　Pトレンチ出土埴輪1




第42図　Ｐトレンチ出土埴輪２

トロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。その他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土した。このうち形象埴輪片の出土は後円部墳丘斜面と後円部墳頂主体部の盗掘坑埋土中に限定されており、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

396は盾形埴輪の盾面右側辺である。３条の沈線を基調とする綾杉文によって盾面が区画される。おそらく「Ⅱ」字形の盾面分割をもつものであろう（高橋 1988）。区画の内側には巴文が描かれる。巴文は中央から大きく伸びており、２条一対のものと、３条・４条が一対になる単位がある。区画の外側には、内向・外向を交互に配した鋸歯文が盾面周囲を巡る線刻区画内に描かれる。盾面裏側には、基部と盾面とをつなぐ補強のための粘土が貼り付けられている。家形での例（58・140）との違いは、水平方向に細長く取り付けられていることで、運搬時の把手としても使用されていた可能性が高い。



第43図　Ｐトレンチ出土埴輪３

397は３条の線刻を基調とする綾杉文の描かれたもので、靫形の可能性のあるものである。398・400は線刻による網代文様の表現された家形埴輪の屋根部分である。399は粘土板の接合の様子から家形・盾形とみられる。

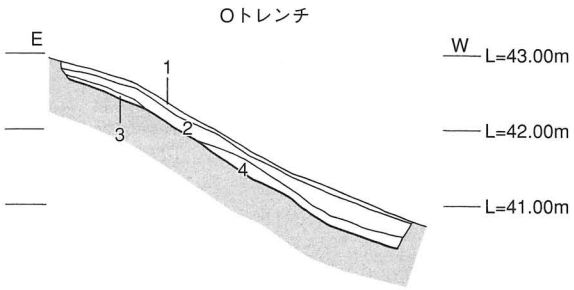
**Ｒトレンチ**（第44図）

後円部南西斜面に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

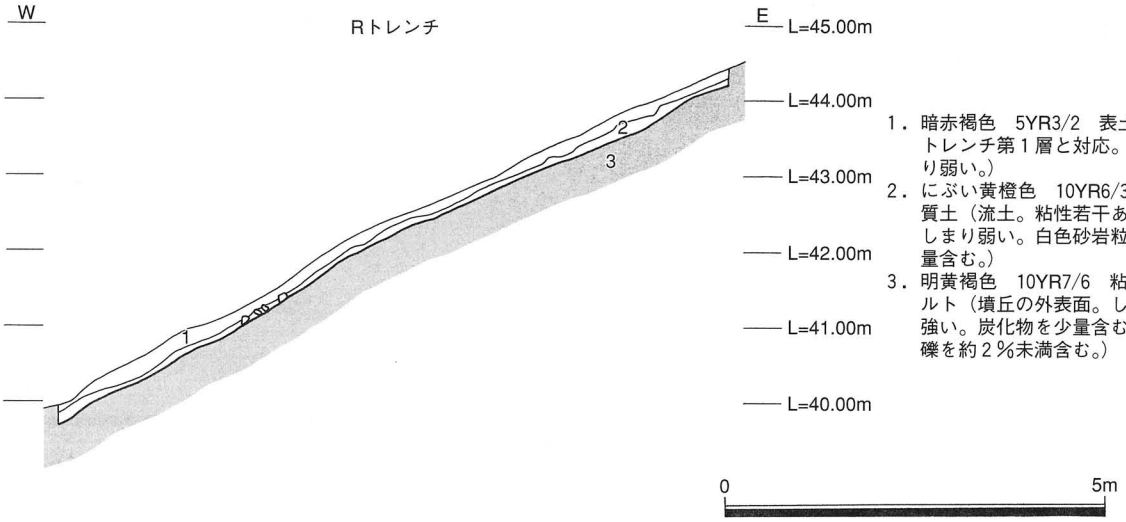
第１段墳丘裾、第１段テラス、第２段墳丘裾は確認できるものの、葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。

**出土遺物**（第45図）

出土した埴輪は小片であるため、詳細は不明である。円筒埴輪は、口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30㎝前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの２者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本と

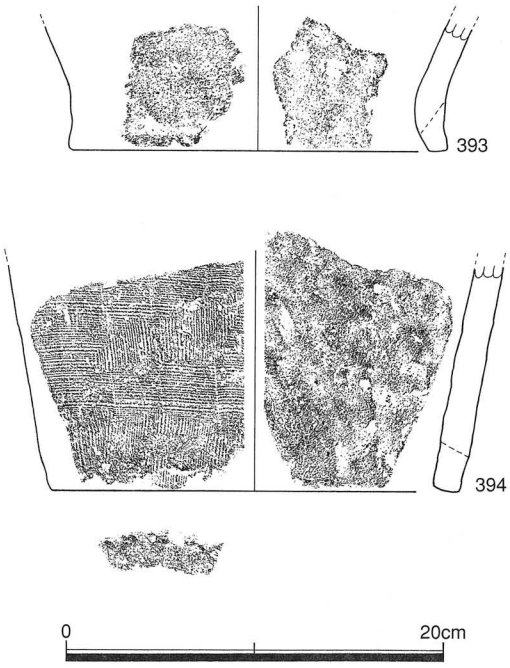



1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（各トレンチ第１層と対応。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土(N トレンチ第２層と対応。流土。しまり弱い。大礫を約５％未満含む。白色砂岩粒および灰白色岩粒の $\phi$=1～3㎜程度の大きさで２％未満含む。）
3．明黄褐色　10YR6/6　粘性シルト（流土。他のトレンチ第３層よりややしまり強い。大礫を約10％程度含む。$\phi$=1～3㎜の白色砂岩を極少量含む。土器片を極少量含む。）
4．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（盛土。粘性なし。しまり強い。大礫を約20％程度含む。$\phi$=1㎜の白色砂岩を約１％未満含む。古墳の外表面。）

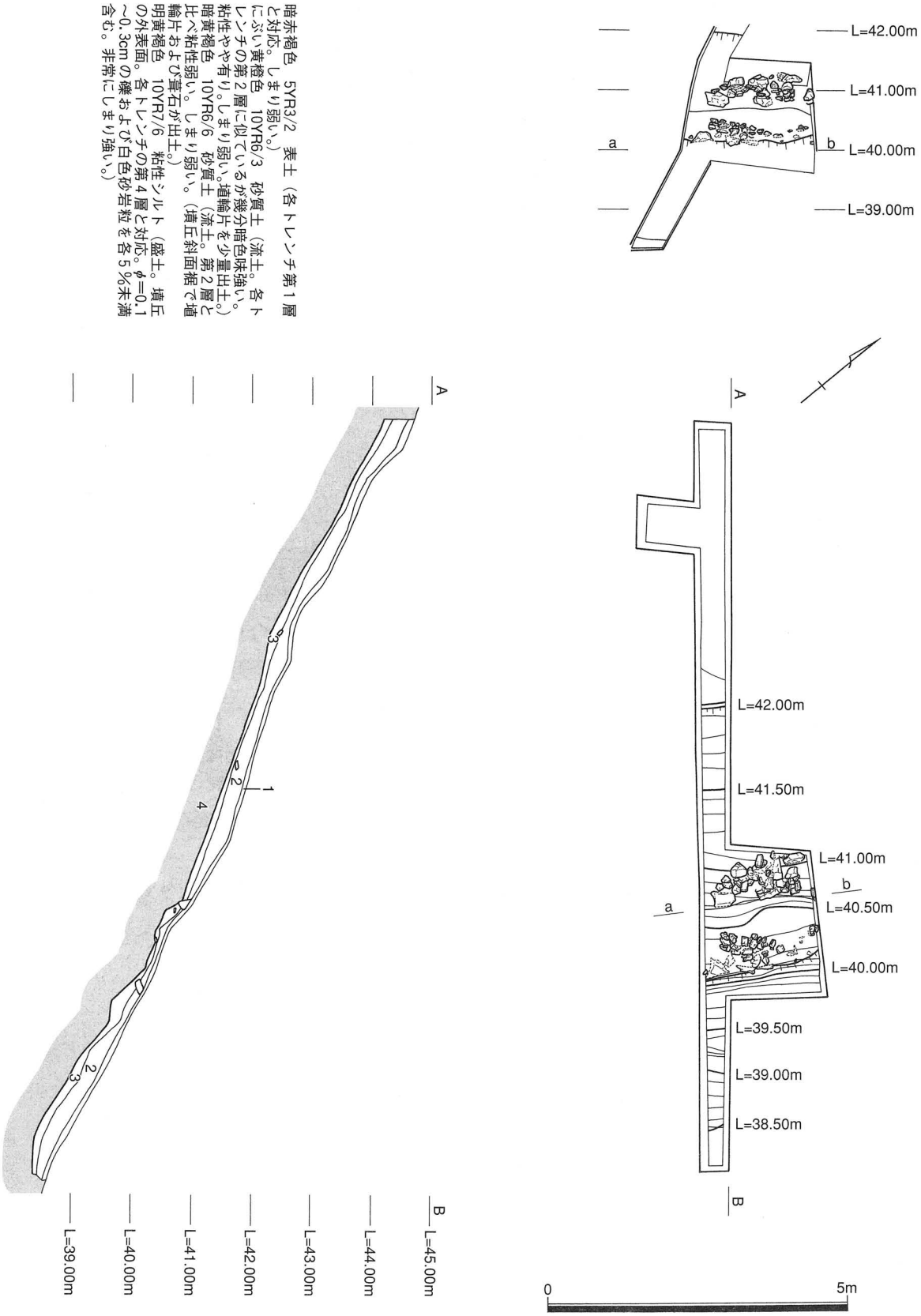



1．暗赤褐色　5YR3/2　表土（各トレンチ第１層と対応。しまり弱い。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（流土。粘性若干あり。しまり弱い。白色砂岩粒を少量含む。）
3．明黄褐色　10YR7/6　粘性シルト（墳丘の外表面。しまり強い。炭化物を少量含む。大礫を約２％未満含む。）

第44図　O・R トレンチ土層断面図

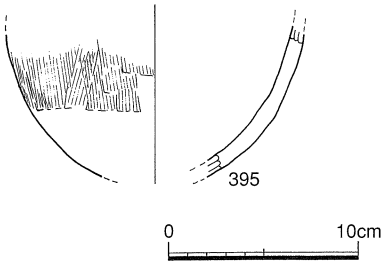



第45図　R トレンチ出土埴輪




第46図　Qトレンチ平・断・立面図

している。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。



第47図　Qトレンチ出土土師器

Sトレンチ（第50図）

後円部北東側、斜面に直交して設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

第1段テラス、第2段外周裾、円筒埴輪列を検出した。また第1段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。流出のため遺存状況は良くないが、出土状況から葺石は墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用する。基底石には人頭大程度のやや大型材を使用し、列石状に裾部に並べる。その上に葺石を墳丘斜面に張り付けるように積み上げて外周を巡らせる。

出土遺物（第51図）

墳丘流土内からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。出土した埴輪片はいずれも小片であるため、詳細は不明である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの2者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については1次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A種ヨコハケによる2次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いA種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

墳丘流土内から出土した朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪片については、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

Tトレンチ（第56図）

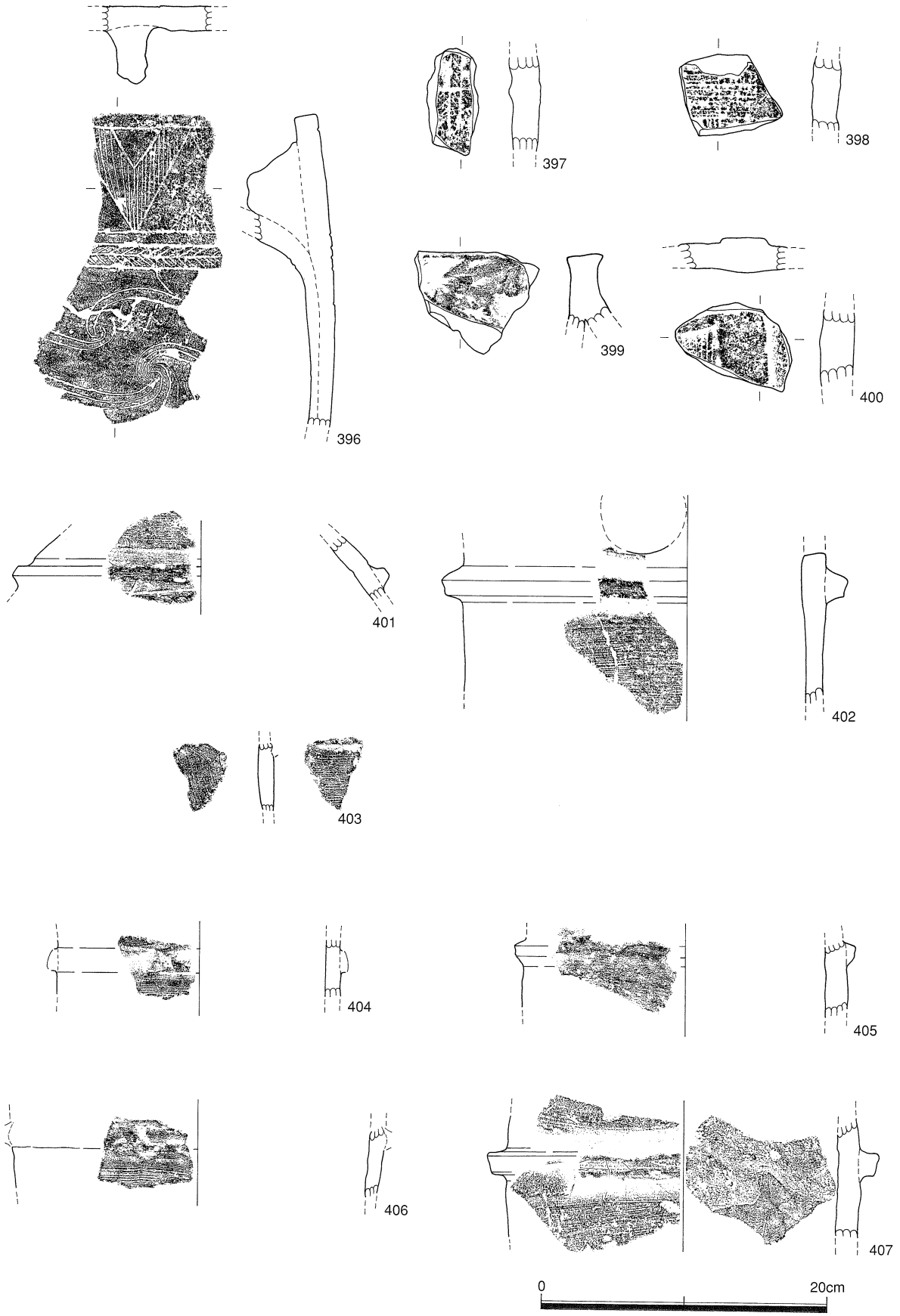
後円部北側斜面から掘割溝にかけて設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。

出土遺物

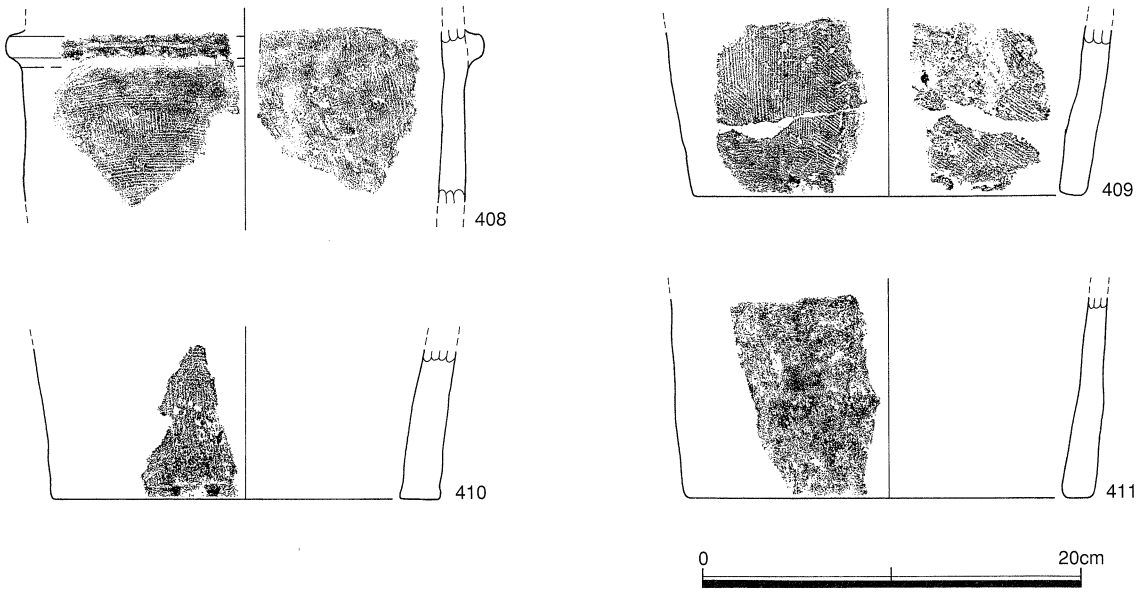
若干の埴輪片が出土したが、いずれも小片のため実測可能なものはなかった。

Uトレンチ（第56図）

後円部北側斜面から掘割溝にかけて設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。




第48図　Ｑトレンチ出土埴輪１




第49図　Q トレンチ出土埴輪 2

出土遺物

若干の埴輪片が出土したが、いずれも小片のため実測可能なものはなかった。

V・W トレンチ（第52図）

前方部前面に設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

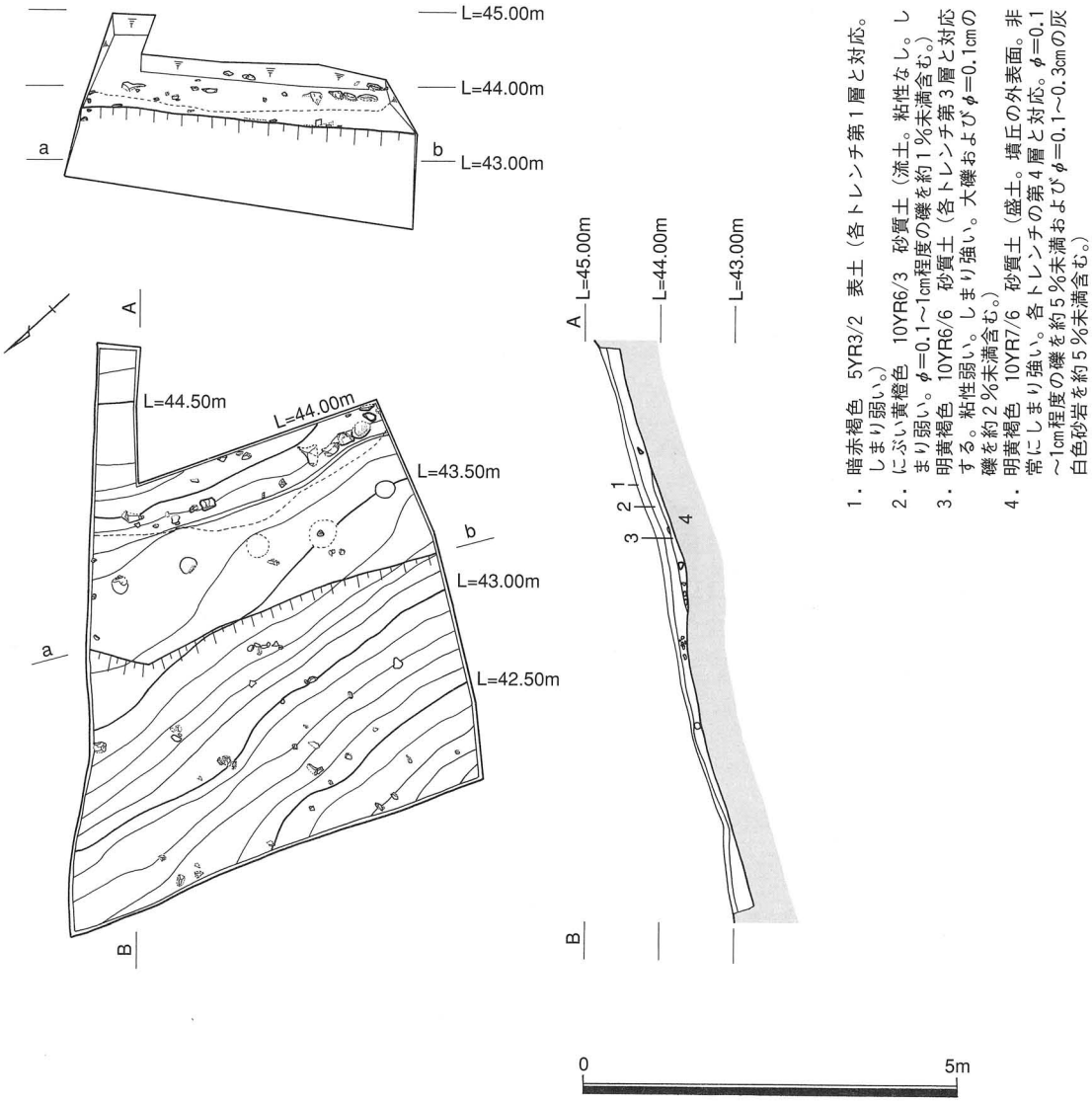
第１段テラス、第２段外周裾、円筒埴輪列を検出した。また第１段テラスにいたる斜面裾部では葺石を一部検出した。出土状況から葺石は墳丘斜面全体にではなく、裾部を列石状に区画していたものと思われる。和泉砂岩を主体とする割石と河原石を併用する。基底石には人頭大程度のやや大型材を使用し、列石状に裾部に並べる。その上に葺石を墳丘斜面に張り付けるように積み上げて外周を巡らせる。

第１段テラス上および前方部第２段前面墳頂平坦面において円筒埴輪の基底部を確認した。基底部は中心点間の距離がいずれも約90cmを測り、一定の基準にもとづいて埋設されたものとみられる。

出土遺物（第53～55図）

墳丘流土内からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。出土した埴輪片はいずれも小片であるため、詳細は不明である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの２者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、A 種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長い A 種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

墳丘流土内から出土した朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪片については、基底部は確認していな




第50図　Ｓトレンチ平・断・立面図

いものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。

415～419は靫形とみられるものである。平行な線刻や、それらを基調とする綾杉文が表現されている。420は笠の縁辺部に家形と同様の押縁が線刻で表現された蓋形である。421は粘土板の接合からみて、盾形あるいは小形の家形であろう。

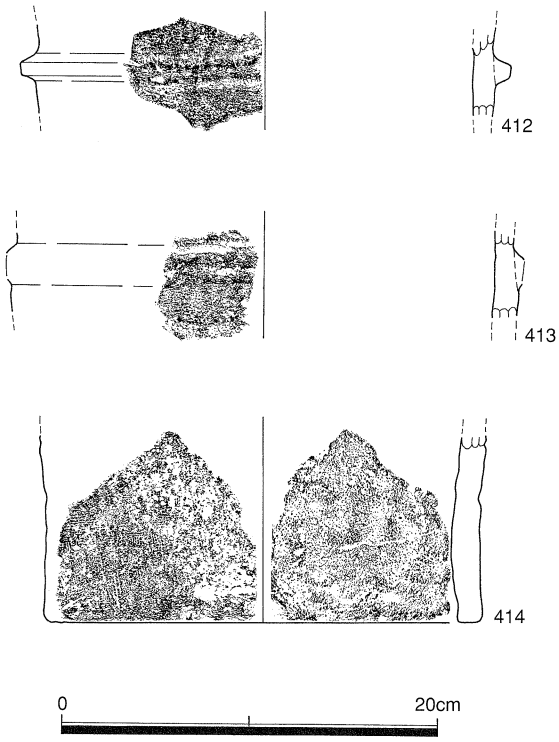
### Ｘトレンチ（第56図）

前方部西側中央、斜面に直交するように設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）となる。トレンチの断面観察においては明瞭な版築状況はみられない。

第１段墳丘裾、第１段テラス、第２段墳丘裾は確認できるものの、葺石・円筒埴輪列の外表施設は検出されていない。

### 出土遺物

墳丘流土中より若干の円筒埴輪片等が出土しているが、小片のため実測可能なものはなかった。




第51図　Ｓトレンチ出土埴輪

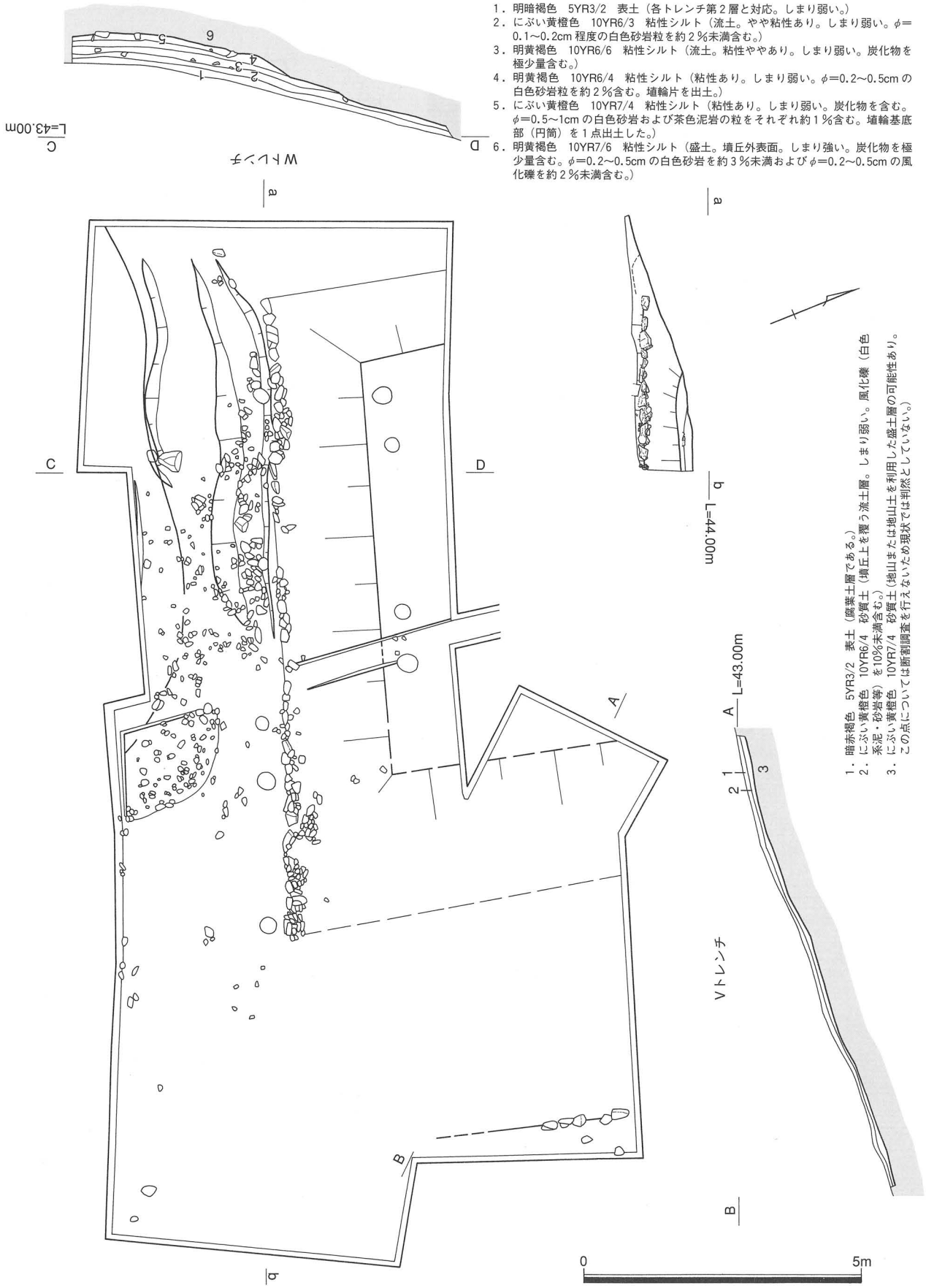
Ｚトレンチ（第56図）

後円部北側斜面から掘割溝にかけて設定したトレンチである。基本層序は表土（腐葉土）・墳丘盛土（流土）・岩盤風化土（地山）・和泉層群岩盤となる。流土中からは外表面から流出した葺石や埴輪片が出土しているが、原位置は遊離している。

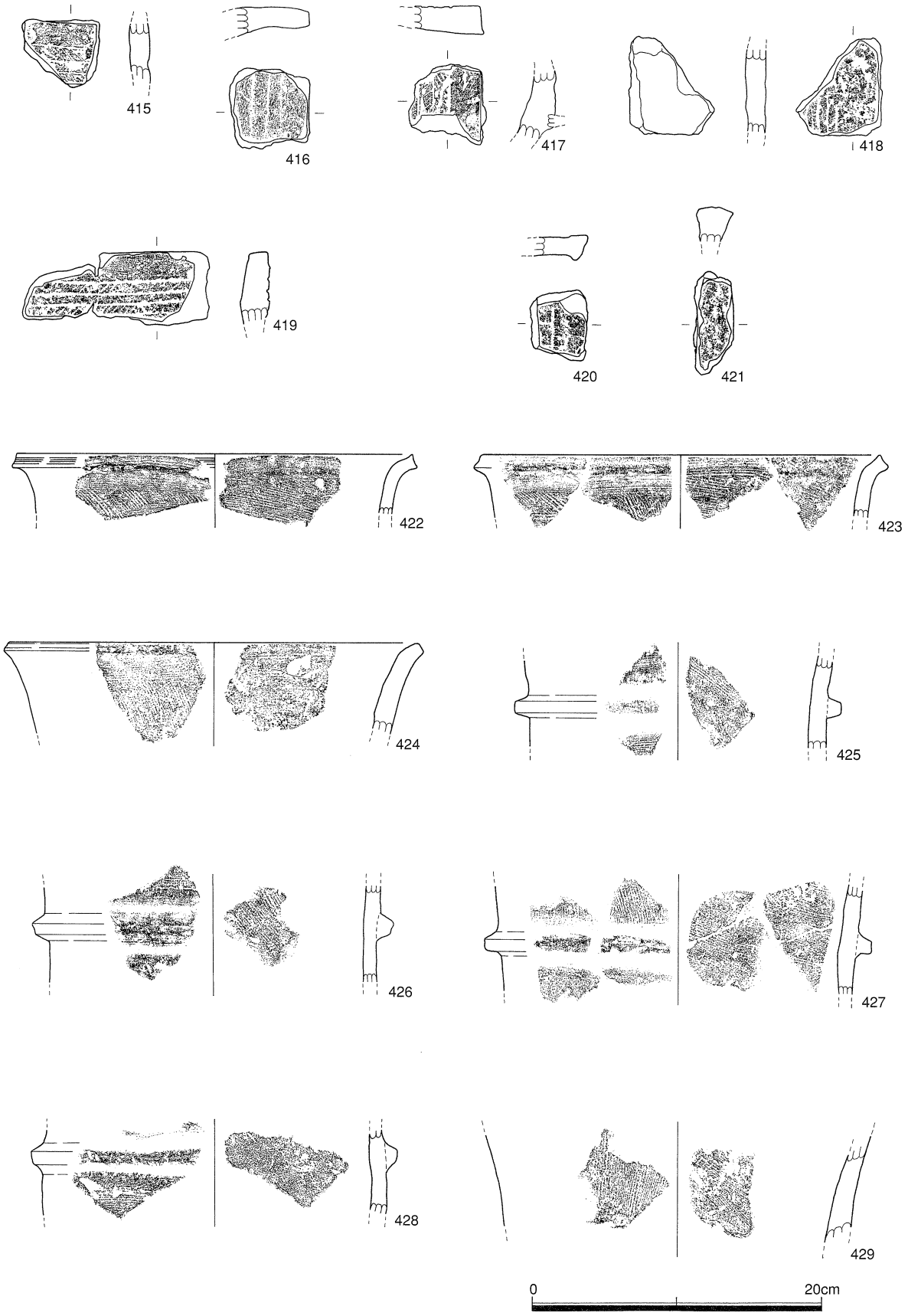
出土遺物（第57図）

若干の埴輪片が出土しているが、いずれも小片のため実測可能なものは少ない。墳丘流土内からは円筒埴輪の他、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪の破片、靫形埴輪の一部である可能性が考えられる形象埴輪小片等が出土している。出土した埴輪片はいずれも小片であるため、詳細は不明である。口縁については口径を計測しうる例が殆ど出土していないが、25～30cm前後のものが主体を占めるものと推定される。口縁端部は面取り調整を施すタイプと、端部内面側を若干摘み上げるタイプの２者がある。胴部には断面台形状を呈するタガが巡るが、その条数については不明である。器面調整は、口縁部外面付近については１次調整として斜位のハケメ調整を施したのち、Ａ種ヨコハケによる２次調整を加える例が多い。胴部中位は比較的ストロークの長いＡ種ヨコハケを主体とする。胴部下位から底部外面にかけてはタテハケを基本としている。以上より出土した円筒埴輪は川西編年のⅡ期後半に比定できるものと判断される（川西 1978）。

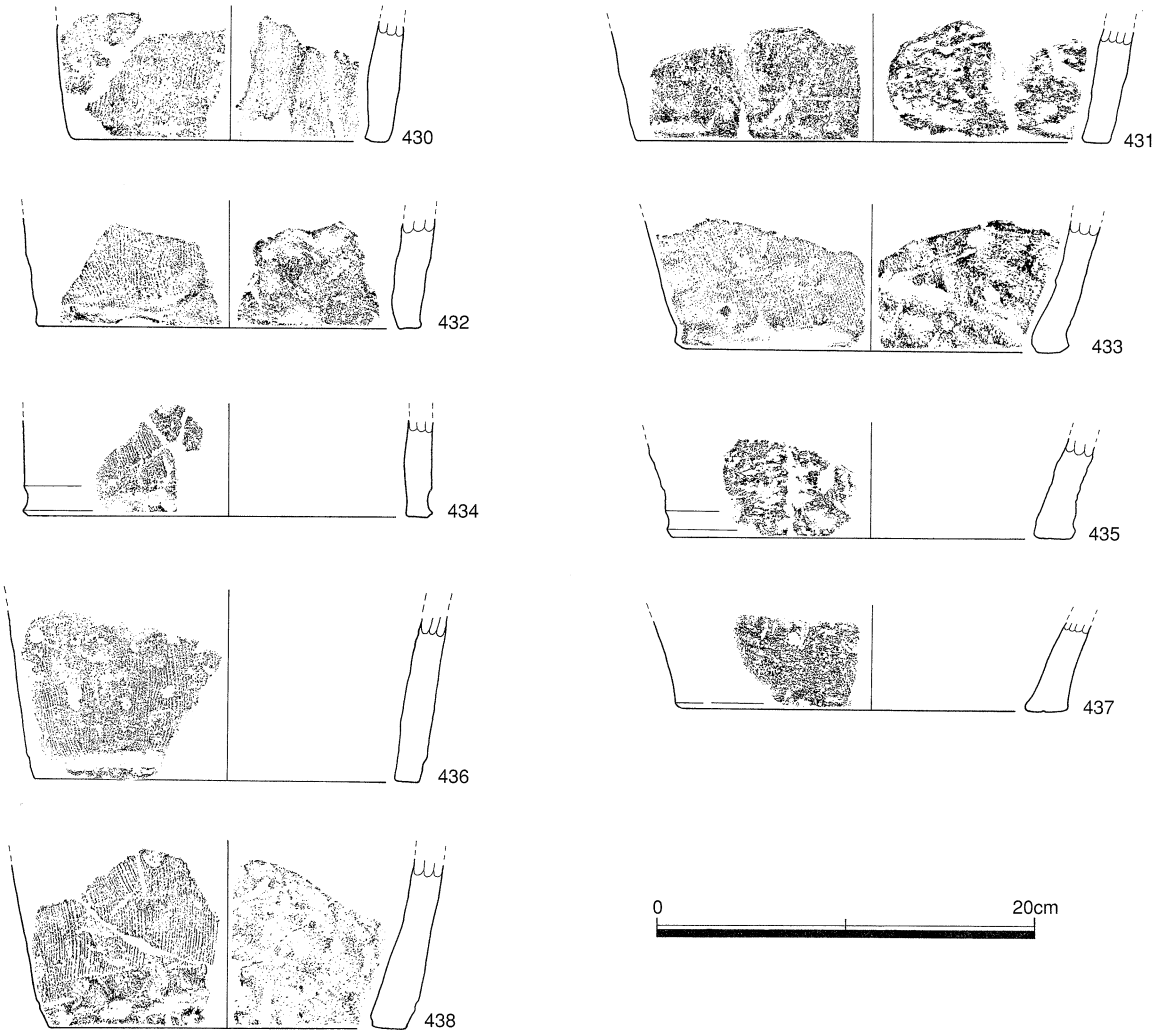
墳丘流土内から出土した朝顔形埴輪、家形埴輪などの形象埴輪片については、基底部は確認していないものの、その出土状況から判断して本来は後円部墳頂に樹立していたものと推定される。



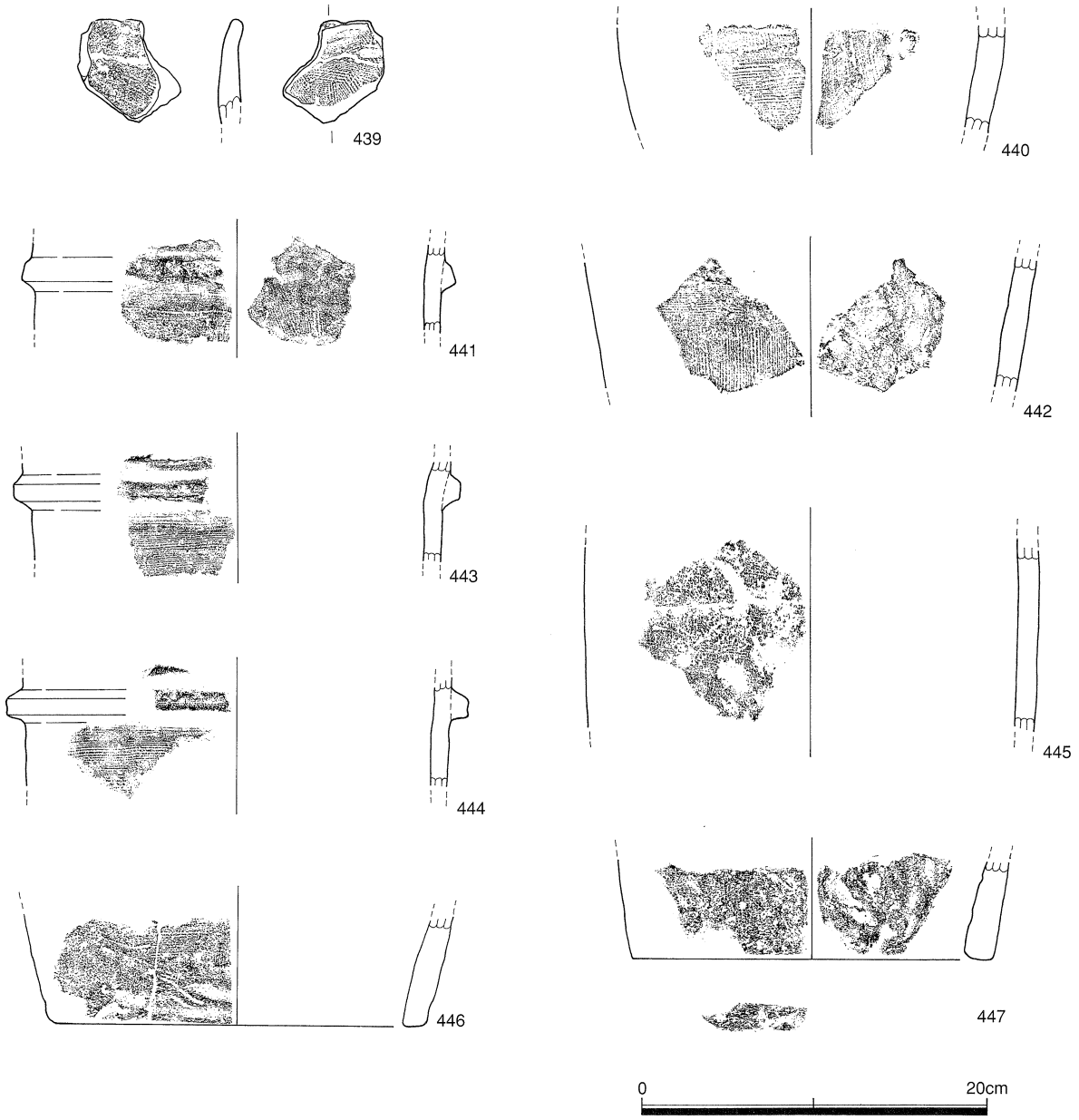

第52図　V・W トレンチ平・断・立面図（前方部前面）




第53図　Wトレンチ出土埴輪1




第54図　Wトレンチ出土埴輪2




第55図　J-W トレンチ出土埴輪